

特63  
605

學 生 文 庫

第四編

新訂

謡

大町 丸岡 桂

月 桂 校訂

曲全集

東京 至誠堂 發兌

明治  
44.8.4  
丙寅

## 學生文庫に冕す

われ聞く、獨逸の中等程度の教育にては、力めて多く古典を課すと。其意に曰く、古典の知識なければ、人物、學問、事業、共に淺薄なるを免れずと。獨逸は新進の國なるが、學問歐米に冠たり、工業亦英國を壓せむとし、國富み、兵強きも、亦以ある哉。我日本は獨逸よりも猶一層新進の國なるが、一躍して世界一等國の列に入り、新興の勢、さすがの獨逸をして後に障若たらしめむとす。而して我國は三千年の金甌無缺の歴史を有し、萬世一系の天皇を戴き、世界無類の國體を有す。即ち我國は世界最古の國なると共に、世界最新の國也。其新興の原因を討ぬるに、獨逸の識者が認めて中等教育に實施せる所は、猶一層早く我國の識者が認めて實施せる所也。然るにわれ近時讀書界の趨向を見る

に、徒に奇を趁ひ、新を求め、皮相なる自然主義にかぶれ、危険なる外來思想にかぶれ、よろづ物質的となり、早く生活の安樂を求め、本を忘れて末に趨り、終に淺薄なる人間となり了らむとす。邦家の前途、嗚呼危い哉。余茲に慨する所あり。學生文庫を編み、古典的名著を選び、初學の士の讀誦に充てむとす。益ありて毫も害なきは、余の深く期する所也。前途有爲の士、願くは之に由りて、精神上の好食物を得よ。修養に供せよ。人格の深厚を致せ。餘裕を得よ。清き娛樂を得よ。猶謹んで告ぐ、善く書を讀め。書に讀まるゝこと莫れ。

大 町 桂 月

謠曲全集に冕す

さる音樂家の話しに、我國の三味線ほど靈妙なる樂器は、世界に其比を見すとのことなるが、三味線は、徳川時代、平民文學が勃興すると共に出來たるものにて、妙は妙なれども、之に合はする謠ひ物と彈く者との聯想よりして、上品にはあらずとの感なきを得ず。三味線に合はする謠物とは、長唄あり、端歌あり、諸種の淨瑠璃あり、都々逸あり。その他、數ふるに違あらざるが、すべて、徳川時代に出來たる謠ひ物は三味線に合ふと云ひて可也。その謠物は所謂平民文學の一種にて、藝術としての價値は暫らく措き、單に上品か下品かと云へば、上品とは思はれざる也。中には、中流以上の眞面目なる家庭に入るべからざるものも多し。明治の世に出來たる唱歌軍歌は幼稚の氣あるを免れず。詩吟は單調に過ぎ、薩摩琵琶は激越に失す。紳士の謠ひ物として、兼ねて家庭の清樂として、謠曲だけが幾

んど專賣特許の觀を呈す。謠曲も明治の世になりて一時は衰へたりしが、近年にいたりて、年一年に流行を増し、苟くも紳士にして音樂を解する者、謠曲をもてはやさるは無し。徳川時代に出來たる謠ひ物に比すれば、遙に上品也。さればとて、古樸にも失せず。一口に言へば、紳士的也。紳士の音樂として、日本音樂の美を發揮せるもの、將來は知らず、今の處、謠曲を措いて他に之あるべしとも思はれざる也。

謠曲は謠ひもの也。即ち紳士的音樂也。其地となれるものは、謠曲の文也。即ち足利時代を代表せる一大文學也。而して謠曲の舞臺に演ぜらるゝものを能と稱す。後世の芝居の前身なるが、未成品には非ず。能は能として獨立したる一種の舞樂也。眞に芝公園の能樂堂靖國神社に移され近時は皇后陛下、皇太子殿下の御覽を得るやうになり、能樂が社會の耳目を動かすにつれて、謠曲はますます紳士の間に行き。音樂を離れて、單に文藝としても、日本の紳士たるもの、謠曲を讀まざるべけんや。

今茲に謠曲の起源を尋ぬるに、今より凡そ五百年前、即ち足利時代に出來たるもの也。中古以來、猿樂といふもの行はれたり。猿の音樂には非ず、支那の散樂を日本的に訓みたるもの也。即ち神前に奏する茶番の如き舞樂也。鎌倉時代になりて、田樂行はれ、それに歷史上の事跡を演ずるやうになりて、田樂の能と稱せらる。足利時代になりて、猿樂にも歴史上の事跡を演ずるやうになりたり。これを猿樂の能といふ。田樂の能は、いつしか衰へて、能と云へば、猿樂の能の事となれり。能は見ることを主にしたるものにて、殊に將軍の前に演ぜられたるもの也。歌之に伴ふ。其歌が即ち謠曲也。歌を離れては能樂なし。されど、舞を離れても、謠曲はあり。なほ歌と舞とを離れても、謠曲の文は、別に獨立す。然るに、もと歌舞に伴はれたる副産物とて、作者の名は幾んど傳はらず。中には傳はれるもあれど、確なる證據あるに非ず。歌舞の方面を大成したるものは、觀阿彌父子なりとして傳へらる。觀阿彌は本名を結崎清次といふ。春日神社に事へた

る猿樂の家元也。其子元清、世阿彌と稱す。共に足利義滿の恩顧を受けた。この父子が觀世流の元祖也。なほ寶生、金春、金剛の三流も之と呼應して起れり。いづれも春日神社に奉仕したる猿樂の家元也。今日の能樂は、足利義滿の時より足利義政の時へかけて完成したり。要するに、能は猿樂の發達したるものにて、田樂を加味し、その他、今様なども參酌し、あらゆる當時の舞樂の粹をとりて大成したるもの也。謠曲の方は、平家の語り方や、和讃や、今様の謠ひ方や、其他あらゆる當時の謠ひもの、粹を採りて大成したるもの也。平家の如く單に謠ふのみならず、舞臺に上ぼすに至りたるには、支那の傳奇雜劇の影響もあるべしと稱せらる。謠曲の文は平家物語を採りたる節もあり。今様を採りたる節もあり。對話は當時の言語を醇化したるとおぼしく、對話と地の文とよく調和し、錯綜して變化多く、殊に古歌や古句を巧に配合し、補綴して、詞藻粲然、古文學を知れるものをして一層の興味を感ぜしむ。謠曲の文も、あらゆる當時の文學の粹

を採りて大成したるもの也。鼓、笛などの樂器も加はりて、能は當時の藝術を集成したる一大藝術也。謠曲の内容に至りては、佛教の臭味多く、解脱を示したること多きが、目出度きこと、物のあはれと云ふことは、到處に寓せらる。目出度き君が代、猛きのみが武士に非ず、武士は物のあはれを知るといふことは、當時中流以上の一般感情なりき。人情に古今なし。今の世とても、中流以上の一般感情には、謠曲依然として相合する所あるべし。謠曲が五百年の久しきを経て衰へざるは、以て其紳士的、否、日本武士的なるを知るべし。

現今行はるゝ謠曲、二百數十番あり。本書は主として觀世流謠本編成の順序に従ひて載録したるが、他四流の謠本の順序を見慣れたる者及び一般の讀者の便を思ひて、別に五十音順の索引を附せり。謠曲の創作は五百年前の事なれば、現今傳ふる所は、誤謬少からず。本書は力めて創作時代の原文に近きものを載録せんため、最古の板本たる光悅本(慶長三年板)、及び

續きて刊行せられたる元和本、寛永本、元禄本等を原稿とし、現今謠ふ所の相違せるものは、一々細字を以て註せり。然れども本書が基本としたる光悦本と雖も、創作時代をさること二百餘年の後に出来たるものなれば、誤謬あること明かにして、なほ由りて考へ難き章句も少なからず。此場合には、其出典を究めて發見したる所を、これ亦細字を以て記入せり。又本書は讀者の便を計り、各曲名の下に、其古名及び流義によりて異なる別名を掲げ、又登場の人名をも併せ記せり。

以上は本書校訂の大要なるが、余は謠曲に於て門外漢也。學友丸岡桂君斯道の研鑽を積むこと久し。今同君に乞ひ、指導を受けて此書を訂成したるもの也。

大町桂月

新謠曲全集上巻目次

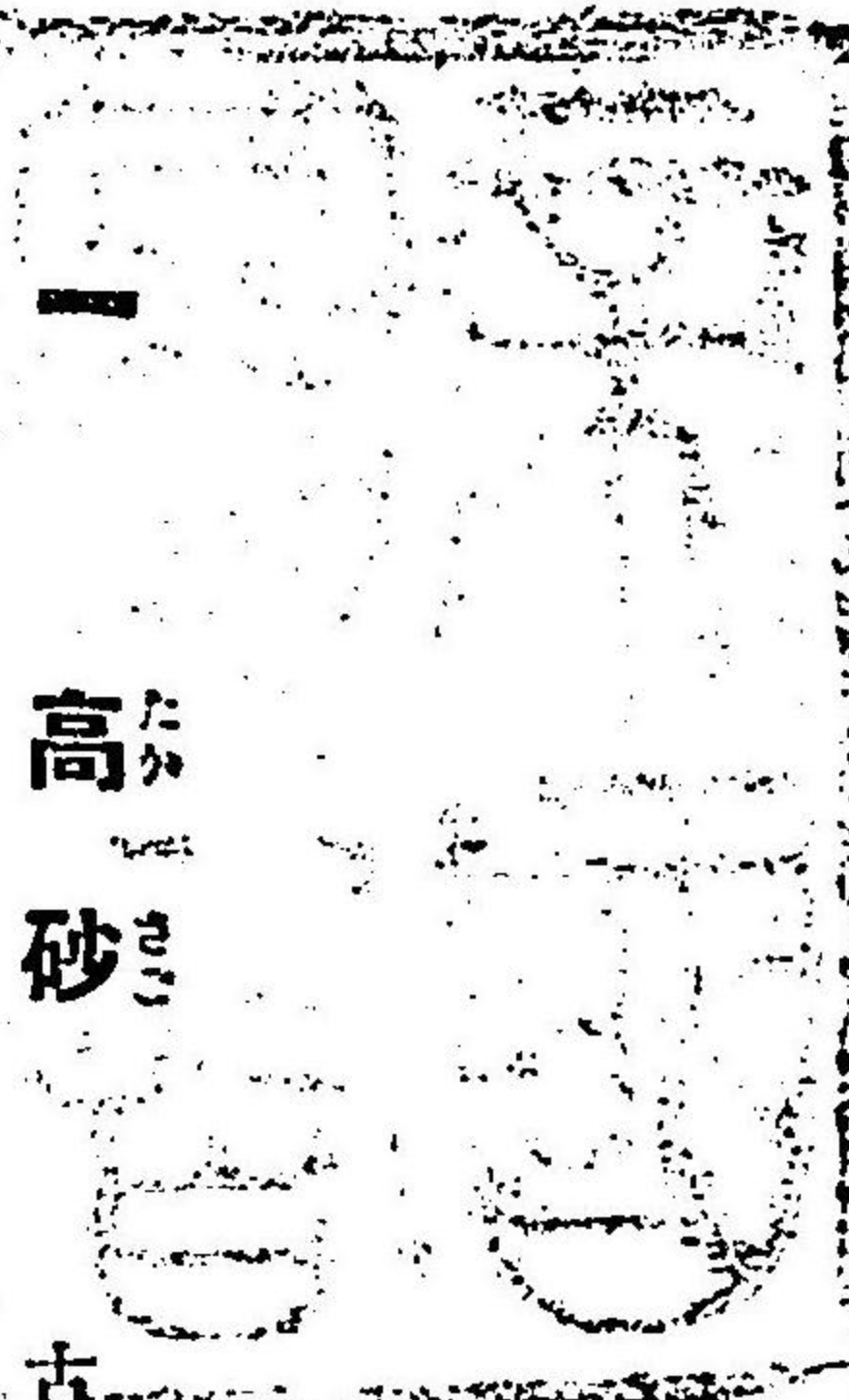
一	高砂	一
二	田村	六
三	江口	二
四	班女	一七
五	鶉飼	二三
六	難波	二八
七	兼平	三三
八	千手	四〇
九	卒都婆小町	四六
一〇	紅葉狩	五一
一一	老松	五六
一二	頼政	六〇

一三	井筒	六六
一四	三井寺	七〇
一五	天鼓	七七
一六	白樂天	八三
一七	實盛	八八
一八	楊貴妃	九五
一九	玉葛	一〇〇
二〇	融	一〇四
二一	養老	一〇
二二	清經	一五
二三	采女	二一
二四	通小町	二七
二五	小袖曾我	三一
二六	竹生島	三七
二七	朝長	四一

二八	姨捨	一四八
二九	柏崎	一五二
三〇	阿漕	一五九
三一	志賀	一六四
三二	鶴	一六八
三三	大原御幸	一七三
三四	梅枝	一八〇
三五	誓願寺	一八五
三六	蟻通	一九一
三七	忠度	一九五
三八	熊野	二〇一
三九	遊行柳	二〇八
四〇	藤戸	二一三
四一	玉井	二一八
四二	景清	二二三

四三	杜若	二三一
四四	二人静	二三六
四五	安達原	二四〇
四六	賀茂	二四五
四七	俊寛	二五一
四八	松風	二五六
四九	西行櫻	二六二
五〇	浮舟	二六八
五一	吳服	二七二
五二	八島	二七七
五三	鸚鵡小町	二八四
五四	葛城	二八九
五五	當麻	二九四

新訂 謡曲全集 上卷



高砂

古名

相生

前ジテ 松の精(松)

後ジテ 住吉明神 神宮友成

大町 丸岡 桂月 新訂

高砂

ワキ(特選) 今を始めるの旅衣。今を始めるの旅衣。日も行末ぞ久しき。阿そもそもこれは九州肥後の國。阿蘇の宮の神主友成とは我が事なり。われいまだ都を見ず候程に。此度思ひ立ち都に上り候。又よき次なれば。播州高砂の浦をも一見せばやと存じ候。遊行旅衣 未はるばるの都路を。未はるばるの都路を。けふ思ひ立つ浦の浪。船路のどけき春風の(「も」と「あ」)。幾日来ぬらん跡末も。いさ白雲のばるばると。さしも思ひし播磨海。高砂の浦に著きにけり。高砂の浦に著きにけり。

シテ(若翁)ツレ(若姥)二人語、高砂の松の春風明け暮れて(各流語りて「吹き」)。尾上の鐘も響くなり。ツレ「波は霞の磯がくれ。二人「音こそ潮の満干なれ。シテ「誰をかも知る人にせん高砂の。松も昔の友ならで。二人「過ぎ來し世世は白雪の。積り積りて老の鶴の。埒に残る有明の。春の霜夜の起居にも。松風をのみ聞き馴れて。心を友と菅席の。思を逃ぶるばかりなり。音つれば松にこととふ浦風の。落葉衣の袖添へて。木蔭の塵を搔かうよ。木蔭の塵を搔かうよ。所は高砂の。所は高砂の。尾上の松も年ふりて。老の波も寄り來るや。木の下蔭の落葉かくなるまで命ながらへて。猶いつまでか生の松。それも久しき名所かな。それも久しき名所かな。

ワキ、團「里人を相待つ所に。老人夫婦來れり。いかにこれなる老人に尋ねべき事の候。シテ「こなたの事にて候か何事にて候ぞ。ワキ「高砂の松とはいづれの木を申し候ぞ。シテ「唯今木蔭を清め候こそ高砂の松にて候へ。ワキ「高砂、住の江の松に相生の名あり。當所と住吉とは國を隔てたるに。何とて相生の松とは申し候ぞ。シテ「仰せの如く古今の序に。高砂住の江の松も。あひおひのやうに覺えとあり。さりながら此尉は津の國住吉の者。これなる姥こそ當所の人なれ。知る事あらば申さ給へ。

ワキ、團「ふしぎや見れば老人の。夫婦一所にありながら。遠き住の江高砂の。浦山國を隔て、住むと。いふはいかななる事やらん。ツレ「うたての仰せ候や。山川萬里を隔つれども。互に通ふ心づかひの。妹脊の道は遠からず。シテ、團「まづ案じても御覽せよ。シテ、ツレ「二人語、高砂住の江の。松は非情のものだにも。相生の名はあるぞかし。ましてや生ある人として。年久しくも住吉より。通ひ馴れたる尉と姥は。松もるともに此年まで。相生の夫婦となるものを。ワキ「謂を聞けば面白や。さてきてさきに聞えつる。相生の松の物語を。所に云ひ置く謂は無きか。シテ、團「昔の人の申しは。これはめでたき世のためしなり。ツレ、團「高砂といふは上代の。萬葉集のいにしへの義。シテ、團「住吉と申すは。今此御代に住み給ふ延喜の御事。ツレ、團「松とは盡きぬ言の葉の。シテ、團「榮えは古今相同じと。シテ、ツレ「二人語、御代を崇むる喻なり。ワキ「よくよく聞けばありがたや。今こそ不審春の日の。シテ「光和と西の海の。ワキ「かしこは住の江。シテ「こゝは高砂。ワキ「松も色添ひ。シテ「春も。ワキ「長閑に。團「四海浪靜にて。國も治まる時つ風。枝を鳴らさぬ御代なれや。逢ひにあひおひの。松こそめでたかりけれ。げにや仰きても。ことも愚やかゝる世に。住める民として



豊なる。君の恵みぞありがたき。君のめぐみぞありがたき。

ワキ、國「猶猶高砂の松のめでたき謂委しく御物語り候へ。地、嗚「それ草木心無しとは申せども。花實の時をたがへず。陽春の徳を備へて南枝花始めて開く。シテ、然れども此松は其氣色とこしなへにして花葉時を別す。地、四の時至りても。一千年の色雪のうちに深く。又は松花の色十返とも云へり。かゝるたよりな松が枝の。地、言の葉草の露の玉。心を磨く種となりて。シテ、生きとし生ける物ごとくに。地、敷島のかげに寄るとかや。然るに長能(謠曲には)が言葉にも。有情の其聲みな歌にもるゝ事なし。草木土沙風聲水音まで萬物のこもる心あり。春の林の東風に動き。秋の虫の北露に啼くも。皆和歌の姿ならずや。中にも此松は萬木に勝れて。十八公のよそほひ。千秋の縁をなして。古今の色を見ず(誤りて見すと流るる流るるの古今)。始、皇の御爵にあづかるほどの木なりとて。異國にも。本朝にも。萬民、これを賞翫す。シテ、高砂の尾上の鐘の音すなり。地、曉かけて霜は置けども。松が枝の葉色は同じ深みどり。立ち寄る陸の朝夕に。掻けども落葉の盡させぬは。眞なり松の葉の。散り失せずして色は猶。正木のかづら長き世の。喩なりける常磐木

の。中にも名は高砂の。末代のためしにも相生の松ぞめでたき。

地、嗚「げに名を得たる松が枝の。げに名を得たる松が枝の。老木の昔あらはして。其名をなのり給へや。シテ、ツレ、二人「今は何をかつゝむべき。これは高砂住の江の。相生の松の精。夫婦と現じ來りたり。地、ふしきやさては名所の。松の奇特を現して。二人「草木心なけれども。地、畏き代とて。二人「土原(草)も木も。地、我が大君の國なれば。いつ迄も君が代に。住吉にまづ行きて。あれにて待ち申さんと。夕波の汀なる。海士の小舟にうち乗りて。追風にまかせつゝ。沖の方に出でにけりや。沖の方に出でにけり。(中入)

ワキ、嗚「高砂や。此浦舟に帆をあげて。此浦舟に帆をあげて。月もろともに出で沙の。波の淡路の島影や。遠く鳴尾の沖過ぎて。早や住の江に著きにけり。はや住の江に著きにけり。

後シテ(住吉明神)嗚「われ見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松幾世経ぬらん。睦まじと君は知らずや瑞垣の。久しき世々の神かぐら。夜の鼓の拍子を揃へて。すゝしめ給へ。御奴たち。地、西の海。楳が原(謠曲誤りて「あまき)の浪間より。シテ「あらはれ出でし神松の。春なれや。殘んの雪の淺香洩。地、玉

藻刈るなる岸蔭の。シテ「松根に倚つて腰を摩れば。地」千年の翠手に満てり。シテ「梅花を折つて頭に挿せば。地」二月の雪衣に落つ。(神舞)「ありがたの影向や。ありがたの影向や。月住吉の神遊。御影を拜むあらたさよ。シテ」げにさまさまの舞姫の、聲も澄むなり住の江の。松影も映るなる。青海波とはこれやらん。地「神と君との道直に。都の春に行くべくは。シテ」それぞ還城樂の舞。地「さて萬歳の。シテ」小思衣。地「さす腕には悪魔を拂ひ。なまむる手には壽福を抱き。千秋樂は民を撫で。萬歳樂には命を延ぶ。相生の松風颯々の聲ぞたのしむ。颯々の聲ぞ楽しむ。

二 田村

ワキ 田村丸の(前)前は花守

ワキ(花守)「鄙の都路隔て来て。鄙の都路隔て来て。九重の春に急がん。地」これは東國方より出でたる僧にて候。われ未だ都を見ず候ほどに。此春思ひ立ちて候。進行、進頃もはや彌生なかばの春の空。彌生半の春の空。影も長閑にめぐる日の。霞む其方や音羽山。流の響も靜かなる。清水寺に著きにけり。清水寺に著きにけり。地「急ぎ候ほどに。これは都清水寺とかや申すげに候。こ

れなる櫻の盛と見えて候。人を待ちて委しく尋ねばやと思ひ候。シテ(花守の童子)「おのづから春の手向となりけり。地主権現の花盛。それ花の名所多しといへども。大悲の光色添ふ故か。此寺の地主の櫻に若くはなし。さればにや大悲大悲の春の花。十惡の里にかうばしく。三十三身の秋の月。五濁の水に影清し。千早ぶる神の御庭の雪なれや。白妙に雲も霞もうづもれて。雲も霞も埋もれて。何れ櫻の梢ぞと。見渡せば八重一重。げに九重の春の空。四方の山並おのづから。時ぞと見ゆる氣色かな。時ぞと見ゆる氣色かな。ワキ「阿」いかにこれなる人に尋ね申すべき事の候。シテ「此方の事にて候か何事にて候ぞ。ワキ」見申せばうつくしき玉帯を持ち。木蔭を清め給ひ候は。もし花守にて御入り候か。シテ「さん候これほ此地主権現に仕へ申す者なり。いつも花の頃は木蔭を清め候ほどに。花守とや申さん。又御奴とや申すべき。いづれに由ある者と御覽候へ。ワキ」げにげに由ありげに見えて候。まづまづ當寺の御來歴。委しく語り給ふべし。シテ「物置」そもそも當寺清水寺と申すは。大同二年の御草創、坂上の田村丸の御願なり。昔大和の國子島寺と云ふ所に。賢心(蓋木假名世なりしにより)といへる沙門。正身

の觀世音を拜まんと誓ひしに。ある時木津川の川上より。金色の光さしを。尋ね登つて見れば  
一人の老翁あり。彼の翁語つて曰く。われは是行觀居士といへり。汝一人の檀那を待ち。  
大伽藍を建立すべしとて。東をさして飛び去りぬ。されば行觀居士といつば。これ觀音薩埵の御  
再誕。また檀那を待てとありしは。これ坂上の田村丸。地今もその名に流れたる清水の。  
名に流れたる清水の。深き誓ひ(原作用不明)も數々に。千手の御手のとりどり様々の誓ひ普く。國土  
萬民をもらさじの。大悲の影ぞありがたき。げにや安樂世界より。今此娑婆に示現して。われら  
が爲の觀世音あふぐも愚なるべしや。あふぐもおろかなるべしや。

ワキ、近頃面白き人に參りあひて候ものかな。又見え渡りたるは皆名所にてぞ候らん御教へ候へ。  
シテ、さん候皆名所にて候。御尋ね候へ教へ申し候べし。ワキ、まづ南に當つて塔婆の見えて候は。  
いかなる所にて候ぞ。シテ、あれこそ歌の中山清閑寺。今熊野まで見えて候へ。ワキ、また北に當  
つて入相の聞え候は。いかなる御寺にて候ぞ。シテ、あれば上見ぬ尾の寺。や。御覽候へ音羽  
の山の嶺より。出でたる月のかゝやきて。此地主の櫻に映る氣色。まづまづこれこそ御覽じ事な

れ。ワキ、げにげにこれこそ暇惜しけれ。異心なき春の一時。シテ、げにげに惜しむべし。ワキ、惜む  
べしや。二人春宵一刻。價千金。花に清香月にかげ。シテ、げにげに千金にも代へじとは。今此時  
かや。地、あらあら面白の地主の花の氣色やな。櫻の木の間漏る月の。雪もふる夜嵐の。誘ふ花  
と連れて散るや心なるらん(以上三句原作用不明)。さぞな名にしおふ。花の都の春の空。げに時めける  
粧ひ青楊の影縁にて。風長閑なる音羽の瀧の白糸の。くり返しかへしても面白やありがたやな。地  
主權現の花の色もことなり。シテ、唯頼め標芽が原のさしも草。地、われわれ世の中にあらん限りはの  
御誓願。濁らじものを清水の。縁もさすや青柳の。げにも枯れたる木なりとも。花櫻木のよそ  
ほひ。いづくの春もおしなめて。長閑き影は有明の。天も花に酔へりや。おもしろの春べや。あら  
面白の春べや。  
地、げにげにや氣色を見るからに。常人ならぬ粧ひの。其名いかなる人やらん。シテ、いかにいかにとも。いさや  
其名も白雪の。跡を惜しまば此寺に。歸る方を御覽せよ。地、歸る歸るやいづく蘆垣の。間近き程か遠  
近の。シテ、たづたづきも知らぬ山中に。地、おぼおぼつかなくも思ひ給は。我が行く方を見よやとて。地主

権現の御前より下るかと思へしが。くだりはせて坂の上の。田村堂の軒もるや。月のむら戸を押  
し開けて。うちに入らせ給ひけり。内陣に入らせ給ひけり。(申入)

ワキ、夜もすがら散るや櫻の蔭に居て(「ねて」と詠ふ流義あり。「あ」の字無)。散るや櫻の蔭に居て。花も妙なる  
法の場。迷はぬ月の夜と共に。此御經を讀誦する。此御經を讀誦する。

後ジテ(田村丸の懸)「あらありがたの御經やな。清水寺の瀧津浪。まこと一河の流を汲んで。他生の  
縁ある旅人に。言葉を交す夜聲の讀誦。これぞすなはち大慈大悲の観音擁護の結縁たり。  
ワキ、「ふしぎやな花の光にかゝりやきて。男體の人の見え給ふは。いかなる人にてましますぞ。シテ、今  
は何をかつゝむべき。人皇五十一代。平城天皇の御宇にありし。坂上の田村丸。地「東夷を平ら  
げ悪魔を鎮め。天下泰平の忠勤たりしも。則ち當寺の佛力なり。然るに君の宣旨には。勢州鈴  
鹿の悪魔を鎮め。都鄙安全になすべしとの。仰せによつて軍兵を調へ。既に赴く時節に至りて。  
此觀音の佛前に参り。祈念をいたし立願せしに。シテ「ふしぎの瑞驗あらたなれば。地「歡喜微  
咲の頼みをふくんで。急ぎ凶徒に。打つ立ちけり。普天の下。卒土の中。いづく王地にあらざる

や。頼て名にしおふ。關の戸さいで逢坂の。山を越ゆれば浦波の。粟津の森やかげるふの。石山寺  
を伏し拜み。これも清水の一佛と。頼みは合ひに近江路や。勢田の長橋ふみならし。駒も足並やい  
さむらん。シテ「既に伊勢路の山近く。地「弓馬の道もさきかけんと。かつ色みせたる梅が枝の。花  
も紅葉も色めきて。猛き心はあらかねの。土(原歌「原」も木も我が大君の神國に、もとより觀音の御  
誓ひ。佛力といひ神力も。猶數々にますらなが。待つとは知らでさを鹿の。鈴鹿の御祓せし世々  
までも。思へば佳例なるべし。

地「さるほどに山河を動かす鬼神の聲。天に響き地に満ちて。萬木千山(古來「萬木千山」とは、  
ふ。但し明和以前の「千山」の山ありとや否やを知らず。)動搖せり。シテ、詠「いかに鬼神もたしかに聞け。昔もさる例  
あり。千方といひし逆臣に仕へし鬼も。王意を背く天罰にて。千方をすつれば忽ち亡び失せしぞか  
し。蓋ましてや間近き鈴鹿山。地「ふりさけ見れば伊勢の海。ふりさけ見ればいせのうみ。阿濃の  
松原むらだち來つて。鬼神は黒雲鐵火をふらしつゝ。數千騎に身を變じて。山のごとくに見え  
たるところに。シテ「あれを見よ。ふしぎやな。地「あれを見よ。ふしぎやな。身方の軍兵の旗の

上うへに。千手せんじゆくわんおん觀音ひかりの光ひかりを放はなつて虚空こくうに飛行ひきやうし。千せんの御手みて毎ごとに。大悲だいひの弓ゆみには。智惠ちゑの矢やをはめて。  
 一ひと度たび放はなせば千せんの矢やさき。雨あめ霰あられとふりかゝつて、鬼神きじんの上うへに亂みだれ落おつれば。ことごとく矢先やまきにかゝ  
 つて鬼神きじんは殘のこらず討うたれにけり。ありがたし。ありがたしや。眞まことに咒しゆ咀そ諸しよ毒どく藥やく念ねん彼び。觀音くわんおんの力ちからを  
 合あせてすなはち還げんじやく著おほん於にん本人にん。すなはち還げんじやく著おほん於にん本人にんの敵かたきは亡ほろびにけり。是これ觀音くわんおんの佛力ぶつりきなり。

三 江 口

シテ 江口の君の國(前は里の女) ワキ 旅 僧  
 ツレ 江口の君の國

ワキ(旅僧) 月つきは昔むかしの友ともならば。月つきは昔むかしの友ともならば。世よのほかいづくならまし。 詞ことこれば諸國しよこく一見いつけん  
 の僧そうにて候われ。我われいまだ津つの國くに天王寺てんわうじに參まゐらさ候まゐほどに。此度このたび思おもひ立ち天王寺てんわうじに參まゐらばやと思おもひ候まゐ。  
 道行みちゆき臨都みやこをばまだ夜深よふかきに旅立たびだちて。まだ夜深よふかきに旅立たびだちて。淀よどの川かは舟行ふねく末すえは。鶴殿うづのの昔あしの。ほ  
 の見えし。松まつの煙けむりの浪なみよする。江口えぐちの里さとに著つきにけり。江口えぐちの里さとに著つきにけり。(此間このまへにワキと正ただ)  
 ワキ 應まてはこれなるは江口えぐちの君きみの舊跡きうせきかや。痛いたはしや其身そのみは土中どちゆうに埋くづむといへども。名なは留とどまり  
 て今いままでも。昔むかしがたりの舊跡きうせきを。今いま見る事ことのあはれさよ。 詞ことげにや西行法師さいぎやうほふし此所このところにて。一夜いちや

の宿やどを借かりけるに。主あるじの心こころなかりしかば。世よの中なかを厭いとふまでこそ難かたからめ。 詞こと假かりのやどりを惜を  
 しむ君きみかなと詠えいじけんも。此所このところにての事ことなるべし。 詞ことあら痛いたはしや候まゐ。  
 シテ(里の女) 詞ことのうのうあれなる御僧おんそう。今いまの歌うたをば何なにと思おもひよりて口くちすさみ給たまひ候まゐぞ。 ワキ ふしぎや  
 な人家じんかも見えぬ方かたよりも。女性にょしやういちにん一人ひとり来きりつ。今いまの詠歌えいかのくちすさみを。いかにと問とはせ給たまふ  
 こと。そも何故なにゆゑに尋たづね給たまふぞ。 シテ 忘れて年としを経へしものを。又また思おもひ染そむ言ことの葉はの。 露つゆ草くさの陸野かげの  
 露つゆの世よを。厭いとふまでこそ難かたからめ。假かりの宿やどりを惜をしむとの。其言ことの葉はも恥はづかしければ。さのみは惜を  
 しみ參まゐらせざりし。其理そのことわりをも申まさん爲ために。これまで現あられ出いでたるなり。 ワキ 詞こと心こころ得えず。假かりの宿やど  
 りを惜をしむ君きみかなと。西行法師さいぎやうほふしが詠えいせし跡あとを。たゞ何なにとなく用とふ所ところに。さのみは惜をしまざりに  
 じと。ことわり給たまふ御身おんみはさて。 詞こといかなる人ひとにてましますぞ。 シテ 詞こといやさればこそ借をしまぬ  
 よしの御返事おんべんじを。申まして歌うたをばなにとてか。詠えいじもせさせ給たまはざるらん。 ワキ 詞ことげに其返事そのべんじの言こと  
 の葉はは。世よをいとふ。 シテ 人ひととし聞きけば假かりの宿やどに。詞こと心こころとむなと思おもふばかりぞ。心こころとむなと捨人すてびと  
 を。いさめ申ませば女をんなの宿やどりに。とめ參まゐらせぬも理ことわりならずや。 ワキ 詞ことげに理ことわりなり四行さいぎやうも。假かりの

宿りを捨人といひ。シテ、此方も名におふ色好みの。家にはさしも埋木の。人知れぬ事のみ多き宿に。ワキ、心とむなと詠じ給ふは。シテ、捨人を思ふ心なるを。ワキ、たゞ惜しむとの。シテ、言の葉は。地、をしむこそ惜しまぬ假の宿なるを。なしまぬ假の宿なるを。などや惜しむと夕浪の。返らぬいにしへは今とても。捨人の世語に心を留め給ひそ。

地、げにやうき世の物語。聞けば姿もたそかれに。かげるふ人はいかならん。シテ、たそかれにたすむ影はほのぼのと。見え隠れなる川隈に。江口の流の君とや見えん。はづかしや。地、さては疑あら磯の。波と消えにし跡なれや。シテ、かりに住み來し我が宿の。地、梅の立枝や見えつらんシテ、おもひの外に。地、君が來ませるや。一樹の蔭にや宿りけん。又は一河の流の水。汲みてもしるしめされよや。江口の君の幽靈ぞと。聲ばかりして失せにけり。聲ばかりして失せにけり。(中入)ワキ、聞きては江口の君の幽靈假に現れ。われに言葉を交しけるぞや。誰いざ用ひて淨めんと。言ひもあへればふしぎやな。いひもあへればふしぎやな。月すみ渡る河水に。遊女の謠ふ舟遊。月に見えたる不思議さよ。月に見えたるふしぎさよ。

地、川舟をとめて逢ふ瀬の浪枕。とめて逢ふせの浪枕。うき世の夢を見ならはしの。驚かぬ身のはかなさよ。佐用姫が松浦湯。かたしく袖の涙の。もろこし舟の名残なり。また宇治の橋姫も。訪はんとせぬ人を待つも。身の上とあはれなり。よしや芳野の。よしや芳野の花も雪も雲も波も。あはれ世に會はばや。

ワキ、ふしぎやな月澄み渡る水の面に。遊女のおまた諷ふ謠。色めきあへる人影は。そも誰人の舟やらん。後シテ(江口の君の幽靈)な此舟を誰が舟とは。恥かしながらいにしへの。江口の君の川道遙の。月の夜舟を御覽せよ。ワキ、そもや江口の遊女とは。それは去りにしいにしへの。シテ、言いにしへとは。御覽せよ月は昔に變らめや。ツレ(江口の君の幽靈)われらもかやうに見え來るを。いにしへ人とは現なや。シテ、言よし何かと宣ふとも。ツレ二人、言はじや聞かじ。シテ、むつかしや。シテ、ツレ、三人、秋の水。みなざり落ちて去る船の。シテ、月も影さす棹の歌。地、歌へや歌へうたかたの。あはれ昔の戀しさを。今も遊女の舟遊。世を渡る一節を。歌ひていざや遊ばん。地、それ十二因縁の流轉は車の場に廻るが如し。シテ、鳥の林に遊ぶに似たり。地、前生また前

生。シテ會て生々の前を知らず。地來世なほ來世。さらに世々の終を辨ふることなし。  
 シテあるひは人中天上の善果を受くといへども。地顛倒迷妄して未だ解脱の種を殖ふす。  
 シテあるひは三途八難の惡趣に墮して。地患にさへられて既に發心の謀(「蓋曲」なかつたらと蓋曲)を失  
 ふ。シテ然るにわれらたまたま受けがたき人身を受けたりといへども。地罪業深き身と生れ。こ  
 とに例少き河竹の流れの女となる。前の世の報いまで。おもひやるこそ悲しけれ。紅花の春の  
 朝。紅錦繡の山。粧ひをなすと見えしも。夕の風にさそはれ。紅葉の秋の夕。黄纒纒の林。色  
 をふくむといへども。朝の霜にうつろふ。松風蘿月に詞を交す賓客も。去つて來ることなし。翠  
 帳紅閨に枕を並べし妹背も。いつのまにかは隔つらん。おもそ心なき草木。情ある人倫。いづ  
 れ哀を遁るべき。かくは思ひ知りながら。シテある時は色に染み貪著の念淺からず。地又あ  
 る時は聲を聞き。愛執の心いと深き。心に思ひ口に言ふ妄舌の縁となるものを。げにや皆人は。六  
 塵の境に迷ひ。六根の罪を作る事も。見ること聞くことに迷ふ心なるべし。  
 地、隨縁真如の波の

立たぬ日もなし。立たぬ日もなし。シテ浪の立居も何ゆるぞ。假なる宿に心とむるゆる。地心と  
 めすはうき世もあらじ。シテ人をも慕はじ。地待つ暮もなく。シテ別れ路も風吹く。地花よ紅  
 葉よ。月雪の古事も。あらよしなや。シテ思へば假の宿。地おもへば假の宿に。心とむなと人を  
 だに諫めし我なり。これまでなりや歸るとて。すなはち普賢菩薩と現れ。舟は白象となりつゝ。  
 光とともに白妙の。白雲にうち乗りて。西の空にゆき給ふ。ありがたくぞおぼゆる。ありがたくこ  
 そは覺ゆれ。

四 班女

シテ 長者の女、花子  
 ワキヅレ(トモ) 少將の從者  
 ワキ 吉田少將  
 狂言 野上の宿の長

狂言野上の宿の長「國」かやうに候者は。美濃の國野上の宿の長にて候。さてもわれ花子と申す上臈を  
 持ちまゐらせて候が。過ぎにし春の頃。都より吉田の少將殿とやらん申す人の東へ御下り候が。  
 此宿に御とまり候ひて。彼の花子と深き御契りの候ひけるが。扇を取り替へて御下り候ひしより。  
 花子扇にながめ入り聞より外に出づる事なく候ほどに。彼の人を呼び出だし追ひ出ださばやとお

もひ候。いかに花子。今日よりしてこれにはかなひ候まじ。とくよく何方へも御出で候へ。

シテ花子「誰」げにやもとより定めなき世といひながら。うきふししげき河竹の。流れの身こそ悲し  
けれ。分け迷ふ行くへも知らでぬれ衣。野上の里を立ち出で。野上の里をたちいで。近江路

なれど愛き人に。別れしよりの袖の露。其まゝ消えぬ身ぞつらき。そのまゝ消えぬ身ぞつらき。

ワキ「吉田少將、ワキツレ（後者）歸るぞ名残富士の嶺の。歸るぞ名残富士の嶺の。ゆきて都に語らん。

ワキ「詞」これは吉田の少將とは我が事なり。さて我過ぎにし春の頃東に下り。はや秋にもなり

候へば。只今都に上り候。ワキ、ワキツレ、進行、隨都をば霞と共に立ち出でて。霞と共にたちいで。

しばしほどふる秋風の。音白河の關路より。又立ちかへる旅衣。浦山過ぎて美濃の國。野上の里

に著きにけり。野上の里に著きにけり。ワキ「詞」いかに誰かある。急ぐ間これにはや美濃の國野上の

宿にて候。此所に花子と云ひし女に契りしことあり。未だ此所にあるか尋ねて來り候へ。

ワキツレ「畏つて候。花子の事を尋ね申して候へば。長と不和なる事の候ひて。今は此所には御入り

なき由申候。ワキ「さては定めなき事ながら。もし其花子歸り來る事あらば。都へついでの時ば申

し上せ候へとかたく申し附け候へ。急ぐ間程なく都に著きて候。われ宿願の仔細あれば。こ

れより直に糺へ参らうするにて候。皆々参り候へ。

後ジテ（花子、狂女）「春日野の雪間を分けて生ひ出で來る。草のはつかに見えし君か（原註「は」も。詞よしな

き人になれ衣の。日も（を）と（重）れ月（は）ゆけども。世を秋風の便ならでは。ゆかりを知らする人

もなし。夕暮の雲のはたてに物を思ひ。露上の空にあくがれ出で。自身をいたづらになす事を。

神や佛も憐みて。思ふ事をかなへ給へ。それ足柄箱根玉津嶋。貴船や三輪の明神は。夫婦

男女のかたらひを。守らんと誓ひおはします。此神々に祈警せば。などか験のなかるべき。謹上

再拜。戀すてふ我が名はまだき立ちにけり。地「人知れずこそおもひそめしか（後曲誤りて。シテ「あ

ら恨めしの人心や。げにや祈りつゝ御手洗川に戀せじと。誰がいひけん虚言や。されば人心。

眞すくなき濁江の。澄まで頼まば神とても。受け給はぬは理や。とにもかくにも人知れぬ。思

ひの露の。地「置き所。いづくならまし身の行くへ。心だに誠の道にかなひなば。誠の道にかな

ひなば。祈らずとも神や守らん。われらまで。眞如の月は曇らじを。知らで程經し人心。衣の



玉はありながら。恨みありやともすれば猶同じ世と祈るなり。猶同じ世といのるなり。  
 ワキツレ、詞(作不明)いかに狂女。何とて今日は狂はぬぞ面白う狂ひ候へ。シテ「うたてやなあれ御覽  
 ぜよ今までは。動かぬ梢と見えつれども。風の誘へば一葉も散るなり。誰たまたま心ずくなるを。  
 狂へと仰せある人々こそ。風狂じたる秋の葉の。心もともに亂れ戀の。あら悲しや狂へと仰せ  
 ありさむらひそよ。ワキツレ、詞「さて例の班女の扇は候。シテ「うついなや我が名を班女と呼び給ふぞ  
 や。よしよしそれも憂き人の。かたみの扇手にふれて。うち置き難き袖の露。ふる事までも思ひぞ  
 出づる。班女が閨のうちには秋の扇の色。楚王の臺の上には夜の琴の聲。地「夏はつる。扇と  
 秋の白露と。いづれか先に起臥の。床すさましや獨寢の。さみしき枕して閨の月なながめん。  
 月重山に隠れぬれば。扇を擧げてこれを喩へ。シテ「花巾上に散りぬれば。地「雪を聚めて  
 春を惜しむ。シテ「夕の嵐朝の雲。いづれか思ひのつまならぬ。地「さみしき夜半の鐘の音。鶴籠  
 の山に響きつゝ。明けなんとして別れを催し。シテ「せめて聞もる月だにも。地「しばし枕に残らず  
 して。又獨寢になりぬるぞや。翠帳紅閨に。枕ならぶる床の上。なれし襖の夜すがらも。同

穴の跡夢もなし。よしそれも同じ世の。命のみをさりともと。いつまで草の露の間も。比翼連理の  
 かたらし。その驪山宮の私語も。誰か聞き傳へて今の世まで漏らすらん。さるにても我が夫の。  
 秋より前にならずと。夕の敷は重なれど。あだし言葉の人心。頼めて來ぬ夜はつれども。欄  
 干に立ちつくして。そなたの空よとながむれば。夕暮の秋風、嵐、山嵐、野分も。あの松をこそ  
 は音づるれ。我が待つ人よりの音づれをいつ聞かまし。シテ「せめてもの。かたみの扇手にふれて。  
 地「風のたよりと思へども。夏もはや杉の窓の。秋風冷かに吹き落ちて。團雪の扇も雪なれば。名  
 を聞くもすさましくて。秋風怨みあり。よしや思へばこれもげに。逢ふは別れなるべし。其報い  
 なれば今さら。世をも人も恨むまじ。ただ思はれぬ身の程を。思ひつけて獨居の。班女が閨ぞ  
 さみしき。  
 地「給にかける。(中ノ舞)シテ「月をかかくして懐に。持ちたる扇。地「とる袖も三重がされ。シテ「其  
 色衣の。地「つまのかれこと。シテ「かならずと夕暮の。月日も重なり。地「秋風は吹けども。萩  
 の葉の。シテ「そよとの便も聞かで。地「鹿の音蟲の音も。かれがれの契。あらよしなや。シテ「か

たみの扇より。地「かたみの扇より。猶裏表あるものは。人心なりけるぞや。あふ(逢)ぎとは  
虚言や。逢はでぞ戀は添ふものを。逢はでぞ戀は添ふものを。

ワキ、問「いかに誰がある。あの狂女が持ちたる扇見たきよし申し候へ。ワキツレ「いかに狂女。あの御  
輿の内より。狂女の持ちたる扇御覽じたまとの御事にて候。まゐらせられ候へ。シテ「これは人  
のかたみなれば。身を離さて持ちたる扇なれども。誰「かたみこそ今はあだなれこれなくは忘る  
隙もあらましものをと思へども。さすが又添ふこゝちするをりなりは。扇とるまも惜しきものを。  
人に見する事あらじ。

地、應「あなたにも忘れがたみの言の葉を。磐手の森の下躑躅。色に出ですはそれぞとも。見てこそ知  
らめ此扇。シテ「見てはさて。何のためぞと夕暮の。月を出だせる扇の繪の。かくばかり問ひ給ふ  
は何の御(謠曲「お」爲なるらん。(以上三句誤りある) 地「何ともよしや白露の。草の野上の旅寝せし。契の秋  
はいかならん。シテ「野上とは。野上とは東路の。末の松山浪、こえて。歸らざりし人やらん。地「末  
の松山立つ波の。何か恨みん契りおく。シテ「かたみの扇そなたにも。地「身に添へ持ちしこの扇。

シテ「輿の内より。地「取り出だせば。をりふし黄昏に。ほのぼの見れば夕顔の。花をかきたる扇な  
り。此上は惟光に。紙燭召して。ありつる扇御覽せよ。互にそれぞと知られ白雪の。扇の爪のかた  
みこそ。妹脊の中の情なれ。妹脊の中の情なれ。

五 鶉 飼

前シテ 鶉使の園遊 後シテ 園遊王  
ワキチ 日遊上人 ワキツレ 従俗

ワキ(日遊)「これは安房の清澄より出でたる僧にて候。われ未だ甲斐の國を見ず候ほどに。此度甲斐  
の國行脚と志して候。隨行く末いつと白浪の安房の清澄立ち出で。六浦のわたり鎌倉山。  
ワキ、ワキツレ(従俗)「やつれはてぬる旅姿。やつれはてぬる旅姿。捨つる身なれば恥ぢられず。一夜  
假寝の草蓆。鐘を枕の上に聞く。都留の郡の朝立(謠曲「お」)つも。日たけて越ゆる山道を。過ぎて  
石和に著きにけり。過ぎて石和につきにけり。

シテ(鶉使の園遊)「鶉舟にともす篝火の。後の間路をいかにせん。げにや世の中を愛しと思はし捨つべ  
きに。其心更に夏河に。鶉使ふ事の面白きに。殺生をするはかなきよ。鶉傳へ聞く遊子伯陽

は。月に誓つて契をなし。夫婦二つの星となる。臨今の雲の上人も。月なきよはをこそ悲み給ふに。われはそれにはひきかへ。月の夜ごろを厭ひ。闇になる夜を悦べば。鶴舟にともす篝火の。消えて闇こそ悲しけれ。つたなかりける身の業と。つたなかりける身の業と。今は先非を悔ゆれども。かひも浪間に鶴舟ごとく。これほど惜しめども。かなはぬ命繋がんとして。いとなむ業の物憂さよ。營む業のものうさよ。同じつものごとく御堂にあら鶴を休めうするにて候。(二句古き語)や。これは往來の人の御入り候よ。ワキさん候往來の僧にて候が。里にて宿を借り候へば。禁制の由申候ほどに。さて此御堂にとまりて候。シテげにげに里にてお宿参らせうする者は覺えず候。ワキさて御身はいかなる人にてわたり候ぞ。シテさん候これは鶴使にて候が。いつも月の程は此御堂に休らひ。月入りて鶴を使ひ候。ワキさては苦しからぬ人にて候ぞや。見申せばはや拔群に年たけ給ひて候が。かゝる殺生の業勿體なく候。あはれ此業を御止りあつて。餘の業にて身命を御つぎ候へかし。シテ仰せ尤にて候へども。若年より此業にて身命を扶かり候ほどに。今更止つつべうもなく候。ワキツレいかに申候。此人を見て思ひ出だしたる事の候。此二三年前に。

此河下岩落と申す所を通り候ひしに。かやうの鶴使に行き逢ひ候ほどに。科の中の殺生の由を申して候へば。げにもとや思ひけん。我が家につれてかへり。一夜けしからず擲して候ひしよ。シテさては其時の御僧にてわたり候か。ワキツレさん候其時の僧にて候。シテのう其鶴使こそ空しくなりて候へ。ワキツレそれは何故空しくなりて候ぞ。シテ恥かしながら此業にて空しくなりて候。其時のありさま語つて聞かせ申候べし。跡を弔うて御やり候へ。ワキ心得申し候。シテそもそも此石和川と申すは。上下三里が間は固く殺生禁断の所なり。今仰せ候岩落邊に鶴使は多し。夜な夜な此所に忍び上つて鶴を使ふ。憎き者のしわざかな。かれを見あらはさんと計みしに。それをば夢にも知らずして。又ある夜忍び上つて鶴を使ふ。狙ふ人ばつと寄り。一殺多生の理にまかせ。かれを殺せと云ひあへり。其時左右の手を合せ。かゝる殺生禁断の所とも知らず候。向後の事をこそ心得候べけれとて。手を合はせ歎き悲しめども。助くる人も涙の底に。涙にし給へば叫べど聲が出でばこそ。其鶴使の亡者にて候。ワキ言語道断の事にて候。さらば罪障懺悔に業力の鶴を使つて御見せ候へ。跡をばねんごろに弔ひ申候べし。シテあら

ありがたや候。さらば業力の鵜を使うて御目(ごめ)にかけ候へし。跡をとつて給はり候へ。ワキ「心得申候。シテ「既に此夜も更け過ぎて。鵜使(うつか)ふ頃にもなりしかば。いざ業力の鵜を使はん。ワキ「これに墮獄(だく)古來(こらい)諸本(しよほん)皆(みな)他國(たこく)と記し、各流(たこく)「たこく」と讀(よ)みへり。され(ま)の物語。死したる人の業により。かく苦しみの憂(うれ)きは墮獄(だく)古來(こらい)諸本(しよほん)皆(みな)他國(たこく)と記し、各流(たこく)「たこく」と讀(よ)みへり。され(ま)の物語。死したる人の業により。かく苦しみの憂(うれ)きは業(わざ)を。今見る事のふしぎさよ。シテ「阿(あ)濕(じつ)濕(じつ)る焚松(たきまつ)ふり立て。ワキ「藤(ふじ)の衣(ころも)の玉(たま)摩(ま)。シテ「阿(あ)濕(じつ)濕(じつ)鵜籠(うかご)を開き取り出だし。ワキ「阿(あ)濕(じつ)濕(じつ)鳥(しま)つ巢(す)おろし荒鵜(あらかう)ども。シテ「阿(あ)濕(じつ)濕(じつ)此川波(このかはなみ)にばつと放せば。地(ぢ)「阿(あ)濕(じつ)濕(じつ)面白(おもしろ)のありさまや。底(そこ)にも見ゆる篝(かきりび)火(ひ)に。驚(おどろ)く魚(うを)を追ひ廻し。かづき上げすくひ上げ。隙(ひま)なく魚(うを)を食ふ時は。罪(つみ)も報(むく)いも後の世(のちよ)も。忘れはてし面白(おもしろ)や。漲(みなぎ)る水の淀(よど)ならば。生池(いけ)の鯉(こい)やのぼらん。玉島河(たましまがは)にあられども。小鮎(こあゆ)さばしるせやらぎに。かだみて魚(うを)はよもためじ。ふしぎやな篝(かきりび)火(ひ)の。燃(も)えても影(かげ)の暗(くら)くなるは。思(おも)ひ出(い)でたり。月(つき)になりぬる悲(かな)しさよ。鵜舟(うぶね)の篝(かきりび)影(かげ)消(け)えて。闇路(やみぢ)に歸(かへ)る此身(このみ)の。名(な)殘(ご)惜(り)しさなにかにせん。なごり惜(を)しさなにかにせん。(申入)

ワキ「ワキ「阿(あ)濕(じつ)濕(じつ)河(かは)瀬(せ)の石(いし)を拾(ひろ)ひあげ。河(かは)瀬(せ)の石(いし)を拾(ひろ)ひあげ。妙(たへ)なる法(のり)の御經(おんきやう)を。一石(いっせき)に一字(いちじ)書(か)きつけて。波間(なみま)に沈(しづ)め申(ま)は。なごかは浮(う)かまざるべき。なごかは浮(う)かまざるべき。

後(ご)ジテ「阿(あ)濕(じつ)濕(じつ)王(おう)「それ地獄(ぢごく)遠(とほ)きにあらす。眼前(がんぜん)の境界(きやうがい)悪鬼(あくき)外(ほか)になし。そもそもの者(もの)若年(じやくねん)の昔(むかし)より。江河(かうが)に漁(う)つて其罪(そのつみ)おびたし。されば鐵(てつ)札(さつ)數(かず)を盡(つく)くし。金紙(きんし)をよこす事(こと)もなく。無間(むけん)の底(そこ)に。墮罪(だざい)すべかつしな。一僧(いつそう)一宿(いつしゆく)の功力(こうりき)に引(ひ)かれ。急(いそ)ぎ佛所(ぶつじよ)におくらんと。惡鬼(あくき)心(こころ)を和(な)めて。鵜舟(うぶね)を弘誓(くわんぜい)の船(ふね)になし。法華(ほつげ)の御法(みほつ)の助(たす)け舟(ふね)篝(かきりび)火(ひ)も浮(う)かむ氣色(けしき)かな。地(ぢ)「迷(まよ)ひの多(おほ)き浮雲(うきぐも)も。シテ「實相(じつさう)の風荒(かぜあ)く吹(ふ)いて。地(ぢ)「千(せん)里(り)が外(ほか)も雲(くも)はれて。眞如(しんによ)の月(つき)や出(い)でぬらん。

地(ぢ)「阿(あ)濕(じつ)濕(じつ)ありがたの御事(ごんごと)や。奈落(ならく)に沈(しづ)む惡人(あくにん)を。佛所(ぶつじよ)に送(おく)り給(たま)ふなる。其瑞相(そのすゐさう)のあらたさよ。シテ「法(ほつ)華(わ)は利益(りやく)ふかき故(ゆゑ)。覺道(かくだう)に沈(しづ)む群類(ぐんるい)を。救(すく)はん爲(ため)に來(きた)りたり。地(ぢ)「げにありがたき誓(ちか)ひかな。妙(めう)の一字(いちじ)はさていかに。シテ「それは褒美(ほうび)古來(こらい)諸本(しよほん)皆(みな)假名(かりな)にて「はうひ」と書(か)きたる(こと)の詞(ことば)にて。妙(たへ)なる法(のり)と説(と)かれたり。地(ぢ)「經(きやう)とはなごか(經(きやう)曲(きョく))「名(な)づくらん。シテ「それ聖教(しやうけう)の都名(みや)にて。地(ぢ)「二(ふた)もなく。シテ「三(みつ)もなく。地(ぢ)「唯(ただ)一(いち)乘(じやう)の德(とく)によりて。奈落(ならく)に沈(しづ)みはてし浮(う)かみ難(がた)き惡人(あくにん)の。佛果(ぶつぐわ)を得(え)ん事(こと)此經(このきやう)の力(ちから)ならずや。これを見(み)かれを聞(き)く時は。これを見(み)かれを聞(き)く時は。たとへ惡人(あくにん)なりとても。慈悲(じひ)の心(こころ)をさきとして。僧會(そうゑ)を供養(くやう)するならば。その結緣(けちえん)に引(ひ)かれつ。佛果(ぶつぐわ)菩提(ぼだい)に到(いた)るべし。げに往來(わうらい)の

利益こそ。他を助くべき力なれ。他を助くべき力なれ。

六 難波

古名 難波梅

シテヲ 王仁の(前は老翁) 前ツレ 老翁の(後者、梅の精)  
後ツレ 木舟問耶(天女) 官人  
ワキツレ 後者

ワキ(官人)ワキツレ(後者)「山も霞みて浦の春。山も霞みて浦の春。浪風静なりけり。ワキ、詞」そもそも「  
れば當今に仕へ奉る臣下なり。われ三熊野を信じ。毎年としごもり仕り候。此度は所願成就し。  
年かへる春にもなり候へば。唯今都に下向仕り候。(明和本「上り候」と訂せ)ワキ、ワキツレ、道行、春立  
つや。げにものどけき風和の。げにものどけき風和の。濱の真砂も吹上の。浦傳ひして行くほどに。  
早くも紀路の關越えて。これも都か津の國の。難波の里に著きにけり。難波の里に著きにけり。  
シテ(里の老翁ツレ)里の男「君が代の。長柄の橋も造るなり。難波の春も幾久し。ツレ」雪にも梅の冬籠。  
二人「今は春への氣色かな。シテ」それ天長く地久しくして。神代の風長閑に傳はり。二人、皇の畏  
き御代の道廣く。國を恵み民を撫で。四方に治まる八洲の浪。靜かに照らす日の本の。影ゆたか  
なる時とかや。春日野に若葉摘みつゝ萬代を。祝ふなる心ぞしるき曇りなき。心ぞしるき曇りな

き。天つ日嗣の御調物。運ぶ老や都路の。直なる御代を仰がんと。關の戸さゝで千里まで。普く  
照らす日影かな。普く照らす日影かな。

ワキ、詞「いかにこれなる老人に尋ねべき事の候。シテ」此方の事にて候か何事にて候ぞ。ワキ「ふしぎ  
やな諸木こそ多き中に。これなる梅の木蔭を立ち去らすして。蔭を清め賞翫し給ふ事不審なり。  
もし此梅は名木にて候か。シテ」御姿を見奉れば。都の人にて御座候が。此難波の浦において。  
いろ。色ことなる梅花を御覧じて。名木かとの御尋ねは御心なきやうにこそ候へ。ツレ、詞「それ大方の  
春の花。木々の盛は多けれども。花の中にも始めなれば。梅花を花の兄ともいへり。シテ、詞「其上  
梅の名所名所。國々所は多けれども。六義の始めのそへ歌にも。難波の梅こそ詠まれたれ。  
ツレ、詞「御代も開けし榮花といひ。シテ、詞「あまねき花の佳例といひ。二人、詞「ともかくにも津の國  
の。こや都路の難波津に。名を得て咲くや木の花を。名木かとの御尋ねは。事新しき御説かな。  
ワキ、詞「げにげに難波の梅のこと。名木やらんと尋ねしは。愚なりける問ひことかな。然れば歌にも  
難波津に。咲くや木の花冬籠。今は春へと咲くやこの。花の春冬かけてよめる。謠歌の心はい

かなるぞ。シテ、國「それこそ帝をそへ歌の。心詞に願れたれ。難波のみこは皇子ながら。未だ位に即き給はれば。冬咲く梅の花の如し。ワキ、難波御即位ありて難波の君の。位にそなはり給ひし時は。シテ、國「今こそ時の花の如く。ワキ、難波「天下の春をしろしめせば。シテ「今を春へと咲くやこの。ワキ「花の盛は大鷲鷄の。シテ「帝を花にそへ歌の。ワキ「風も吹まり。シテ「立つ浪も。地「難波津に咲くや木の花冬こもり。咲くや木の花冬こもり。今は春べに匂ひ来て。吹けども梅の風。枝を鳴らさぬ御代とかや。げにや津の國の。何はの事に至るまで。豊かなる世のためしこそ。げに道廣き治め(原作「始め」)なれ。げに道廣き治めなれ。

地「難波「そもそも難波津の歌は帝の御始め。又「淺香山の言葉(原作「言の葉」)は。采女の土器とりどりなり。シテ「昔唐國の堯舜の御代にも越えつべし。地「萬機の政おだやかにして。慈悲の浪四海に普く。治めざるに平かなり。シテ「君、君たれば臣も亦。地「水よく船を浮むとかや。高き屋に登りて見れば煙立つ。民の籠は賑ひにけりと。観慮にかけまくも。かたじけなくぞ聞えける。然れば此君の。代々にためしをひく事も。げにありがたき。詔。國々に普く三年の御調ゆるされし。其年月も極

まれば。濱の眞砂の敷つもりて。雪は豊年の御調物。ゆるす故にやなかなかいやましには、ご御資の。千秋萬歳の。千箱の玉を奉る。シテ「然れば普き御心の。地「いつくしみ深うして。八洲の外まで浪もなく。廣き御恵み。筑波山のかげよりも。しげき御影は大君の。國なれば土(原作「土」)も木も。榮え榮うる津の國の。難波の梅の名にしおふ。匂ひも四方に普く。一華開くれば天下皆春なれや。萬代の。猶安全ぞめでたき。

地「難波「げに萬代の春の花。げに萬代の春の花。榮え久しき難波津の。昔「語を面白き。シテ「げに名にしおふ難波津に。鳥の一聲をりしにも。鳴く鶯の春の曲。春鶯「轉を奏せん。「ふしぎや御身の精。地「今一人の老人は。シテ「今ぞ顯す難波津に。「咲くや木の花と詠じつ。位をすいめ申せし。百濟國の王仁なれや。今も木の花に戯れ。百轉りの聲立て。春の鶯の舞の曲。夜もすがら慰め申すべしや。下臥して待ち給へ。花のしたぶしに待ち給へ。(申入)ワキ、難波「見て暮らす花の下臥更くる夜の。花の下臥ふくる夜の。月影ともに閑なる。氣色にそみて音

樂の。花に聞ゆるふしぎさよ。花にきこゆるふしぎさよ。  
 後ヅレ(天女)誰か云ひ(舊永月本)とあり。(し春の色は。東より來(原註)るといへども。南枝花始め  
 て開く。こゝは所も西の海に。向ふ難波の春の夜の。月、雪も澄む浦の浪。よるの舞樂は面白や。  
 夢ばし覺まし給ふなよ。

後ヅレ(天女)誰か云ひ(舊永月本)とあり。(し春の色は。東より來(原註)るといへども。南枝花始め  
 て開く。こゝは所も西の海に。向ふ難波の春の夜の。月、雪も澄む浦の浪。よるの舞樂は面白や。  
 夢ばし覺まし給ふなよ。  
 シテ「われはまた百濟國より此國に渡り。君を崇め國を守る。王仁と云ひし相人なり。地昔仁徳  
 の御宇には。御代の鏡の影を寫し。シテ「治まる御代の榮花をなししも。地「この花の匂ひ。シテ「ま  
 たは開くる言の葉の縁。地「なにはの事が法ならぬ。遊び戯れ。色々の舞樂おもしろや。(天女ノ舞)  
 天女「梅が枝に來居る鶯春かけて。シテ「啼けども雪はふるき鼓の音むして。打ちならず。打ちな  
 らす。人もなければ君が代に。地「懸けし鼓も。シテ「時守の眠。地「醒むるは難波の。シテ「鐘も  
 響き。地「浦は潮の。シテ「浪の聲々。地「入江の松風。シテ「むら蘆の葉音。地「孰れを聞くも悦び  
 の。諫鼓音むし難波の鳥も。驚かぬ御代なりありがたや。(神樂)

地「あらかもしるの音樂や。時の調子に象りて。春鶯囀の樂をば。シテ「春風ともるともに。花  
 を散らしてどうと打つ。地「秋風樂はいかにや。シテ「秋の風もるともに。浪を響かしどうと打つ。  
 地「萬歳樂(「まんざいらく」は樂名なるに、此難波の曲に限り)は。シテ「よろづ打つ。地「青海波とは青海の。シテ「波  
 た立て打つは。採桑老。地「拔頭の曲は。シテ「かへり打つ。地「入日を招き返す手に。入日を招き返  
 す手に。今の太鼓は浪なれば。寄りては打ち。返りては打ち。此音樂にひかれつ。聖人御代に又  
 出で。天下を守り治むる。天下を守り治むる萬歳樂(「まんざいらく」は樂名なるに、此難波の曲に限り)は。そめてたき。萬歳樂ぞめ  
 でたき。

七 兼平

シテ 兼平の(前は樂舟の老人) 旅

ワキ(旅僧)「始めて旅を信濃路や。始めて旅を信濃路や。木曾の山家を出でうよ(觀世實生二流は此一切を木曾  
 のなるべし。今春流に依る)。詞、これは木曾の山家より出でたる僧にて候。さても木曾殿は。江州粟津が  
 原にて果て給ひたる由。承り及び候ほどに。彼の御跡を引ひ申さばやと思ひ。唯今粟津が原へと

急ぎ候。(以上四句明和本には「急ぎ候」とも今井の四郎兼平は。江州粟津が原にて。水守の死出の御とも致して候し。われ其様の者なれば亡き跡なるとの如きものなりしなるべ) 進行、信濃路や。木曾の棧名にしおふ。木曾の棧名にしおふ。其跡用ふや道のへの。草の蔭野の假枕。夜を重ねつゝ日を添へて。往けば程なく近江路や。矢橋の浦に著きにけり。矢橋の浦に著きにけり。

シテ、善世の業の憂きを身につむ柴舟や。焚かぬ前よりこがららん。ワキ、河のうのう其船に便船申さうのう。シテ、これは山田矢橋の渡舟にてもなし。御覽候へ柴積みたる舟にて候ほどに。便船はかなひ候まじ。ワキ、こなたも柴舟と見申して候へばこそ便船とは申候へ(今此世流は「見申し」を「申し」と誤り)。なりふし渡りに舟もなし。出家のことに候へば。別の御利益に。善舟を渡してたび給へ。シテ、げにもげにも出家の御身なれば。詞餘の人には變り給ふべし。げに御經にも如渡得船。ワキ、善世舟待ちえたる旅行の暮。シテ、かゝるなりにも近江の湖の。二人、矢橋を渡る舟ならば。それは旅人の渡舟なり。地、これは又憂き世を渡る柴舟の。憂き世を渡る柴舟の。干されぬ袖も水馴棹の。見馴れぬ人なれど。法の人にてましますれば。舟をばいかで惜しむべき。とくとく召され候へ。とくとく召され候へ。

候へ。

ワキ、同「いかに船頭殿に申すべきこと」の候。見え渡りたる浦山は皆名所にてぞ候らん(今此句の終に「御」の添へたるものなり。後人)。シテ、さん候。皆名所にて候。御尋ね候へ教へ申候べし。ワキ、まづ向ひに當つて大山の見える候は比叡山候か。シテ、さん候。あれこそ比叡山にて候へ。麓に山王二十一社。茂りたる嶺は八王子。戸津坂本の人家まで残りなく見えて候。ワキ、さてあの比叡山は皇城より良に當つて候よのう。シテ、なかなかのこと夫我が山は。皇城の鬼門を護り。悪魔を拂ふのみならず。一佛乗の嶺と申すは。傳へ聞く驚の太山を象れり。又天臺山と號するは。震旦の四明の洞をうつせり。傳、傳教大師桓武天皇と御心を一つにして。延暦年中の御草創。我が立つ柳と詠じ給ひし。麓、根本中堂の山上まで。残りなく見えて候。ワキ、同「さて大宮の御在所波止土漥とやらんも。あの坂本のうちにて候か。シテ、さん候。麓に當つて。少し木深き蔭の見え候こそ。大宮の御在所波止土漥にて御入り候へ。ワキ、ありがたや一切衆生悉有佛性如来と聞く時は。われらが身までも頼もしうこそ候へ。シテ、仰せのごとく佛衆生通する身なれば。御僧も



われも隨てはあらじ。一佛乗の。ワキ、嶺には遮那の栴を併へ。シテ、龍に止觀の海を湛へ。  
 又戒定惠の三學を見せ。シテ、三塔となづけ。ワキ、人はまた。進、一念三千の機を現して。  
 三千人の衆徒を置き。圓融の法も曇りなき。月の横川も見えたりや。さて又龍はさし波(波、龍の波)の  
の時は「さぎなみ」と誦ひ、祝詞のは)志賀辛崎のひとまつ松。七社の神輿の御幸の栴なるべし。さし波の水馴  
「ささなみ」と誦みて諸方を例とせりや。棹さがれゆくほどに。遠かりし向ひの浦浪の。栗津の森は近くなりて。あとに遠きさし波の。昔な  
 がらの山櫻は青葉にて。面影も夏山の。うつりゆくや青海の。柴船のしげしげも。暇ぞ惜しきさし  
 波の寄せよ寄せよ磯さばの。栗津に早く著きにけり。栗津にはやく著きにけり。(中入)  
 ワキ、露をかたしく草枕(現今は「草枕」と誦へり。古板語本は「草枕」なり。)。露をかたしく草枕。日も暮れ夜にもなりしかば。  
 栗津の原のあはれ世の。なき跡(現時の各流「なきかげ」と誦へり。いつの世にか大夫。今古板語本に依る。)いさや巾とむらはん。なきあといさや  
 巾とむらはん。  
後シテ(兼平の)「白刃骨を砕く苦しみ眼晴を破り。紅波楯を流す粧ひ。胡笳(古き流木管「笳」をほききゴマ節四節を附せり。原を「やなやひ」と誦みた  
るものか、或は「大びら」と誦みたるものか。何れにしても)に殘花を亂す。雲水の栗津の原の朝風に。地、関つくり添

ふ聲聲に。シテ、修羅の巻は騒がしや。  
 ワキ、「ふしぎやな栗津の原の草枕に。甲冑を帶し見え給ふは。いかなる人にてましますぞ。シテ  
 「おろかと尋ね給ふものかな。御身これまで來り給ふも。我が亡き跡をとほん爲の。御志にてまし  
 まさすや。兼平、これまで参りたり。ワキ、今井の四郎兼平は、今は此世に亡き人なり。さては夢に  
 であるやらん。シテ、「いや今見る夢のみか。現にもはや水馴棹の。舟にて見見えし物語。早く  
 も忘れ給へりや。ワキ、「そもや舟にて見見えしとは。矢橋の浦の渡守の。シテ、「其舟人こそ兼  
 平が。現に見見えし姿なれ。ワキ、「さればこそ始めより。様ある人と見えつるが。さては昨日の  
 舟人は。シテ、舟人にもあらず。ワキ、漁夫にも。シテ、あらぬ。地、武夫の。矢橋の浦の渡守。矢  
 橋の浦の渡守と。見えしはわれぞかし。同じくは此舟を。御法の舟にひきかへて。われを又彼岸  
 に。渡してたばせ給へや。  
 地、「げにや有爲生死の巻。來つて去る事早し。老少もつて前後不同。夢幻泡影。いづれならん。  
 シテ、唯これ槿花一日の榮。地、「弓馬の家にすむ月の。わづかに殘るつばものの。七騎となりて木曾

殿は。此近江路に下り給ふ。シテ兼平瀬田より参りあひて。地又三百餘騎になりぬ。シテその後合戦。度度にて。又主従二騎に討ちなさる。地今は力なし。あの松原に落ち行きて。御腹召され候へと。兼平勸め申せば。心細くも主従二騎。粟津の松原として落ち給ふ。兼平申すやう。後より御敵。大勢にて追つかけたり。防ぎ矢仕らんとて。駒の手綱を返せば。木曾殿御詮ありけるは。多くの敵を逃れしも。汝一所にならばやの。所存ありつる故ぞとて。同じく返したまへば。兼平又申すやう。こは口惜しき御詮かな。さすがに木曾殿の。人手にかゝり給はん事。未代の御恥辱。たゞ御自害あるべし。今井もやがてまゐらんと。兼平にいさめられ。又引つ返し落ち給ふ。さて其後に木曾殿は。心細くも唯一騎。粟津の原のあなたなる。松原として落ち給ふ。シテ頃ば睦月の末つ方。地春めきながら冴えかへり。比叡の山風の。雲行く空も臭織。あやしや通ひ路の。末白雪の薄氷。深田に馬を駆け落し。引けどもあがらず。打てども行かぬ望月の。駒の頭も見えはこそ。こは何とならん身の果。せん方もなく呆れはて。此まゝ自害せばやとて。刀に手を掛けたまひしが。さるにても兼平が。行くへいかにと。遠方のおとを見かへり給へば。シテい

づくより来りけん。地今ぞ命は機弓の。矢一つ来つて内甲にからりと射る。痛手にてましませば。たまりもあへず馬上より。をちこちの土となる。所はこぞ我よりも。主君の御跡をまづ用ひてたび給へ。地、苦しげに痛はしき物語。兼平の御最期は。何とかならせ給ひける。シテ兼平はかくぞとも。知らで戦ふ其隙にも。御最期の御供を。心にかくるばかりなり。地さて其後に思はずも。敵の方に聲立てし。シテ木曾殿討たれ給ひぬと。地呼ばはる聲を聞きしより。シテ今は何をか期すべしと。地「思ひ定めて兼平は。シテこれぞ最期の廣言と。地「鑑踏んばり。シテ大音上げ木曾殿の。御内に今井の四郎。地兼平と。名のりかけて。大勢に割つて入れば。もとより一騎當千の。秘術を現し大勢を。粟津の汀に追つ詰めて。磯打つ波のまくり斬。蜘蛛十文字に撃ち破り駆け通つて。其後。自害の手本よとて。太刀を銜へつゝかさかさまに落ちて。貫(貫曲つなぬか)かれ失せにけり。兼平が最後のしぎ。目を驚かすありさまなり。目を驚かすありさまなり(今の観世流にては返しの)。

八 千手

古名 千手重衡

ワキ 千手の前

ツレ 平重衡

ワキ(宗茂)「これは鎌倉殿の御内に。狩野介宗茂にて候。さても相國の御子重衡の卿は。此度一の谷の合戦に生捕られ給ひ候を。某預り申して候。朝敵の御事とは申しながら。頼朝痛はしく思召され。よく痛はり申せとの御事にて。昨日も千手の前を遣はされて候。彼の千手の前と申すは。手越の長が女にて候が。優にやさしく候とて。御身近く召し使はれ候を遣はされ候事。眞にありがたき御志にて御座候。今日は又雨中御つれづれに御座候はんほどに(現今以上九)。酒を勧め申さばやと存じ候。

ツレ(千手)「琴の音添へて音づる。琴の音添へておとづる。これや東屋(無馬)なるらん。それ春の花の樹頭に榮え。秋の月の水底に沈む。世のはかなさのありさまを。見てもあはれや重衡の。其いにしへは雲の上。かけても知らぬ身のゆくへ。浪に深ひ舟に浮き。さらばよるへのよそならで。ありしにかへる恨(現今の親世流に限りて)かな。都にだにも留めえ(此一字今は「は」の音と見なされ、まうて「は」の音かかれたものか)ぬ御涙な

るを痛はしや。陸奥の忍ぶに堪へぬ雨の音。忍ぶにたへぬ雨の音。降りすきみたるをりしもは、おもひの露も散り散りに。心の花もしをしなと。しなる、袖の色までも。けふ(今日)か。或は「希」にて、錦のあるには非る)の夕のたぐひかな。けふの夕のたぐひかな。シテ、いかに案内申候はん。ワキ、誰にてわたり候ぞ。シテ、千手の前が参りたる由それぞれ御申候へ。ワキ「しばらく御待ち候へ。御機嫌をもつて申さうするにて候。

ツレ(重衡)「身は是槿花。一日の榮。命は蜉蝣の定めなきに似たり。心は蘇武が胡國に捕はれ。岩窟の内にこめられて。君邊を忘れぬ。志。それは廣利(論本「やうり」と書け)が謀にて。敵を亡ぼし慈里に歸る。我はいつとなく敵陣にこめられて。縲紲の責を受くる。知らず今日もや限りならん。あら定めなや候。

ワキ、いかに申し上げ候。千手の御まゐりにて候。ツレ、唯今は何の爲にて候ぞ。よしよし何事にてもあれ。今日の對面は適ふまじきと申候へ。ワキ、畏つて候。いかに申候。御参りの由申して候へば。何と思召し候やらん。今日の御對面は違ふまじき由仰せられ候(今は「仰せ」の音と見なされ、まうて「仰せ」の音かかれたものか)。シテ、これも私

にあらす。頼朝よりの御説にて。琵琶琴持たせて参りたり。此よし重れて御申候へ。ワキ「御説の趣申して候へば。これも私にあらす。頼朝よりの御説にて。琵琶琴持たせて参りたり。よしよし御憚かりはさる事なれども。誰唯こなたへと請すれば。シテ、其時、千手立ち寄りて。地妻戸をきりりと押し開く。御簾の追風にはひ来る。花の都人に。恥かしながら見見えん。げにや東のはてしまで。人の心の奥深き。其情こそ都なれ。花の春、紅葉の秋。誰か思ひでとなりぬらん。

ツレ「聞くに千手の前。昨日あからさまに申しつる出家の御暇のこと聞かまほしうこそ候へ。シテ「さん候。其由申して候へば。朝敵の御事なるを私として。出家を許し申さんこと。思ひもよらずとこそ候ひつれ。誰わらはも御心のうちおし計りまゐらせて。いかほどこそまこと申して候へども。かひなき出家の御望み。痛はしうこそ候へ。ツレ「聞く口惜しやわれ一の谷にていかにもなるべき身の生捕られ。今は東のはてまでも。かやうに面をさらすこと。前世の報と云ひながら。又思はずも父命により。佛像を滅ぼし人壽を絶ちし。現當の罪をばたすこと。前業より猶

恥かしうこそ候へ。シテ「げにげにこれは御理り。さりながら、かゝる例はいにしへ今に。多き習ひと聞くものを。獨とな歎き給ひそとよ。ツレ「げによく慰め給へども。たぐひはあらじ憂き身のはて。シテ「昨日は都の花と榮え。ツレ「今日は東の春に来て。シテ「うつり變れる。ツレ「身の程を。地「思へたり世は空蟬の唐衣。世はうつ蟬の唐衣。きつゝ馴れにし妻もある。都の雲居を立ち離れ。はるばる來ぬる旅をしぞ思ふ衰への。憂き身の果ぞ悲しき。水行く川の入橋や。蜘蛛にものを思へとは。かけぬ情のなかなかに。馴るゝや恨なるらん。馴るゝや恨なるらん。ワキ「今日雨の雨の夕の空。御つれづれを慰めんと。樽を抱きてまゐりつゝ。既に酒宴を始めんとす。シテ「千手も此よし見るよりも。御酌に立ちて重衡の。御前にこそまゐりけれ。ツレ「今はいつしか憚りの。心ならず思はずも。手まづ遮る盃の。心ひとつに思ふ思ひ。ワキ「それぞれいかに何にても。御着にと勸むれば(以上二句行交單し。或は後人の改むる所か。)シテ「其時、千手とりあへず。羅綺の重衣爲る。情無きことを機婦に妬む。シテ「ツレ「ワキ「唯今詠じ給ふ朗詠は。かたじけなくも北野の御作。此詩を詠せば。聞く人までも。守るべしとの御誓なり。ツレ「さりながら重衡は今生の望なし。

シテ、ツレノキ、唯來世の便こそ聞かまほしけれと宣へば。シテ、わらはは仰せを承り。十惡といふとも引攝すと。地「朗詠してぞ奏でける。シテ、さても彼の重衡は相國の末の御子とは申せども。地「兄弟にも勝れ一門にも越えて。父母の寵愛限なし。シテ、されども時うつり。平家の運命ことごとく。地「月の夜すがら聲たて。啼くや牡鹿の津の國の。生田の川に身を捨て。防ぎ戦ふと申せども。シテ、森の下風木の葉の露。地「おとされけるこそあはれなれ。いまは梓弓。よし力なし重衡も。引かんとするにいづ方も。網を置きたることくにて。逃れかれたる淀鯉の。生捕られつゝありて憂き。身をうろくづの其まゝに。沈みは果てずして。名をこそ流せ川越の。重房が手に渡り。心の外の都入。シテ、げにや世の中は。地「定めなきかな神無月。時雨降りおく奈良坂や。衆徒の手に渡りなば。ともかくにも果てはせで。又鎌倉にわたさるゝ。こゝはいづくぞ八橋の。雲居の都いつかまた。三河の國や遠江。足柄箱根うち過ぎて。明けもやすらん星月夜。鎌倉山に入りしかば。憂き限ぞとおもひしに。馴るればこゝも忍び音に。あはれ昔を思ひ妻の。燈暗うしては數行農氏が涙の。雨さへしきる夜の空。シテ、四面に楚歌の聲のうち。地「何とか近す舞の袖。思

ひの色にや出でぬらん。涙を添へて廻らすも。雪の古枝の枯れてだに。花咲く千手の袖ならば。重れていざや返さん。忘れめや。(序ノ舞)  
 シテ、臨「一樹の陸や一河の水。地「皆これ他生の縁といふ。白拍子をぞ歌ひける。ツレ、其時重衡興に乗じ。地「その時重衡興に乗じ。琵琶を引きよせ弾じたまへば。また瓊琴の結合に。  
 シテ「合せて聞けば。地「嶺の松風通ひ來にけり。琴を枕の短夜の轉寢。夢も程なく東雲もほのぼのと。明けわたる空の。シテ「あさまにやなりぬべき。地「あさまにやなりなんと酒宴を罷め給ふ。御心のうちぞ痛はしき。  
 地「かくて重衡勅により。かくて重衡勅により。又都にとありしかば。武夫守護し出で給へば。シテ「千手も泣く泣く立ち出で。地「何なかなかの憂き契。はやきぬぎぬに。引き離るゝ袖と袖との露涙。げに重衡のありさま。目もあてられぬ氣色かな。目もあてられぬ氣色かな。

九 卒都婆小町

古名 小町物狂

ワキシ 老後の小野小町  
ワキツレ 同

ワキ(僧)、ワキツレ(僧)、山は浅きあさに隠かくれがの。山は浅あさきにかくれがの。深ふかきや心こころなるらん。ワキ(僧)は高野山より出でたる僧そうにて候。われ此度都このたびみやこのに上らばやと思おもひ候。誰たれそれ前佛ぜんぶつは既に去り。後佛ごぶつは未だ世よに出いです。ワキ、ワキツレと夢ゆめの中間ちゆうげんに生うまきて。何なにを現うつと思おもふべき。たまたま受け難がたき人身にんじんを受け。逢あひ難がたき如來にらいの佛ぶつ教けうに逢あひ奉たてまつること。これぞ悟さとりの種たねなると。思おもふ心こころの(中野より後)ひとへなる。墨すみの衣ころもに身みをなして。生うまぬ前の身みを知しれば。生うまぬさきの身みをしれば。憐あはれむべき親おやもなし。親おやのなれば我が爲ために。心こころをとむる子こもなし。千里ちさとを行ゆくも遠とほからず。野のに臥ふし山やまに泊とどる身みの。これぞ眞まことのすみかなる。これぞ眞まことのすみかなる。

シテ(若使わかしの小町謠)身みは浮草うきくさをさそふ水みづ。身みは浮草うきくさをさそふ水みづ。なきこそ悲かなしかりけれ。あはれやげにいにしへは。僞いつまんと慢まん最もとも甚はなはだしう。翡翠ひすいの簪かんざしは婀娜あなとたなやかにして。楊柳やうりうの春はるの風かぜに靡なびくがこし。又また鶯あう舌せつの轉まわりは。露つゆを含ふくめる糸萩いとばぎの。かごとばかりに散ちりそむる。花はなよりも猶なほめづらしや。

今は民間みんかん(の)の字あざな賤しづめの女めにさへ穢きたなまれ。諸人しよにんに恥はぢを曝さらし。嬉うれしからぬ月日つひひ身に積つもつて。百年ももとせうの姥うばとなりて候。都みやこは人目ひとめつゝましましや。もしもそれとか夕ゆふまぐれ。月つきもろともに出いで行ゆく。月つきもろともに出いで行ゆく。雲居くもゐ百もも敷しきや。大内山おほうちちやまの山守やまもりも。かゝる憂うれき身みはよも咎とがめじ。木こ隠かくれてよしなや。鳥羽とばの戀塚こひづか秋あきの山やま。月つきの桂かつらの川瀬舟かはせぶね。漕こぎ行ゆく人ひとは誰たれやらん。漕こぎ行ゆく人ひとは誰たれやらん。あまりに苦くるしう候まじほどに。これなる朽木くちきに腰こしを懸かけて休やすまばやと思おもひ候。

ワキ(僧)のう、はや日の暮ひぐれて候。道みちを急いそがうするにて候。や。これなる乞食こつじきの腰こしかけたるは。正まさしく卒都婆そとばにて候。教化けうげして除のけうするにて候。いかにこれなる乞丐こつがい人にん。おことの腰こしかけたるはかたじけなくも佛體ぶつたい色しき性じやうの卒都婆そとばにてはなきか。そこ立ち退のきて餘よの所ところに休やすみ候へ。シテ佛體ぶつたい色しき性じやうのかたじけなきとは宣のたまへども。これほどに文字もじも見みえず。刻きざめる像かたちもなし。唯ただ朽木くちきとこそ見みえたれ。ワキ(僧)「たとひ深山みやまの朽木くちきなりとも。花はな咲さきし木きは隠かくれなし。同どういはんや佛體ぶつたいに刻きざめる木き。などかしろしのなかるべき。シテ、誰たれわれも賤いやしき埋木うめきなれども。心こころの花はなの未なだあれば。手向たむけになどかならざらん。同どうさて佛體ぶつたいたるべき謂いはれはいかに。ワキツレ(僧)「それ卒都婆そとばは金剛薩埵こんがうさつた。かりに出い

化して三昧邪形を行ひ給ふ。シテ、行ひなせる形はいかに。ワキ、地水火風空。シテ、五體  
 五輪は人の體。何しに隔てあるべきぞ。ツレ、像はそれにたがはずとも。心功德は異なるべし。  
 シテ、國「さて卒都婆(薩曲シテ方は「ソトワ」と讀ひ)の功德はいかに。ワキ、國「一見卒都婆永離三惡道。シテ、一  
 念發起菩提心。それもいかでか劣るべき。ツレ、菩提心あらばなど愛き世をば厭はぬぞ。シテ、妻が  
 世をも厭はぬこそ。心こそいとへ。ワキ、心なき身なればこそ。佛體をば知らざるらめ。シテ、國「佛  
 體と知ればこそ卒都婆には近づきたれ。ツレ、國「さらばなど禮をばなさて敷きたるぞ。シテ、とても  
 臥したる此卒都婆。われも休むは苦しいか。ワキ、それは順縁に外れたり。シテ、國「逆縁なりと浮  
 かむべし。ツレ、國「提婆が悪も。シテ、國「觀音の慈悲。ワキ、國「樂特が愚癡も。シテ、國「文珠の智慧。  
 ツレ、國「惡といふも。シテ、善なり。ワキ、國「煩惱といふも。シテ、菩提なり。ツレ、國「菩提もと。シテ、國「樹に  
 あらず。ワキ、國「明鏡又。シテ、國「臺に無し。地「げに本來一物なき時は佛も衆生も隔てなし。も  
 とより愚癡の凡夫を。救はん爲の方便の。深き誓の願なれば。逆縁なりと浮かむべしと。ねん  
 ごるに申せば。眞に悟れる非人なりとて。僧は頭を地につけて。三度禮し給へば。シテ、われは

此時力を得。猶戯れの歌を詠む。極樂のうちならばこそ惡しからめ。そとは何かは苦しがるべ  
 き。地「むつかしの僧の教化や。むつかしの僧の教化や。  
 ワキ、國「さておことはいかなる人ぞ名を御なのり候へ。シテ、國「恥かしながら名をなのり候へし。  
 れは出羽の郡司。小野の良實が女。小野の小町がなれる果にてさむらふなり。ワキ、ワキツト、痛はし  
 やな小町はさもいにしへは優女にて。花の貌輝き。桂の黛青うして。白粉を絶えさす。羅綾  
 の衣多うして。桂殿の間に餘りしぞかし。シテ、國「歌を詠み詩を作り。地「醉をすゝむる筋は。  
 漢月(古來譯本に「四月」とあれども、元此曲は玉造小町社表遊)袖に靜なり。まこと優なる有様の。いつ其ほどにひき  
 かへて。頭には霜蓬を戴き。婢娟たりし兩髪も。膚にかしけて墨亂れ。宛轉(觀世音生二流近世誤りて  
 は白氏文集及び多數の古板譯本による)たりし蠶蛾も。遠山の色を失ふ。百年に一年足らぬつくも髪。かゝる思は有明の。  
 影恥かしき我が身かな。  
 地、頭「頭にかけてる髮には。いかなるものを容れたるぞ。シテ、國「今日も命は知られども。明日の飢  
 ゑを扶けんと。粟豆の餉を髮に容れて持ちたるよ。地「背に負へる袋には。シテ、國「垢膩の垢

つける衣あり。地「臂に懸けたる筐には。シテ「白黒の慈姑(玉皇法衣書以上五字を「田黒の慈」に作る。慈は「福」の終始なり。諸曲の「白黒」といへるは「田黒」の誤り也)あり。地「壊れ裳。シテ「破れ笠。地「面ばかりも隠さねば。シテ「まして霜、雪、雨、露。地「涙をだにも抑ふべき。袂も袖もあらばこそ。今は路頭にさそらひ。往來の人に物を乞ふ。乞ひ得ぬ時は悪心。また狂亂の心つきて。聲變りけしからず。シテ「のう物賜へ、のう、御僧のう。ワキ「何事ぞ。シテ「小町がもとへ通ばうものう。ワキ「おことこそ小町よ。何とて條(寛文本までは「條」を改む)なき事をば申すぞ。シテ「いや小町と云ふ人は。あまりに色が深うて。あなたの玉章、此方の文。誰かきくれて降る五月雨の。詞虚言なりとも一度の返事も無うて。今百年になるが報うて。あら人戀ひしや。あら人戀ひしや。ワキ「詞「人戀ひしいとは。さておことにはいかなる者の附き添ひてあるぞ。シテ「小町に心をかけし人は多き中にも。殊に思ひ深草の四位の少將の。地「恨みの數の廻り來て。車の繁に通はん。日は何時ぞ夕暮。月こそ友よ通路の。關守はありとも。止まるまじや出で立たん。

シテ「淨衣の袴掻いとつて。地「淨衣の袴かいとつて。立烏帽子をかさをり。狩衣の袖をうち被

いて。人目忍ぶの通ひ路の。月にも行く。闇にも行く。雨の夜も風の夜も。木の葉の時雨雪深し。シテ「軒の玉水とくとくと。地「行きては歸り。歸りては行き。一夜、二夜、三夜、四夜、七夜、八夜、九夜、豐の明の節會にも。逢はてぞ通ふ庭鳥の。時をまかへず曉の。繁のはしがき百夜までと通ひ(諸本古案「ひ」の長音の音「い」を別字「い」を以て本文と同大に書きたるため「通ひ」にて)。九十九夜になりたり。シテ「あら苦し、目廻や。地「胸苦しやと悲しみて。一夜を待たで死したりし。深草の少將の。其怨念が附き添ひて。かやうに物には狂はするぞや。これに附けても後の世を。願ふぞ眞なりける。砂を塔と重ねて黄金(今は「わうこん」)の屑濃やかに。花を佛に手向けつ。悟の道に入らうよ。悟の道に入らうよ。

十 紅葉狩

シテ「女(ツレ)時雨を急ぐ紅葉狩。時雨を急ぐ紅葉狩。深き山路を尋ねん。シテ「これは此あたりに住む女にて候。シテ「ツレ「げにやながらへて憂き世に住むとも今ははや。誰白雲の八重葎。茂れる

ワキ「鬼女(前は鬼女の化したる美女)ツレ(四人又は三人)鬼女の化したる女



宿の寂しきに。人こそ見えれ秋の來て。庭の白菊。うつろふ色も。憂き身のたぐいとあはれなり。  
 シテ「あまり寂しき夕まぐれ。時雨るゝ空を詠めつゝ。四方の梢もなつかしさに。伴ひ出づる道のべの。草葉の色も日に添ひて。下紅葉夜の間の露や染めつらん。夜の間の露や染めつらん。朝の原は昨日より。色深き紅を。分け行く方の山深み。げにや谷河に。風のかけたる柵は。流れもやらぬもみぢばを。渡らば錦中絶えんと。まづ木のもとに立ち寄りて。四方の梢を眺めて暫く休み給へや。」

ワキ「詠」面白や頃は長月二十日餘。四方の梢も色々に〔四方の梢〕の語體の間に三度まで用ゐられたるは拙きに過ぎたり。或られたること土蜘蛛の如きもの。。錦を色どる夕時雨。濡れてや鹿の獨鳴く。聲をしるべの狩場の末。げに面白き景色かな。トモ〔從者〕「明けぬとて野邊より山に入る鹿の。跡吹き送る風の音に。駒の足並勇むなり。ますらなが。やたげころの梓弓。やたげ心の梓弓。入野の薄露分けて。行くへも遠き山陰の。鹿垣の道のさかしきに。落ちくる鹿の聲すなり。風の行くへも心せよ。風の行くへも心せよ。」

ワキ「詠」いかに誰かある。トモ「御前に候。ワキ」あの山陰にあたつて人影の見え候は。いかなる者ぞ名を尋ねて來り候へ。トモ「畏つて候。名を尋ねて候へば。やごとなき上臈の。幕打ち廻し屏風を立て。酒宴〔今は〕のななかと見えて候ほどに。ねんころに尋ねて候へば。名をば申さず。唯さる御方とばかり申候。ワキ「あらふしぎや。此あたりにてさやうの人は思ひもよらず候。よし誰にてもあれ上臈の。道のほとりの紅葉狩。ことさら酒宴のななかならば。誰かたがた乗りうち適ふまじと。地馬よりおりて沓を脱ぎ。馬よりおりて沓をぬぎ。道を隔て、山陰の。岩の懸路を過ぎ給ふ。心づかひぞ類なき。心づかひぞ類なき。」

シテ「詠」げにや駈ならぬ身ほど〔みほど〕は「み〇〇」といふ地名の誤には非るか。の山の奥に來て。人は知らじとうちとけて。獨眺むるもみぢばの。色見えけるかいかにせん。ワキ「われは誰とも白眞弓。唯やごとなき御事に。恐れて忍ぶばかりなり。シテ「忍ぶもぢすり誰ぞとも。知らせ給はぬ道のべの。便に立ち寄り給へかし。ワキ「詠」思ひよらずの御事や。何しにわれをば止め給ふべきと。誰さらぬやうにて過ぎ行けば。シテ「あら情なの御事や。一村雨の雨宿り。ワキ「一樹の蔭に。シテ「立ち寄り

て。地「一河の流を酌む酒を。いかでか見すて給ふべきと。恥かしながらも袂にすがり留むれば。さすが岩木にあらざれば。心弱くも立ち歸る。所け山路の菊の酒。何かは苦しがるべき。地「驚げにや虎溪を出てしいにしへも。心ざしなげ捨て難き。人の情の盃の。深き契のためしとかや。シテ「林間に酒を煖めて紅葉を焼くとかや。地「げに面白や所から。巖の上の菩薩。片しく袖も紅葉衣の。紅深き顔ばせの。ワキ「此世の人とも思はれず。地「胸うち騒ぐばかりなり。さなきだに。人心。亂るゝふしは竹の葉の。露ばかりだに受けじとは。思ひしかども盃に。對へば變る心かな。されば佛も戒めの。道は様様多けれど。殊に飲酒を破りなげ。邪淫妄語もるとともに。亂れ心の花がづら。かゝる姿はまた世にも。たぐひ嵐の山櫻。よその見る目もいかならん。シテ「よしや思へばこれとても。地「前世の契淺からぬ。深き情の色見えて。かゝる折しも道のべの。草葉の露のかごとをも。かけてぞ頼む行くするを。契るもはかなうちつけに。人の心も白雲の立ちわづらへる氣色かな。かくて時刻も移りゆく。雲に嵐の聲すなり。散るか正木の葛城の。神の契の夜かけて。月の盃さす袖も。雪を廻らす袂かな。堪へず紅葉。(中ノ舞)

シテ「堪へず紅葉青苔の地。地「堪へず紅葉青苔の地。又これ涼風暮れゆく空に。雨うち濺ぐ夜嵐の。ものすさまじき山陰に。月待つほどの轉寝に。片敷く袖も露深し。夢ばし覺まし給ふなよ。夢ばし覺まし給ふなよ。(中入) (此間に八幡の本社(狂言)出て来り。恥れる維茂に神託を傳へ、太ワキ「驚「あらあさましや我ながら。無明の酒の酔ひ心。まどろむ隙も無きうちに。あらたなりける夢の告と。地「驚く枕に雷火亂れ。天地も響き風をちこちの。たづきも知らぬ山中に。おぼつかなしや恐ろしや。地「ふしぎや今までありつる女。ふしぎや今までありつる女。とりどり化生の姿を現し。或は巖に火焔を放し(今「子)。又は虚空に焔を降らし。咸陽宮の煙のなかに。七尺の屏風の上に猶。あまりて其たけ。一丈の鬼神の。角はかばく(三字意不明。何をか誤り傳へたるなるべし)。眼は日月。面を向くべきやうぞなき。(圖)ワキ「維茂少しも騒がすして。地「維茂少しも騒ぎ給はず。南無や八幡大菩薩と心に念じ。劔を抜いて待ちかけ給へば。微塵になさんと飛んでかゝるを飛び違ひむすと組み。鬼神のまんなか(七字或は誤るべし)刺し通す所を。頭を擱んで舉らんとするを。斬り拂ひ給へば。劔に恐れて巖に(今「は)上るを。引きおろし刺し通し。忽ち鬼神を従へ給ふ。威

勢のほどこそ恐ろしけれ。

十一 老 松

ワキ 老松の空神(前には里の老人) ワキツレ 里の男(但飛梅の四郎)

ワキ(梅津某)ワキツレ(翁者)蓋げに治まれる四方の國。げに治まれる四方の國。關の戸さして通はん。ワキ、  
「そもそもこれは都の西。梅津の何某にて候(今は三季とは我が)。われ北野を信じ。常に歩みをはこび候  
ところろに。ある夜の靈夢に。われを信せば筑紫安樂寺に參詣申せとの御事にて候間(此一句現時の各流  
に御夢を蒙りて候間」と語りて、御重宝。唯今九州に下向仕り候。ワキ、ワキツレ、道行、蓋「何事も心にかなふ此時  
の。心にかなふ此時の。ためしもありや日の本の。國豊かなる秋津洲(此句の例として「洲」字)の。浪  
も音無き四の海。高麗唐土も残りなき。御調の道の末こゝに。安樂寺にも著きにけり。安樂寺に  
も著きにけり。ワキ、蓋「急き候程に九州安樂寺に著きて候。心しづかに參詣申さばやと存じ候。  
(現今の親世流にて  
は此詞を詠はず。)

シテ(里の老人)ツレ(里の男)梅の花笠春も來て。縫ふてふ鳥の梢かな。ツレ「松の葉色も時めきて。シテ

ツレ「十かへり深き縁かな。シテ「風を逐つて潜に開く。年の葉守の松の月に。シテ、ツレ「春を迎へ  
て忽ちに。露ふ四方の草木まで。神の恵みに靡くかと。春めき渡る盛かな。歩を運ぶ宮寺の。  
光のどけき春の日に。松が根の。岩間を傳ふ菩薩。岩間を傳ふ菩薩。數島の道までも。げ  
に未ありや此山の。天ざる雪の古枝をも。猶惜しまる。花盛。手折りやすると守る梅の花垣い  
ざや圍はん。梅の花垣を圍はん。

ワキ「聞くかにこれなる老人に尋ね申すべき事の候。シテ「あなたの事にて候か何事にて候ぞ。ワキ  
「聞き及びたる飛梅とは何れの木を申し候ぞ。ツレ「あら事もおろかやわれらは唯。紅梅殿とこそ  
崇め申し候へ。ワキ、げにげに紅梅殿とも申すべきぞや。誰かたじけなくも御詠歌により。今神木  
となり給へば。崇めても猶飽き足らずこそ候へ。シテ、蓋「さて此方なる松をば。何とか御覽じ分け  
られて候ぞ。ワキ、げにげにこれも牆結ひ回し御注連を引き。眞に妙なる神木と見えたり。誰いか  
さまこれ老松の。シテ、蓋「おそくも心得給ふものかな。シテ、ツレ、蓋「紅梅殿は御覽すらん。色も若  
木の花守までも。華やかなるに引きかへて。地守る我さへに老が身の。影古るびたるまつ人(三季、蓋

非るか由て考ふ)の。翁寂しき木のもとを。老松と御覽せぬ神慮もいかり恐ろしや。  
 ワキ「詞」猶猶當社のいばれ委しく御物語り候へ。シテ「謠」先づ社壇の體を拜み奉れば。北に峨々たる青山あり。地「臚」(臚考へ難し。臚は古來の松本の位或は朗字か)月松閣(觀實二流は松閣と誤ひ地は松)の中に映じ。南に寂々たる瓊門あり。斜日竹竿のもとに透けり。シテ「謠」左に花園の林燈(五字卯月本以下三等なり。大句との關係は花園の林燈の方近きに似たり)あり。地「翠帳紅圍の粧ひ昔を忘れず。右に古寺の舊跡あり。長鐘夕梵の響絶うることなし。げにや心なき。草木なりと申せども。かゝる浮世の理をば。知るべし知るべし諸木の中に松梅は。殊に天神の御自愛にて。紅梅殿も老松も。皆末社と現じ給へり。されば此二つの木は。我が朝よりも猶漢家に徳を顯し。唐(以下唐の故事なり)の帝の御時は。國に文學(各流「ブナク」)盛なれば。花の色をまし。句常より優りたり。文學廢れば句もなく。其色も深からず。さてこそ文を好む木なりけり。梅をば好文木とは附けられたれ。さて松を大夫といふ事は。秦の始皇の御狩の時。天俄に播き曇り。大雨頻に降りしかば。帝雨を凌がんと。小松の蔭に寄り給ふ。此松俄に大木となり。枝を垂れ葉を並べ。木の間透き

間を塞ぎて。其雨を漏さざりしかば。帝大夫といふ爵を贈り給ひしより。松を大夫と申すなり。シテ「謠」かやうに名高き松梅の。地「花も千世までの。行く末久に御垣守。守るべしまるべしや。神はこゝも同じ名の。天満つ空も紅の。花も松ももるともに。神さびて失せにけり。あと神さびて失せにけり。(以上三句今は「現代の春とかや千代萬代の春とかや」と誤へり。徳川時代に徳川氏の松平姓に對しワキ、ワキヅレ、嬉しきかなやいざさらば。嬉しきかなやいざさらば。此松蔭に旅居して。風も嘯く寅の時。神の告をも待ちて見ん。神の告をも待ちて見ん。後シテ老松の靈神「臚」いかに紅梅殿。今夜の客人をば。何とか慰め給ふべき。地「げに愛づらかに春も立ち。シテ「梅も色添ひ。地「松ととも。シテ「名こそ老木の若緑。地「空澄み渡る神がぐら。シテ「歌かうたひ。舞をまひ。地「舞樂を供ふる宮寺の。聲も満ちたるありがたや。(貞ノノノ)シテ「さす枝の。地「さす枝の。梢は若木の花の袖。シテ「これは老木の神松の。地「これは老木の神松の。千代に八千代にさられ石の。巖となりて苔のむすまで。シテ「苔のむすまで。松竹鶴龜の。地「齡を授くる此君の。行末護れと我が神託の。告を知らする松風も。梅も。久しき春こそめ

でたけれ、

十二 頼政

古名 源三位

シテ源三位頼政の(前には里の老人)

ワキ(辰府)詞「これは諸國一見の僧にて候。われ此程は都に候ひて。洛陽の神社残りなく拜み廻りて候。又これより南都に参らばやと思ひ候。天雲の稻荷の社伏し拜み。稻荷の社伏し拜み。猶行く末は深草や。木幡の關を今越えて。伏見の澤田見え渡る。水の水尋ねきて。宇治の里にも著きにけり。宇治の里にも著きにけり。(此間にワキと狂言(里人)との問答あり。)

ワキ「げにや遠國にて聞き及びにし宇治の里。山の二姿、川の流。遠の里、橋の氣色。見所多き名所かな。問あはれ里人の來り候へかし。シテ老人、詞「このうのうの御僧は何事を仰せ候ぞ。ワキ「これはこの所始めて一見の者にて候。此宇治の里において。名所舊跡残りなく御教へ候へ。シテ所には住み候へども。賤しき宇治の里人なれば。名所とも舊跡とも。誰いさ白浪の宇治の川に。舟と橋とは有りながら。渡りかたれたる世の中に。住むばかりなる名所舊跡。何とか答へ申すべき。

ワキ、詞「いやさやうには承り候へども。勸學院の雀は蒙求を轉るといへり。所の人にてましませば御心憎うこそ候へ。先づ喜撰法師が住みける庵はいづくのほどにて候ぞ。シテ「さればこそ大事の事を御尋ねあれ。喜撰法師が庵は。誰我が庵は都の巽しかぞ住む。詞世を宇治山と人はいふなり。誰人はいふなりとこそ。主だにも申し候へ。尉は知らず候。ワキ、詞「又あれに一村の里の見て候は楨の島候か。シテ「さん候。楨の島とも申し。又宇治の川島とも申すなり。ワキ「これに見えたる小島が崎は。シテ、詞「名に橋の小島が崎。ワキ「向ひに見えたる寺は。いかさま惠心の僧都の。御法を説きし寺候な。シテ「のうのう旅人。あれ御覽せよ。名にも似ず月こそ出づれ朝日山。地「月こそ出づれ朝日山。山吹の瀬に影見えて。雪さしくだす島小舟。山も河も蹴蹴として。是非を分かぬ氣色かな。げにや名にし負ふ。都に近き宇治の里。聞きしに優る名所かな。聞きしに優る名所かな。

シテ、詞「いかに申し候。この所に平等院と申す御寺の候(今は「御覽せられて候か。ワキ「不知案内の事にて候ほどに。未だ見ず候御教へ候へ。シテ「こなたへ御出で候へ(此一切皆)。これこそ平等院

にて候へ。又これなるは釣殿と申して。面白き所にて候よく御覽候へ。ワキ「げにげに面白  
 き所にて候。又これなる芝を見れば。扇の如く取り残されて候は。何と申したる事にて候ぞ。  
 シテ「さん候。此芝について物語の候語つて聞かせ申し候はん(今は「然」)。昔此所に宮軍のありし  
 に。源三位頼政合戦に打ち負け(今此流は「打」)。扇を(今此世流は「敷き自害し果て給ひぬ。されば名將  
 の古跡なればとて。扇の形に取り残して。今に扇の芝と申し候。ワキ「痛はしやさしも文武に  
 名を得し人なれども。跡は草露の道のべとなつて。行人征馬の行くへの如し。あら痛はしや候。  
 シテ「聞げによく御用ひ候ものかな。しかも其宮軍の月も日も今日に當りて候はいかに。ワキ「何  
 と宮軍(今は「其」)の月も日も今日に當りたる候や。シテ「誰かやうに申せばわれながら。よそにはあ  
 らす旅人の。草の枕の露の世に姿見えんと來りたり。現とな思ひ給ひそとよ。地「夢の浮世の中  
 宿の。夢の浮世の中宿の。宇治の橋守年を経て。老の浪も打ち渡す。遠方人に物申す。われ頼政  
 が幽霊と。名のりもあへず失せにけり。名のりもあへず失せにけり。(中入)  
 ワキ「聞きては頼政の幽霊假に現れ。われに詞を交しけるぞや。誰いざや御跡叩はんと。思ひ

寄るべの波 枕。思ひ寄るべの波 枕。汀も近し此庭の扇の芝を片敷きて。夢の契を待たうよ。  
 後ジテ(頼政の題)「血は涿鹿の河となつて。紅波楯を流し。白刃骨を砕く。世を宇治川の綱代の波。あ  
 ら閻浮戀ひしや。伊勢武者は皆氷魚威の錯着て。宇治の綱代にかゝりけるかな。泡沫の。あはれば  
 かなき世の中に。地「蝸牛の角の争も。シテ「はかなかりける心かな。何あら貴の御事や。猶猶  
 御經讀み給へ。ワキ「誰不思議やな法體の身にて甲冑を帯し。御經讀めと承るは。いかさま聞  
 きつる源三位の。其幽霊にてましますか。シテ「聞げにや紅は園生に植ゑても隠れなし。諸名の  
 らぬさきに。頼政と御覽するこそ恥かしけれ。たゞた御經讀み給へ。ワキ「誰御心安く思召  
 せ。五十展轉の功力だに。成佛まさに疑なし。況してやこれは直道に。シテ「用ひなせる法の  
 力。ワキ「合ひに合ひたり所の名も。シテ「平等院の庭の面。ワキ「思ひ出でたり。シテ「佛在世  
 に。地「佛の説きし法の場。佛の説きし法の場。こそぞ平等大慧の。功力に頼政が。佛果を得  
 んぞありがたき。シテ「今は何をか包むべき。これは源三位頼政。執心の波に浮き沈む。因果

の有様顯すなり。

地「抑」治承の夏の頃。よしなき御謀叛を勸め申し。名も高倉の宮のうち。雲居のよそに有明の。月の都を忍び出で。シテ「愛」き時しにも。近江路や。地「三井寺」指して落ち給ふ。さるほどに。平家は時を廻らさず。數萬騎の兵を。關の東に遣はすと。聞くや音羽の山嶺く。山科の里近き。木幡の關をよそに見て。こゝぞ憂き世の旅心。宇治の川橋打ち渡り。大和路指して急ぎしに。シテ「寺」と宇治との間に。地「關路」の駒の隙もなく。宮は六度まで御落馬にて。煩はせ給ひけり。これは「(要)多(金剛)前」の夜。御寢ならざる故なりとて。平等院にして暫く御座を構へつ。宇治橋の中間引き離し。下は川波、上に立つも。ともに白旗を靡かして。寄する敵を待ち居たり。シテ「調」さるほどに源平の兵。宇治川の南北の岸に打ち望み。関の聲矢叫の音。波に類へておびたし。橋の行桁を隔て、戦ふ。敵身方には筒井の淨妙。同一頼法師。敵身方の目を驚かす。かくて平家の大勢。橋は引いたり、水は高し。謀さすが難所の大河なれば。さう無う渡すべきやうも無かつしところに。地「田原」の又太郎忠綱と名のつて。宇治川の先陣われなりと。名ものりも

へす三百餘騎。地「戀」を汰し(源水には「汰へ」と書き「ソロへ」とも、「汰」は、洗滌する意にて橋の意なし。)河水に少しもためらはず。群れある羣鳥の翅を並ぶる羽音もかくやと。白波にざつざつと打ち入れて。浮きぬ沈みぬ渡しけり。シテ「忠綱」つはものに(今は)下知して曰く。地「水」の逆巻く所をば岩ありと知るべし。弱き馬をば下手に立て。強きに水を防がせよ。流れん武者には弓弾を取らせ。互に力を合すべしと。唯一人の下知によつて。さばかりの大河なれども。一騎も流れずこなたの岸に叫いてあがれば。身方の勢はわれながら踏みもたためず。半町ばかり覺えず退つて。斬先を揃へて。こゝを最後と戦うたり。さるほどに入り亂れ。われもわれもと戦へば。シテ「頼政」が頼みつる。地「兄弟」の者も討たれければ。シテ「今」は何をか期すべきと。地「唯一」條に老武者の。シテ「これまで」と思ひて。地「これまで」でと思ひて。平等院の庭の面。これなる芝の上に扇を打ち敷き。鎧脱ぎ捨て座を組み立て。刀を抜きながら。さすが名を得し其身とて。シテ「埋木」の花咲くことも無かりしに。身の成る果はあはれなりけり。地「あと」訪ひたまへ御僧よ。かりそめながらこれとても。他生の種の縁に今。扇の芝の草の蔭に。

歸るとて失せにけり。立ち歸るとて失せにけり。

十三 井筒

シテ 紀有常の女の姿(前には里の女)

ワキ(旅僧)「これは諸國一見の僧にて候。われ此程は南都七堂に参りて候。又これより初瀬に参らばやと存じ候。これなる寺を人に尋ねて候へば。在原寺とかや申し候程に。立ち寄り一見せばやと思ひ候。蓋さてはこの在原寺は。いにしへ業平、紀の有常の息女。夫婦住み給ひし石上なるべし。風吹けば沖つ白波龍田山と詠じけんも。この所にてのことなるべし。昔語の跡訪へば。其業平の友とせし。紀の有常の常なき世。妹脊をかけて申はん。妹脊をかけて申はん。シテ(里の女)「曉 毎の関伽の水。曉 毎の関伽の水。月も心や澄ますらん。さなきだにもの寂しき秋の夜の。人目稀なる古寺の。庭の松風更け過ぎて。月も傾く軒端の草。忘れて過ぎしいにしへを。忍ぶ顔にていつまでか。待つ事なくてはなからへん。げに何事も思ひでの。人には残る世の中かな。唯いつとなく一條に。頼む佛の御手の糸。導き給へ法の聲。迷ひをも照らさせ給ふ御誓。

て 照らさせ給ふ御誓。げにもと見えて有明の。行くへは西の山なれど。眺めは四方の秋の空。松の聲のみ聞ゆれども。嵐はいづくとも。定めなき世の夢心。何の音にか覺めてまし。何の音にか覺めてまし。

ワキ「われ此寺に休らひ。心を澄ます折ふし。いと艶めける女性。庭の板井を掬ひあげ花水とし。これなる塚に廻向の氣色見え給ふは。如何なる人にてましますぞ。シテ「これは此あたりに住む者なり。此寺の本願在原の業平は。世に名をとめし人なり。されば其跡のしるしもこれなる草(今現世流は「塚」の陰やらん。わらはも委しくは知らず候へども。花水を手向け御跡を。用ひまゐらせ候。ワキ「げにげに業平の御事は。世に名をとめし人なりさりながら。今は遙かに遠き世の。昔語の跡なるを。しかも女性の御身として。かやうに申ひ給ふこと。其在原の業平に。誰いかさま故ある御身やらん。シテ「故ある身かと問はせ給ふ。其業平は其時だにも。昔男と云はれし身の。況してや今は遠き世に。故も縁も有るべからず。ワキ「もつとも仰はさる事なれども。こゝは昔の舊跡にて。シテ「まこそ遠く業平の。ワキ「あとは残りてさすがにいました。シテ「聞えは朽ちぬ世語



な。ワキ「語れば今も。シテ昔男の。地「名ばかりは。在原寺の跡古りて。在原寺のあと古りて。松も老いたる塚の草。これこそそれよ亡き跡の。一むら薄の穂に出づるは。いつの名残なるらん。草茫茫として露深々と古塚の。眞なるかないにしへの。跡なつかしき氣色かな。跡なつかしき氣色かな。

ワキ「猶猶樂平の御事委しく御物語り候へ。地「昔在原の中將。年経てこゝに石上。古りにし里も花の春。月の秋とて住み給ひしに。シテ其頃は紀の有常が女と契り。妹背の心淺からざりしに。地「又河内の國高安の里に。知る人ありて二道に。忍びて通ひ給ひしに。シテ風吹けば沖つ白波龍田山。地「夜半にや君がひとり行くらんと。おぼつかなきみのよるの道。行くへを思ふ心送げて。よその契りは枯れ枯れなり。シテげに情知るうたかたの。地「哀なのべしも理なり。昔此國に住む人のありけるが。宿を並べて門の前。井筒に倚りて髪髮子の。友だち語らひて。互に影を水鏡。面を並べ袖を懸け。心の水も底ひなく。移る月日も重なりて。おとなしく恥がはしく。互に今はなりにけり。其後彼のため男。言葉の露の玉章の。心の花も色添ひて。シテ井筒

あづいに懸けしまるがたけ。地「生ひにけらしな妹見ざるまにと。詠みて贈りけるほどに。其時女も。くらべこし振分髪も肩過ぎぬ。君ならずして誰かあぐべきと。たがひに詠みし故なれや。筒井の女とも。聞えしは。有常が女の古き名なるべし。

地「げにや古りにし物語。聞けば妙なる有様の。あやしや名のりおほしませ。シテ眞はわれは戀衣。紀の有常が女とも。いさ白波の龍田山。夜半に紛れて來りたり。地「ふしぎやさては龍田山。色にぞ出づるもみぢ葉の。シテ紀の有常がむすめとも。地「又は井筒の女とも。シテ恥かしながらわれなりと。地「結ふや注連繩の長き世な。契りし年はつゝ井筒。井筒の影に隠れけり。井づりのかげにかくれけり。(中入)

ワキ「更け行くや。在原寺の夜の月。在原寺の夜の月。昔を返す衣手に。夢待ちそへて假枕。昔の蓆に臥しにけり。昔の蓆に臥しにけり。後ジテ(有常の女の戀)「あだなりと名にこそ立てれ櫻花。年に稀なる人も待ちけり。かやうに詠みしもわれなれば。人待つ女とも云はれしなり。われ筒井筒の昔より。眞弓槻弓年を経て。今はなき世

に業平の。かたみの直衣、身に觸れて。恥かしや昔男に移舞。地「雪を廻らす花の袖。(序ノ舞)  
 シテ「蓋」に來て昔ぞ返す在原の。地「寺井に澄める。月ぞさやけき。寺井に澄める月ぞさやけ  
 き。女「月やあらぬ。春や昔とながめしも。いつの頃ぞや。筒井筒。地「つゝ井づゝ。井筒にかけ  
 し。女「まるがたけ。地「生ひにけらしな。女「老いにけるぞや。地「さながら見見えし昔男の。  
 冠、直衣は女とも見えず。男なりけり業平の面影。女「見ればなつかしや。地「われながらなつ  
 かしや。亡婦魂の姿は。凋める花の色無うて。句残りて在原の寺の鐘もほのぼのと。明くれ  
 ば古寺の。松風や芭蕉葉の。夢も破れて醒めにけり。夢は破れ明けにけり。

十四 三井寺

シテ「千福丸の母 子方 千福丸  
 ワキ「園城寺住僧 ワキヅレ 同 住僧

シテ「文」南無や大慈大悲の觀世音さしも草。さしも畏き誓の末。一稱一念猶頼みあり。まし  
 てや此程日を送り。夜を重れたる頼みの末。などか其かひ無からんと。思ふ心ぞ哀なる。憐み  
 給へ思ひ子の。行く末何となりぬらん。行く末何となりぬらん。枯れたる木にだにも。枯れたる

木にだにも。花咲くべくはおのづから。いまだ若木のみどり子に。二度などか逢はざらん。二度な  
 どか逢はざらん。詞ありがたや候。少し睡眠のうちに。あらたなる靈夢を蒙りて候はいかに。  
 わらばをいつも訪ひ慰むる人の候。あはれ來り候へかし語らばやと思ひ候。(住言シカク)シテ「唯今少  
 し睡眠のうちに。あらたなる御靈夢を蒙りて候。我が子に逢はんと思は。三井寺へ參れとあらた  
 に御靈夢を蒙りて候。(住言シカク)女「あら嬉しと御あはせ候ものかな。告に任せて三井寺とやらんへ  
 參り候べし。

ワキ(園城寺住僧)ワキヅレ(從僧)「秋もなかばの暮待ちて。秋もなかばの暮待ちて。月にこゝろや急ぐらん。  
 ワキ「詞「これは江州園城寺の住僧にて候。又これにわたり候稚き人は。愚僧を頼む由仰せ候間。  
 力なく師弟の契約をなし申して候。又今夜は八月十五夜明月にて候ほどに。稚き人を伴ひ申し。  
 皆皆講堂の庭に出で、一月を眺めばやと存じ候。ワキ、ワキヅレ、類ひなき名を望月の今宵とて。名  
 を望月の今宵とて。夕を急ぐ人心。知るも知らぬももるとともに。雲を厭ふやかれてより。月の名  
 頼む日影かな(此句を不明。明和本には「四空心かな」とせり)。月の名頼む日影かな。

後ジテ(狂女)雪ならは幾度袖を拂はまし花の吹雪と詠じけん。志賀の山越うち過ぎて。眺めの末は湖の。鳩照る比叡の山高み。上見ぬ鷺の太(今「おとと」なるべし)山とやらんを。今日の前に拜む事よ。あらありがたの御事や。詞かやうに心あり顔なれども。われは物に狂ふものう。いやわれながらことわり。あの鳥類や畜類だにも。親子のあはれは知るぞかし。況してや人の親として。いとほしかなしと育てつる。子の行くへをも白糸の。地「亂心や狂ふらん。シテ」都の秋を捨てて行かば。地「月見ぬ里に住みや習へると。さこそ人の笑はめ。よし花も、紅葉も、月も、雪も、古里に。我が子のあるならば。田舎も住みよかるべし。いざ古里に歸らん。いざ古里に歸らん。歸ればさし涙やしがらさき。ひとつ松。みどり子の類ならば。松風にこと問はん。松風も今は厭はじ櫻さく。春ならば志賀幸崎の。里をも早く杉間吹く。風凄しき秋の水の三井寺に著きにけり。三井寺に早く著きにけり。

ワキ「桂は實る三五の暮。名高き月にあこがれて。庭の木蔭に休らへば。シテ」げにげに今宵は三五夜中の新月の色。二千里の外の故人の心。水の面に照る月なみを數ふれば。秋も最中、夜もなか

ば。所からさへ面白や。

地「月は山。風ぞ時雨に鳩の湖。風ぞ時雨に鳩の湖。浪も(の)粟津の森見えて。湖越しのかすかに向ふ影なれど。月は眞澄の鏡山。山田矢橋の渡舟の。よるは通ふ人なくとも。月の誘は、おのづから。舟もこがれて出づらん。舟人もこがれ出づらん。(狂言シカク)

シテ「面白の鐘の音やな。我が古里にては清見寺の鐘をこそ常は聞き馴れしに。これは又さし波や。三井の古寺鐘はあれど。詞昔にかへる聲は聞えず。眞や此鐘は秀郷とやらんの龍宮より。取りて歸りし鐘なれば。龍女が成佛の縁に任せて。わらはも鐘を撞くべきなり。地「影はさながら霜夜にて。影はさながら霜夜にて。月にや鐘は冴えぬらん。

ワキ「問」やあやあ暫。狂人の身にて何とて鐘をば撞くぞ急いで退き候へ。シテ「よる庚公が樓に登りしも。月に詠せし鐘の音なり許さしめ。ワキ「それは心ある古人の詞。狂人の身として鐘撞くべきこと。思ひも寄らぬことにてあるぞとよ。シテ「今宵の月に鐘撞くこと。狂人とな厭ひ給ひそ。或詩に曰く。團圓として海嶠を離れ。漸漸として雲衢を出づ。此後句無かりしかば。明

月に向つて心を澄まいて。蓋今宵一輪満てり。清光何れの所にか無からんと。詞此句を設けて  
餘りの嬉しさに心亂れ。高樓に登つて鐘を撞く。人人いかにと咎めしにこれは詩狂と答ふ。かほ  
どの聖人なりしだに。月には亂るゝ心あり。誰況してや拙き狂女なれば。地「許し給へや人人よ。  
煩惱の夢を醒ますや法の聲も靜に。先づ初夜の鐘を撞く時は。シテ「諸行無常と響くなり。地「後  
夜の鐘を撞く時は。シテ「是生滅法と響くなり。地「晨朝の響は。シテ「生滅滅已。地「入相は。  
シテ「寂滅。地「爲樂と響きて。菩提の道の鐘の聲。月も數添ひて。百八煩惱の眠の。驚く夢の世  
の迷も。はや盡きたりや後夜の鐘に。われも五障の雲霽れて。眞如の月の影を眺め居りて(傳)  
明かさん。

地「それ長樂の鐘の聲は。花の外に盡きぬ。シテ「又龍池の柳の色は。地「雨のうちに深し。  
シテ「其外にも世世の人。言葉の林のかけて聞く。地「名も高砂の尾上の鐘。曉かけて秋の霜。  
曇るか月もこもりくの。初瀬も遠し難波寺。シテ「名どころ多き鐘の音。地「盡きぬや法の聲ならん。  
山寺の春の夕暮來てみれば。入相の鐘に花を散りける。げに惜しめども。など夢の春と暮れぬら

ん。其外曉の妹背(明和木三笠)を惜しむきぬぎぬの。恨みを添ふる行くへにも。枕の鐘や響くら  
ん。又待つ宵に更け行く鐘の聲聞けば、飽かぬ別の鳥はものかばと詠ぜしも。戀路の便の音づれ  
の聲と聞くものを。又は老らくの。寢覺ほど経るいにしへを。今思ひ寢の夢だにも。涙心の寂し  
さに。此鐘のつくづく。思ひを盡くす曉を。いつの時にか比べまし。シテ「月落ち鳥(原作「カラス)を  
したるには非ずして、例の能樂師のかく誰か愛へたるなるべし。啼いて。地「霜天に満ちて凄ましく。江村(原)の漁火もほのかに。半夜の  
鐘の響は。客の船にや通ふらん。蓬窓雨滴りて馴れし潮路の楫枕。うき寢を變る此湖は。浪風  
も靜にて。秋の夜すがら月すむ。三井寺の鐘ぞさやけき。

子(千満丸)調「いかに申すべき事の候。ワキ「何事にて候ぞ。子「これなる物狂の國里を問うて給はり候  
へ。ワキ「これは思ひもよらぬ事を承り候ものかな。さりながら易き問のこと尋ねて参らせうす  
るにて候。いかにこれなる狂女。おことの國里はいづくにて(今「いづく)あるぞ。シテ「これは駿河  
の國清見が關の者にて候。子「何のう清見が關の者と申候か。シテ「調「あらふしぎや。今の物仰ら  
れつるは。正しく我が子の千満殿さめれあらめづしや候。ワキ「暫。これなる狂女は鹿忍なる

事を申す者かな。さればこそ物狂ひにて候。シテ謠のうこれに物には狂はぬものを。物に狂ふも別れ故。逢ふ時は何しに狂ひ候べき。これは正しき我が子にて候。ワキ「謠」さればこそ我が子と申すか條なき事を申し候。急いでのき候へ。子「あら悲しやさのみな御打ち候ひそ。ワキ」言語道断はや色に出で給ひて候。此上はまつすぐに御名のり候へ。子「謠」今は何をか包むべき。われは駿河の國清見が關の者なりしが。人商人の手に渡り。今此寺にありながら。母上われを尋ね給ひて。かやうに狂ひ出で給ふとは夢にもわれは知らぬなり。シテ「またわらはも物に狂ふこと。あの見に別れし故なれば。たまたま逢ひ見る嬉しさのまゝ。やがて母よと名のること。我が子の面伏なれど。子故に迷ふ親の身は。恥も人目も思はれず。

地「謠」あら痛はしの御事や。よそ目も時によるものを。逢ふを悦び給ふべし。シテ「嬉しながらも衰ふる。姿はさすが恥かしの。もりて餘れる涙かな。地「實に逢ひ難き親と子の。縁は盡させぬ契とて。シテ」日こそ多きに今宵しも。地「この三井寺に廻りきて。シテ」親子に「謠」(「謠」)逢ふは。地「何故ぞ。この鐘の聲たて。物狂のあるぞとて。御咎めありし故なれば。常の契には。別れの

鐘と厭ひしに。親子のための契には。鐘ゆゑに逢ふ夜なり。嬉しき鐘の聲かな。かくて伴ひ立ち歸り。かくて伴ひ立ち歸り。親子の契盡させずも。富貴の家となりけり。げにありがたき孝行の。威徳ぞめでたかりける。威徳ぞめでたかりける。

十五 天鼓

前ジテ 王 伯 後ジテ 天鼓の聲

ワキ(官人)「これは唐後漢の帝に仕へ奉る臣下なり。さても此國の傍に。王伯王母とて夫婦の者あり。かの者一人の子を持つ。其名を天鼓と名づく。彼を天鼓と名づくることは。彼が母夢中に天より一の鼓ふりくだり。胎内に宿ると見て出生したる子なればとて。其名を天鼓と名づく。其のちてんより眞の鼓ふりくだり。打てば其聲妙にして。聞く人感を催せり。此由帝聞召され。鼓を内裏に召されしに。天鼓深く惜しみ。鼓を抱き山中に隠れぬ。然れどもいづくか王地ならねば。官人を以つて捜し出だし。天鼓をば呂水の江に沈め。鼓をば内裏に召され。阿房殿雲龍閣に据ゑ置かれて候。又其後彼の鼓を打たせらるれども更に鳴ることなし。いかさま主の別れを歎

き鳴らぬと思召さる。間。彼の者の父(以上五字寛文以前)王伯を召して打たせよとの宣旨に任せ。唯今

王伯が私宅へと急ぎ候。

前ジテ王伯露の世に。猶老の身のいつまでか。又此秋に残るらん。

傳へ聞く孔子は鯉魚に別れて

思ひの火を胸にたき。白居易は子を先だて、枕に残る薬を恨む。これ皆仁義禮智信の祖師。文道の

大祖たり。われらが歎くは咎ならじと。思ふ思ひに堪へかぬる。涙いとなき秋かな。思はじ

と思ふ心のなどやらん。夢にもあらずうつつにも。なき世の中ぞ悲しき。なき世の中ぞ悲しき。

よしさらば思ひ出でじと思ひ寝の。思ひ出でじと思ひ寝の。闇の現に生れきて。忘れんと思ふ心

こそ忘れぬよりは思ひなれ。唯何故の愛身の命のみこそ恨みなれ。命のみこそ恨みなれ。(この一候

へ故事を温ぬること遠くして行文亦甚拙し。)

ワキ、詞「いかに此屋のうちに王伯があるか。シテ誰にて渡り候ぞ。ワキ「これは(三字古板)帝よりの宣

旨にてあるぞ。シテ、宣旨とはあら思ひよらずや何事にて御座候ぞ。ワキ「さても天鼓が鼓内裏に召

されて後。種種打たせらるれども更に鳴ることなし。いかさま主の別れを嘆き鳴らぬと思召さる

る間。王伯に参りて仕れとの宣旨にてあるぞ。急いで参内仕り候へ。シテ、仰せ畏まつて、承

り候さりながら。勅命にだに鳴らぬ鼓の。老人が参りて打ちたればとて。何しに聲の出づべきぞ。

いやいやこれも心得たり。勅命を背きし者の父なれば。重ねて失はれん爲にてぞあるらん。

よしよしそれも力なし。我が子の爲に失はれんは。それこそ老の望なれ。あら歎くまじややがて参

り候べし。ワキ「いやいやさやうの宣旨ならず。唯々鼓を打たせんと。其爲ばかりの勅諭な

り。急いで参り給ふべし。シテ、たとひ罪には沈むとも。たとひ罪には沈むとも。又は罪にも沈ま

ずとも。憂きながら我が子のかたみに。帝を拜み参らせん。帝を拜み参らせん。

ワキ、詞「急いで参り候へ。程もなく(以上十一字今は急ぐ間程なくと讀)内裏にてあるぞ。此方へ来り候へ。

シテ「勅諭にて候程に。これまでは参りて候へども。老人が事をば御免あるべく候。ワキ、詞「申

す所は理なれども。先づ鼓を仕り候へ。鳴らすは力なき事急いで仕り候へ。シテ、さては辭

すともかなふまじ。勅に應じて打つ鼓の。聲もし出でばそれこそは。我が子のかたみと夕月の。

露上に輝く玉殿に。始めて臨む老の身の。地「生きてある身は久方の。生きてある身は久方の。







られたり。あら面白の海上やな。松浦瀉。西に山なき有明の。月の入る雲も浮むや沖つ舟。雲も浮むや沖つ舟。互にかゝる朝まだき。海はそなたか唐土の。船路の旅も遠からで。一夜泊と聞くからに。月も程なき。名残かな。月も程なき名残かな。

ワキ、問「われ萬里の波濤を凌ぎ。日本の地にも著きぬ。これに小船一艘浮めり。見れば漁翁なり。いかにあれなるは日本の者か。シテ（漁翁）さん候。これは日本の漁翁にて候。御身は唐の白樂天にてましますな。ワキ、答「ふしぎやな始めて此土に渡りたるを。白樂天と見る事は。何の故にてあるやらん。ツレ（漁夫）其身は漢土の人なれども。名は先だつて日本に聞ゆ。隠れなければ申すなり。ワキ、答「たひ其名は聞ゆるとも。それぞとやがて見知ること。あるべきことと思はれず。シテ、ツレ「日本の智慧を計らんとて。樂天來り給ふべきとの。聞えは普き日の本に。西を眺めて沖の方より。船だに見ゆれば人毎に。すばやそれぞと心づくしに。地、今や今やと松浦舟。今や今やと松浦舟。沖より見えて隠れなき。もろこし船のから人を。樂天と見ることは何か空めなるべき。むつかしやことさやぐ。唐人なれば御言葉をも。とても聞きも知らばこそ。あらよしな釣棹の。暇惜しや釣垂

れん。暇をしや釣垂れん。

ワキ、問「猶猶尋ねべき事あり舟を近づけ候へ。いかに漁翁。扱此頃日本には何事を説ぶぞ。シテ、答「唐土には何事を説ひ給ひ候ぞ。ワキ、唐には詩を作つて遊ぶよ。シテ、日本には歌をよみて人の心を慰め候。ワキ、そも歌とはいかに。シテ、それ天然の靈文を唐土の詩賦とし。唐土の詩賦をもつて我が朝の歌とす。されば三國を和らげ來るを以て。大に和ぐと書いて大和歌とよめり。知らし召されて候へども。翁が心を御覽せんため候な。ワキ、いや其義にてはなし。いでさらば目前の氣色を詩につけて聞かせう。青苔衣をおびて（三字隠れるか、負ひてと）廠の肩に懸り。白雲帯に似て山の腰を圍る。心得たるか漁翁。シテ、青苔とは青き苔の。廠の肩に懸れるが衣に似たる候。な（二字今は變へて「かや」）。白雲帯に似て山の腰を圍る。面白し面白し。日本の歌も唯これ候よ。

廠、答「衣着たる廠はさもなく（拾葉抄に、日本風土記に「三切」さびからで「とあるよ」）。衣着ぬ山の帯をするかな。ワキ、ふしぎやな其身は賤しき漁翁なるが。かく心ある詠歌を連ぬる。其身はいかなる人やらん。シテ、問「人がましやな名も無き者なり。されども歌をよむことは。人間のみに限るべからず。生きと

し生けるもの毎に。歌をよまぬはなきものな。ワキ謡「そもや生きとし生けるものとは。さては鳥類音類までも。シテ和歌を詠する其ためし。ワキ和國に於いて。シテ證歌多し。地花に啼く鶯。水に住める蛙まで。唐土は知らず。日本には歌をよみ候ぞ。翁も大和歌をばかたの如くよむなり。そもそも鶯の歌をよみたる證歌には。孝謙天皇の御宇かとよ。大和の國高天の寺に住む人の。しきれんの(五字誤なり。もとあるとしのなりしを、原本に「或年の」と書きたる字體明瞭ならず「式年の」と見取らる。春の頃。のきは、うめ、うぐひす。きた、な、こを、き。しやうまいてうらい。ふさうけんほんせいな。)軒端の梅に鶯の。來りて鳴く聲を聞けば。初陽毎朝來。不相還本栖と鳴く。文字に寫してこれを見れば。三十一文字の詠歌の言葉なりけり。シテ初春の。あした毎には來れども。地逢はでぞ歸るものとすみかにと聞えつる。鶯の聲を始として。その外鳥類音類の。人にたぐへて歌をよむ。ためしは多くありそ海の。濱の眞砂の數々に。生きとし生けるもの何れも歌をよむなり。地「げにや和國の風俗の。げにや和國の風俗の。心ありける海士人の。げにありがたきならひかな。シテ」とても和國の歌ひ。和歌を詠じて舞歌の曲。其色々を現さん。地「そもや舞樂の遊とは。其役役は誰ならん。シテ誰なくとも御覽せよ。われだにあらば此舞樂の。地「鼓は浪の音。

笛は龍の吟する聲。舞人は此尉が。老の浪の上に立つて。青海に浮みつゝ。海青樂を舞ふべしや。シテ葦原の。地國も動かじ萬代までに。(申入)後ジテ(住吉明神、)山かげの映るか水の青き海の。地浪の鼓の海青樂。(眞ノ序ノ舞)シテ西の海棧(諸曲「アチキ」が原の波間より。地現れ出でし住吉の神。地住吉の神。住吉の。シテ現れ出でし住吉の。地住吉の神の力のあらん程は。よも日本をば從へさせ給はじ。速かに浦の波。立ち歸り給へ樂天。住吉現じ給へば。住吉現じ給へば。伊勢、石清水、賀茂、春日、鹿島、三島、諏訪、熱田、安藝の嚴島の明神は。娑竭羅龍王の第三の姫宮にて。海上にうかんて海青樂を舞ひ給へば。八大龍王は。八音(古き「音」を假名にて書きたる爲、讀み誤りて「り」の曲を奏し。空海に翔りつゝ。舞ひ遊ぶ小忌衣の。手風神風に吹き戻されて唐船は。こゝより漢土に歸りけり。げにありがたや神と君。げにありがたや神と君が代の。動かぬ國ぞ久しき。動かぬ國ぞ久しき。

十七 實盛

ワキ上 實盛の屋前には亡霊の老人  
ワキツレ 從僧

ワキ上人「誰それ西方は十萬億土。遠く生るゝ道ながら。こゝも己心の彌陀の國。貴殿群集の稱名の聲。ワキツレ(從僧)「日日夜夜の法の場。ワキツレにも眞に攝取不捨の。ツレ「誓に誰か。ワキツレ「残るべき。ワキツレ「獨猶。佛の御名を尋ねみん。佛の御名を尋ねみん。おのおの歸る法の場。知るも知らぬも心引く誓の網に漏るべきや。知る人も、知らぬ人も渡さばや。彼の國へ行く法の舟。浮むも易き道とかや。うかむも易き道とかや。シテ(老翁)「笙歌遙かに聞ゆ孤雲の上。聖主來迎す落日の前。あら貴や今日も亦。紫雲の立つて候ぞや。調鉦の音、念佛の聲の聞え候。さては聽聞も今なるべし。さなきだに立ち居苦しき老の浪の。寄りもつかずは法の場に。よそながらもや聽聞せん。一念佛稱名の聲のうちには。攝取の光明曇らねども。老眼の通路猶もつて明ならず。よし少しは遅くとも。こゝをさるゝと遠かるまじや。南無阿彌陀佛。

ワキ(調)「いかに翁。さては毎日の稱名に怠ることなし。されば志の者と見るところに。おことの姿餘人の見ることなし。誰に向つて何事を申すぞと。皆人不審しあへり。今日はおことの名を名のり候へ。シテ「これは思ひもよらぬ仰せかな。もとより所は天さかる。鄙人なれば人がましやな。名もあらばこそ名のりもせめ。唯上人の御下向。偏に彌陀の來迎なれば。畏うぞ長生して。調此稱名の時節に逢ふこと。善盲龜の浮木。優曇華の花待ちたる心ちして。老の幸身にこえ。悦びの涙袂にあまる。されば此身ながら。安樂國に生るか。無比の歡喜をなすところ。輪廻妄執の閻浮の名を。又改めて名のらんこと。口惜しうこそ候へとよ。ワキ(調)「げに翁の申すところ。理至極せり。さりながら一つは懺悔の廻心ともなるべし。唯おことが名をなのり候へ。シテ「さては名のらでは適ひ候まじきか。ワキ「ながなかの事急いでなのり候へ。シテ「さらば御前なる人を除けられ候へ。近う参りて名のり候べし。ワキ「もとより翁の姿餘人の見ることは無けれども。所望ならば人をば除くべし。近う寄りて名のり候へ。シテ「昔長井の齋藤別當實盛は。此篠原の合戦に討たれぬ。きこしめし及ばれてこそ候らぬ。ワキ「それは平家の侍、弓取

つての名將。其軍物語は無益。唯おこの名を名のり候へ。シテ「いやさればこそ其實盛は。此御前なる池水にて鬢髪をも洗はれしとなり。されば其執心残りけるか。今も此あたりの人には幻の如く見ゆると申し候。ワキ「さて今も人に見え候か。シテ「深山水の其梢とは見えざりし。櫻は花に現れたる。老木をそれと御覽せよ。ワキ「ふしぎやさては實盛の昔を聞きつる物語。人の上ぞと思ひしに。身の上なりけるふしぎさよ。聞きてはおことは實盛の。其幽霊にてましますか。シテ「われ實盛が幽霊なるが。魂は冥途にありながら。魂は此世に留りて。ワキ「猶執心の闇淨の世に。シテ「二百餘歳の程はふれども。ワキ「浮みもやらで篠原の。シテ「池のあだ浪よるとなく。ワキ「晝ともわかで心の闇の。シテ「夢ともなく。ワキ「現ともなき。シテ「思ひなのみ。篠原の。草葉の霜の翁さび。地「草葉の霜の翁さび。人などがめそかりそめに。現れ出でたる實盛が。名を洩し給ふなよ。なき世語も恥かして。御前を立ち去りて。行くかと思れば篠原の。池のほとりにて。姿は幻となりて失せにけり。幻となりて失せにけり。(中入)

ワキ「いざや別時の稱名にて。彼の幽霊を弔はんと。ワキ「ワキと篠原の池のほとりの法の水。

池のほとりの法の水。深くぞ頼む稱名の。聲澄み渡る弔ひの。初夜より後夜に至るまで。心し西へ行く月の。光とともに曇りなき。鉦をならして夜もすがら。ワキ「南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

後シテ(實盛の)極樂世界に行きぬれば。長く苦界を越え過ぎて。輪廻の古郷隔たりぬ。歡喜の心いくばくぞや。所は不退の所。命は無量壽佛とのう。頼もしや。念念相續する人は。地「念念毎に往生す。シテ「南無といつば。地「即ちこれ歸命。シテ「阿彌陀といつば。地「其行此義をもつての故に。シテ「必ず往生を得べしとなり。地「ありがたや。

ワキ「「ふしぎやな白みあひたる池の面に。幽に浮みよる者を。見ればありつる翁なるが。甲冑を帶するふしぎさよ。シテ「埋木の人知れぬ身と沈めども。心の池の云ひがたき。修羅の苦患の數を。浮めてたげせ給へとも。ワキ「「これ程に目のあたりなる姿言葉。餘人は更に見も聞きもせで。シテ「唯上人のみ明かに。ワキ「「見るや姿も残りの雪の。シテ「鬢髪白き老武者なれども。ワキ「「其いでたちは華やかなる。シテ「粧ごとに曇りなき。ワキ「月の光。シテ「燈火の影。地「聞

がらぬ夜の錦の直垂に。夜の錦の直垂に。萌黄匂ひの鎧着て。黄金作のたち刀。今の身にては  
それとても。何か寶の池の蓮の。臺こそ寶なるべけれ。げにや疑はぬ法の教へは朽ちもせぬ。

黄金の言葉多くせば。なごかは至らざるべき。なごかは至らざるべき。  
シテ「それ一念彌陀佛即滅無量罪。地即ち廻向發願心。心を残すことなかれ。シテ」時至つ  
て今宵値ひ難き御法を受け。地慚愧懺悔の物語。猶も昔を忘れかれて。忍ぶに似たる篠原の。

草の蔭野の露と消えし。有様語り申すべし。  
シテ「聞きても篠原の合戦破れしかば。源氏の方に手塚の太郎光盛。木曾殿の御前に参りて申すや  
う。光盛こそ奇異の曲者と組んで首取つて候へ。大將かと思れば横く勢もなし。又侍かと思へば錦

の直垂を着たり。名のれ名のれと責むれども終に名のらす。聲は坂東聲にて候と申す。木曾殿、あ  
つばれ長井の齋藤別當實盛にてやあるらん。然らば鬚鬚の白髪たるべきが。黒きこそ不審なれ。  
樋口の次郎は見知りたるらんとして召されしかば。樋口参り、唯一目見て。涙をばらはらと流いて。  
誰あなむざんやな。齋藤別當にて候ひけるぞや。實盛常に申しは。六十に餘つて軍をせば。若

殿ばらと争ひて。先を懸げんも大人げなし。又老武者とて人人に。あなづられんも口惜しかるべ  
し。鬚鬚を墨に染め。若やぎ、討死すべきよし。常々申候ひしが。眞に染めて候。洗はせて御覽候

へと。申しもあへず首をもち。地御前を立つてあたりなる。此池波の岸にのぞみて。水の縁も  
影うつる。柳の糸の枝たれて。氣鬚れては風新柳の髪を梳り。氷消えては波舊苔の鬚を。洗ひ  
て見れば墨は流れおちて。もとの白髪となりにけり。げに名を惜しむ弓取は。誰もかくこそあるべ  
けれや。あら優しやとて皆感涙をぞ流しける。又實盛が。錦の直垂を着ること。私ならぬ望み  
なり。實盛都を出でし時。宗盛公に申すやう。故郷へは錦を着て歸るといへる本文あり。實盛  
生國は越前の者にて候ひしが。近年、御領につけられて。武藏の長井に居住仕り候ひき。此  
度北國に罷り下りて候は。定めて討死仕るべし。老後の思ひでこれに過ぎじ御免あれと望み  
しかば。赤地の錦の直垂を下し給はりぬ。シテ「然れば古歌にももみぢ葉を。地分けつゝ、行け

ば錦着て。家に歸ると人や見やらんと讀みしも。此本文の心なり。さればいにしへの朱實臣は  
錦の袂を會稽山に蹴し。今の實盛は名を北國の巻にあげ。隠れなかりし弓取の。名は末代

ありありの。月の夜すがら懺悔物語申さん。  
地蔵げにや懺悔の物語。心の水の底清く。濁を残したまふなよ。シテ其執心の修羅の道。めぐりめぐりて又こゝに。木曾と組まんとたくみした。手塚めに隔てられし無念は今にあり。地蔵くつはものたれたれ。名のろ中にも先づ進む。シテ手塚の太郎光盛。地蔵黨は主を討たせじと。シテ驅け隔たりて實盛と。地蔵押し並べて組むところを。シテあつげれ汝は。日本一の剛の者と。組むでうずよとて(以上八字、謠曲には無意味ニ「グンデヨオズヨトテ」)。鞍の前輪に押し附けて。首掻き斬つて捨て、んげり。地蔵其後手塚の太郎。實盛が弓手にまはりて。草摺をたみ揚げて二刀さすところを。むすくと組んで二匹があひにどうと落ちけるが。シテ老武者の悲しさは。地蔵軍には爲疲れたり。風にちぢめる枯木の力も折れて。手塚が下になるところを。地蔵黨は落ち合ひて。終に首をば掻きおとされて。篠原の土となつて。影も形もなき跡の。影も形も南無阿彌陀佛。用ひてたび給へ。跡用ひてたび給へ。

十八 楊貴妃

ワキ 楊貴妃の靈

ワキ(方士)「我がまだ知らぬ東雲の。我がまだ知らぬ東雲の。道をいづくと尋ねん。此れは唐土玄宗皇帝に仕へ申す方士にて候。さて我が君まつりごと正しくましますなかに。色を重んじ艶を専とし給ふにふり。容色無双の美人を得給ふ。楊家の女たるによつて其名を楊貴妃と號す。然れどもさる仔細あつて。馬嵬の原にて失ひ申して候。餘りに帝歎かせ給ひ。急ぎ魂魄のありかを尋ねて参れとの宣旨に任せ。上碧落下黄泉まで尋ね申せども。更に魂魄のありかを知らず候。こゝに未だ蓬萊宮に参らす(蓬萊の草書類にて「至」の草書に似た)候ほどに。此度蓬萊宮にと急ぎ候。道行浪路を分けて行く舟れゆく幻もがな傳にても。幻もがな傳にても。魂のありかは其所としも。浪路を分けて行く舟の。ほのかに見えし島山の。草の假寝の枕結ふ。常世の國に著きにけり。常世の國につきにけり。同急ぎ候ほどに。蓬萊宮に著きて候。此所にて委しく尋ねばやと存じ候。(注シカク)ワキ「有りし教に随つて。蓬萊宮に来て見れば。宮殿盤盤として更に邊際もなく。莊殿鏡々としてさな

がら七寶を鑲めたり。漢宮萬里の粧ひ。長生驪山の有様も。これには更に準ふべからず。  
 諸あらし美しの所やな。調又教の如く宮中を見れば。太眞殿と額の打たれたる宮あり。まづ此所に徘徊し。ことの由をも窺はばやと存じ候。

シテ(揚貴妃)昔は驪山の春の園に。ともに眺めし花の色。移れば變る習として。今は蓬萊の秋の洞に。獨詠むる月影も。濡るる顔なる秋かな。あら戀ひしのにしへやな。

ワキ(唐)天子の勅の使。方士これまで参りたり。玉妃はうちにましますか。シテ(何)唐帝の使とは。何しにこゝに來れるぞと。九華の帳を押しつけて。玉の簾を掲げつゝ。リキ立ち出て給ふ御姿。

シテ(雲)の鬢づら。ワキ(花)の顔ばせ。シテ(ワキ)寂寞たる御眼のうちに。涙を浮めさせ給へば。地(梨花)一枝。雨を帯びたる粧ひの。雨を帯びたる粧ひの。太液の芙蓉の紅。未央の柳の緑もこれにはいかで勝るべき。げにや六宮の粉黛の顔色の無きも理や。顔色の無きも

ワキ(調)いかに申し上げ候。さても后宮世にましまし、時だにも。朝政は怠り給ひぬ。況んやか

くならせ給ひて後。唯ひたすらの御歎に。今は御命も危く見えさせ給ひて候。然れば宣旨に任せこれまで尋ねまあり。御姿を見奉ること。唯これ君の御志。淺からざりし故と思へば。

いよいよ御痛はしうこそ候へ。シテ(調)げにげに汝が申す如く。今はかひなき身の露の。あるにもあらぬ魂のありかを。これまで尋ね給ふこと。御情には似たれども。無訪ふにつらさのまさり草。枯れ枯れならばなかなかの。便の風は恨めしや。又今更の戀慕の涙。舊里を思ふ魂を消す。ワキ(調)さてしもあるべき事なれば。急ぎ歸りて奏聞せん。調さりながら御形見の物をたび給へ。シテ(是)こそありし形見よとて。玉の釵とり出で。方士に與へたびければ。ワキ(調)いやとよこれ世の中に。類あるべき物なれば。いかでか信じ給ふべき。御身と君と人知れず。契り給ひし言の葉あらば。諸それをしるしに申すべし。シテ(げ)にげにこれも理なり。思ひぞ出づるわれもまた。諸其初秋の七日の夜。二星に誓ひし言の葉にも。地(天)にあらば願はくは。比翼の鳥とならん。地にあらば願はくは連理の枝とならんと。誓ひしことを。ひそかに傳へよや。私語なれども今洩れそむる涙かな。されども世の中の。されども世の中の。流轉生死のなりひとて。其

くならせ給ひて後。唯ひたすらの御歎に。今は御命も危く見えさせ給ひて候。然れば宣旨に任せこれまで尋ねまあり。御姿を見奉ること。唯これ君の御志。淺からざりし故と思へば。

いよいよ御痛はしうこそ候へ。シテ(調)げにげに汝が申す如く。今はかひなき身の露の。あるにもあらぬ魂のありかを。これまで尋ね給ふこと。御情には似たれども。無訪ふにつらさのまさり草。枯れ枯れならばなかなかの。便の風は恨めしや。又今更の戀慕の涙。舊里を思ふ魂を消す。ワキ(調)さてしもあるべき事なれば。急ぎ歸りて奏聞せん。調さりながら御形見の物をたび給へ。シテ(是)こそありし形見よとて。玉の釵とり出で。方士に與へたびければ。ワキ(調)いやとよこれ世の中に。類あるべき物なれば。いかでか信じ給ふべき。御身と君と人知れず。契り給ひし言の葉あらば。諸それをしるしに申すべし。シテ(げ)にげにこれも理なり。思ひぞ出づるわれもまた。諸其初秋の七日の夜。二星に誓ひし言の葉にも。地(天)にあらば願はくは。比翼の鳥とならん。地にあらば願はくは連理の枝とならんと。誓ひしことを。ひそかに傳へよや。私語なれども今洩れそむる涙かな。されども世の中の。されども世の中の。流轉生死のなりひとて。其

身は馬鬼に留まり。魂は仙宮に至りつゝ。比翼も友を戀ひ獨翅をかたしき。連理も枝朽ちて。忽ち色を變ずとも。同じ心の行くへならば。終の逢瀬を頼むぞと語り給へや。

ワキ「さらばと云ひて出舟の。伴ひ申し歸るさと。思はば嬉しさの猶いかならん其心。シテワレはまた何なかなかに三重の帯。廻り逢はんも知らぬ身に。よしさらば暫し待て。ありし夜遊をなすべし。地「げにや驪山の宮のうち。月の夜遊の羽衣の曲。シテ其鏡にて舞ひしとて。地「又取

りかざし。シテ「さす袖の。地「驚破「二そよ「宇羅羅らされども古。霓裳羽衣の曲。そよや霓裳羽衣の曲。そよるに濡る。秋かな。シテ「何事も夢幻の戲や。地「あはれ胡蝶の舞ならん。シテ「それ過去遠遠の昔を思へば。いつな衆生の始と知らず。地「未來永永の流轉。更に生死の終もなし。

シテ「然るに二十五有のうち。何れか生者必滅の理に洩れん。地「先づ天上の五衰より。須彌の四州の様様に。北州の千年終に朽ちぬ。シテ「況んや老少不定の境。地「歎の中の歎とかや。我もそのかみは上界の諸仙たるが。往昔のちなみありて。假に人界に生れきて。楊家の深窓に養はれ。いまだ知る人なかりしに。君聞召されつゝ。急ぎ召し出し后宮に定め置き給ひ。僧老

同穴の語ひも縁盡きぬればいたづらに。又此島に唯ひとり。歸り來りてすむ水の。あはればかなき身の露の。たまさかに逢ひ見たり。靜に語れ愛き昔。シテ「さるにても思ひ出づれば恨ある。地「其文月の七日の夜。君と交せし睦言の。比翼連理の言の葉も。かれがれになる私語の。世の一夜の契だに。名残は思ふならひなるに。ましてや年月馴れて程ふる世の中に。さらぬ別のなかりせば。千世も人には添ひてまし。よしそれとて遁れ得ぬ。會者定離ぞと聞く時は。逢ふこそ別なりけれ。羽衣の曲。(序ノ巻)

シテ「蓋「羽衣の曲。稀にぞ返す少女子が。地「袖うちふれる心しるしや。心しるしや。シテ「戀ひし昔の物語。地「戀ひし昔の物語。盡くさば月日も移舞の。しるしの鏡又賜はりて。假申してさらばとて。勅使は都に歸りければ。シテ「さるにても。さるにても。地「君には此世逢ひ見んことも。蓬が鳥つ鳥。浮世なれども戀ひしや昔。はかなや別の常世の塵に。伏し沈みてぞ留りける。



十九 玉 葛

ワキ 玉葛内侍の姿(前には女の舟人)

ワキ(歌德)「これは諸國一見の僧にて候。われ此程は南都に候ひて。靈佛靈社残りなく拜み廻りて候。又これより初瀬詣と志して候。進行、橋の葉の。名におふ宮の古ことな。名におふ宮のふることな。思ひつりて行く末は。石上寺ふしながみ。法のしるしや三輪の杉。山本行けば程もなく。初瀬川にも著きにけり。初瀬川にも著きにけり。詞急ぎ候ほどに。初瀬川に著きて候。心静に參詣申さうするにて候。

シテ(舟人)「程もなき舟の泊や初瀬川。のぼりかれたる氣色かな。舟人も誰を戀ふとか大島の。浦悲しげに聲立てい。こがれ來にけるいにしへの。はてしもないさや白浪の。よるべいづくぞ心の月。御舟はそことはてしもなく。唯われひとり水馴棹。果も袖の色にのみ。暮れてゆく秋の涙か村時雨。秋の涙か村時雨。古河野邊の寂しくも。人や見るらん身の程も。猶浮舟の棹を絶え。綱手かなしきたぐひかな。綱手かなしきたぐひかな。

ワキ「阿ふしぎやな此川は山川の。さも淺くしてしかも漲る岩間傳ひな。小き舟に棹さす人を見れば女なり。抑御身はいかなる人にてましますぞ。シテ「これは此初瀬寺にまうでくる者なり。又此川は所から。謠名に流れたる海士小舟。初瀬の川と詠みおける。其川の邊のえにしあるに。不審ななさせ給ひそとよ。ワキ「阿あら面白の言葉やな。げに海士小舟初瀬とは。古きながめの言葉なるべし。さりながら又其たぐひも浪小舟。誰さしていばれのあるやらん。シテ「いや何事のそれよりも。先づ御覽せよをりからに。地「ほの見えて色づく木木の初瀬山。色づく木木の初瀬山。風もうつるふ薄雲に。日影も匂ふひとしほの。さぞな氣色もかく川の(「かく川不明なり。氣色もかく川)浦回の眺まで。げに類なや面白や。川音聞えて里つゞき。奥物深き谷の月に。連る軒を絶え絶えの霧間に残す夕かな。霧間に残す夕かな。かくて御堂に參りつつ。かくて御堂に參りつつ。補陀洛山も目のあたり。四方のながめも妙なるや。紅葉の色に常盤木の。二本の杉に著きにけり。二本の杉に著きにけり。

シテ「阿これこそ二本の杉にて候へよくよく御覽候へ。ワキ「さては二本の杉にて候ひけるぞや。西二

本の杉の立所を尋ねずは。 同古川のべに君を見ましやとは。 何と詠まれたる古歌にて候ぞ。 シテ、  
れは光源氏のいにしへ。 玉葛の内侍此初瀬に詣で給ひしを。 右近とかや見奉りて詠みし歌な  
り。 藤共にあはれとおぼしめして。 御跡をよく弔ひ給ひ候へ。

地、嗚げにやありし世を猶夕顔の露の身の。 消えにし跡はなかなか。 何撫子の形見も愛し。 シテ、あ  
はれ思ひの玉葛。 かけてもいさや知らざりし。 地、心づくしの木の間の月。 雲居のよそにいつし  
かど。 鄙のすまひの愛きのみか。 さてしも堪へてあるべき身を。 シテ、猶しをりつる人心の。 地、あ  
らき浪風立ち隔て。 たよりとなれば早舟に乗り後れじと松浦海。 唐船を慕ひしに。 心ぞかは  
るわれはた。 浮鳴を漕ぎ離れても行く方や。 いづく泊と白波に。 響の灘も過ぎ。 思ひにさはる  
方もなし。 かくて都のうちとても。 われは浮きたる舟のうち。 なほや愛き目を水鳥の。 陸に惑へる  
こゝちして。 たづきも知らぬ身の程を。 思ひ歎きて行きなやむ。 足曳の大和路や。 唐土までも聞ゆ  
なる。 初瀬の寺に詣でつ。 シテ、年も経ぬ。 祈る契は初瀬山。 地、尾上の鐘のよそにのみ。 思ひ絶  
えにし古の。 人に二度二本の。 杉のたちどを尋ねずは。 古川のべと詠めける。 けふの逢瀬もおな

じ身を。 思へば法の衣の。 玉ならば玉葛。 迷を照し給へや。

地、嗚げに古き世の物語。 聞けば涙も隠江に。 こもれる水のあはれかな。 シテ、あはれとも思ひは  
染めよ初瀬川。 早くも知るや淺からぬ。 地、縁にひかる。 シテ、心とて。 地、た頼むぞよ法の  
入。 弔ひ給へわれこそは。 涙の露の玉の名と(四字疑はし或は「玉」と)。 名のりもやらすなりにけり。 な  
のりもやらすなりにけり。(申入)

ワキ、同「さては玉葛の内侍假に現れ給ひけるぞや。 藤たとひ業因重くとも。 照らさざらめや日の  
光。 照らさざらめや日の光。 大慈大悲の誓ある。 法の燈火明かに。 なき影いさや弔はん。 な  
き影いさや弔はん。

後ジテ(玉葛内侍の)「戀ひわたる身はそれならで玉葛。 いかなるすぢを尋ね來ぬらん。 尋ねても法の  
教に逢はんとの。 心ひかる一條に。 其まゝならで玉葛の。 亂る色は恥かしや。 つくもがみ。  
つくもがみ。 われや戀ふらし面影に。 地、立つやあだなる塵の身は。 シテ、拂へと拂へと執心の。  
地、長き闇路や。 シテ、黒髪の。 地、あかぬやいつの寝亂髪。 シテ、むすばほれゆく思ひかな。 地、げに

妄執まうしよくもきりの雲霧うんむの。げに妄執まうしよくもきりの雲霧うんむの。迷まよひもよしや憂うかりける。人ひとを初瀬はつせの山風やまかぜ。はげしく落ちて。露つゆも涙なみだもちりぢりに秋あきの葉はの。身みも朽くち果はてれ恨うらみめしや。ミテ恨うらみは人ひとをも世よをも。地ち恨うらみは人ひとをも世よをも。思おもひ思おもはじ唯身ただみひとつの。報むくいの罪つみや數數かずかずの。憂うき名なに立たちしも、懺悔ざんげの有様ありさま。あるひは湧わき返かへり。岩洩いはもる水みづの思おもひにむせび。あるひは焦こがるゝやみ身より出いづる玉たまとみるまで包つつめども。蟹はたるみだ。蟹はたるに亂みだれつる影かげもよしなや恥はづかしやと。此このまうしよくもきり妄執まうしよくもきりを離はなす。心こころは眞如しんにょの玉たま葛かづら。心こころは眞如しんにょの玉たま葛かづら。長ながき夢路ゆめぢは覺さめにけり。

二十

融

ワキ 源融の亡靈(前には鹽波の老人に化していつ)

ワキ(旅僧) 融「これは東國とうこく方かたより出いでたる僧そうにて候まう。われ未いまだ都みやこを見みず候まうほどに。此このたび度おもた立たち都みやこに上のぼり候まう。思おもひ立たつ心こころぞしるべ雲くもを分わけ。舟路ふねぢを渡わたり山やまを越こえ。千里ちさとも同おなじ一ひと足あしに。夕ゆふべを重かさね朝あさことの。夕ゆふべを重かさね朝あさことの。宿やどの名な残なりも重かさなりて。都みやこにはやく著つきにけり。都みやこに早はやく著つきにけり。同い急いそぎ候まうほどに。これははや都みやこに著つきて候まう。此このあたりをば六條河原ろくじょうかはらの院いんと

やらん申まうし候まう。暫しばらく休やすらひ一見いつけんせばやと思おもひ候まう。

前まへジテ(鹽波) 融「月つきもはや出い汐しほになりて鹽齋しほがまの。うらさび波なみる氣色けしきかな。陸奥むつはいつくはあれど鹽齋しほがまの。恨うらみて波なみる老おいが身みの。よるべもいさや定さだめなき。心こころもすめる水みづの面おもに。照てる月つきなみを數かずふれば。今宵こよひぞ秋あきの最中もなかなる。げにや移うつせば鹽齋しほがまの。月つきも都みやこの最中もなかかな(野中の重なりたるは疑はし。されども原。作も恐らくありしなるべし)。秋あきは半身なかみは既すでに老重おいかさなりて諸白髮もろしらが。雪ゆきとのみ。積つもりぞきぬる年月としつきの。積つもりぞきぬる年月としつきの。春はるを迎むかへ秋あきを添そへ。時雨しぐるる松まつの風かぜまでも。我わがが身みの上うへと汲くみて知しる。鹽馴衣しほなれころも袖そで寒さむき。浦回うらわの秋あきの夕ゆふべかな。浦うらわの秋あきの夕ゆふべかな。

ワキ、同「いかにこれなる尉殿じょうどの。御身おんみは此このあたりの人ひとか。シテ「さん候まう此所このところの汐波しほくみにて候まう。ワキ「ふしきやこゝは海邊かいへんにてもなきに。汐波しほくみとは誤あやりたるか尉殿じょうどの。シテ「あら何なんともなや。さてこゝをばいづくと知しるし召めされて候まうぞ。ワキ「此所このところをば六條河原ろくじょうかはらの院いんとこそ承うけたまりて候まうへ。シテ「河原かはらの院いんこそ鹽齋しほがまの浦うら候まうよ。融とほの大臣おとみ陸奥むつの千賀ちかの鹽齋しほがまを。都みやこのうちに移うつされたる海邊かいへんなれば。名なに流ながれたる河原かはらの院いんの。河水かみをも汲くめ池水ちすみをも汲くめ。こゝ鹽齋しほがまの浦うら人ひとなれば。汐波しほくみなどおぼさぬぞ

や。ワキ、詞「げにげに陸奥の千賀の鹽竈を。都のうちに移されたること承り及びて候。さてはあれなるは籬が島候か。シテ「さん候あれこそ籬が島候よ。融の大臣常は御舟を寄せられ。御酒宴の遊舞様なりし處ぞかし。や。月こそ出で候へ。ワキ、げにげに月の出で候ぞや。あの籬が島の森の梢に。鳥の宿し轉りて。しもん(三字不明「詩文」にいふ説あれど)に移る月影までも。孤舟に歸る身の上かと(此一向田典不明。大和田氏三體時季の時に由と)。思ひ出でられて候。シテ、詞「何と(二字古體)唯今の面前の氣色が。御僧の御身に知らるゝとは。もしも賢鳥が言葉やらん。鳥は宿す池中の樹。ワキ、僧は敲く月下の門。シテ「推すも。ワキ、敲くも。シテ「古人の心。シテ、ワキ「今目前の秋暮にあり。地「げにやいにしへも月には千賀の鹽竈の。月には千賀の鹽竈の。浦同の秋も半にて。松風も立つなりや。霧の籬の鳥隠れ。いざわれも立ち渡り。昔の跡を陸奥の。千賀の浦わを眺めんや。千賀の浦わを眺めん。

ワキ、詞「鹽竈の浦を都のうちに移されたるいはれ御物語り候へ。シテ「嵯峨の天皇の御宇に。融の大臣陸奥の千賀の鹽竈の眺望を聞し召し及ばせ給ひ。此所に鹽竈を移し。あの難波の御津の浦より。

りも。日毎に潮を汲ませ。こゝにて鹽を焼かせつ。一生御遊の便とし給ふ。然れども其後は相續して断ぶ人もなければ。浦は其まゝ千潮となつて。池邊によどむ溜り水は。雨の残りの古き江に。落葉散り浮く松蔭の。月だにすまで秋風の。音のみ残るばかりなり。されば歌にも。君まさで煙絶えにし鹽竈の浦寂しくも見え渡るかなと。貫之も詠めて候。げにや眺むれば月のみ盈てる鹽竈の。浦寂しくも荒れはつる跡の世までも潮じみて。老の浪もかへるやらん。あら昔戀ひしや。戀ひしや戀ひしやと暮へども歎けども。かひも渚の浦千鳥。音をのみ鳴くばかりなり。音をのみ鳴くばかりなり。

ワキ、詞「いかに尉殿。見え渡りたる山山は皆名所にてぞ候らん御教へ候へ。シテ「さん候 皆名所にて候。御尋ね候へ教へ申し候はん(二字後世)。ワキ「先づあれに見えたるは音羽山候か。シテ「さん候あれこそ音羽山候よ。ワキ「音羽山音に聞きつ。逢坂の。關の此方にと詠みたれば。逢坂山も程近うこそ候らめ。シテ「仰せの如く關の此方にとは詠みたれども。彼方に當れば逢坂の。山は音羽の嶺に隠れて。此邊よりは見えぬなり。ワキ「さてさて音羽の嶺つゞき。次第次第の山並の。

めいしよめいしよかたたま 名所名所を語り給へ。シテ、語りもつくさじ言の葉の。歌の中山清閑寺。蓋今熊野とばあれぞかし。ワキ「さて其末につゞきたる。里一村の森の木立。シテ、語りそれをしるべに御覽せよ。まだき時雨の秋なれば。紅葉も青き稻荷山。ワキ「風も暮れ行く雲の端の。梢も青き秋の色。シテ、今こそ秋よ名にしおふ。春は花見し藤の森。ワキ「翠の空も影青き野山につゞく里はいかに。シテ「あれこそ夕されば。ワキ「野への秋風。シテ「身にしてみて。ワキ「鶉鳴くなる。シテ「深草山よ。地「木幡山伏見の竹田淀鳥羽も見えたりや。地「眺めやる其方の空は白雲の。はや暮れ初むる遠山の。嶺も木深く見えたるは。いかなる所なるらん。シテ「あれこそ大原や。小鹽の山も今日こそは。御覽じ初めつらめ。猶猶問はせ給へや。地「聞くにつけても秋の風。吹く方なれや峯つゞき。西に見ゆるはいづくぞ。シテ「秋もはや。秋もはや半更け行く松の尾の。嵐山も見えたり。地「嵐ふけ(三字疑)行く秋の夜の。空澄みのぼる月影に。シテ「さす汐時もはや過ぎて。地「隙もおし照る月にめで。シテ「興に乗じて。地「身をばげに。忘れたり秋の夜の。長物語よしなや。まづいざや汐を汲まんとして。持つや田子の浦。東か

らげの沙衣。汲めば月をも袖にもち汐の。汀に歸る浪の夜の。老人と見えつるが。汐盛にかき粉れて。跡も見えずなりにけり。跡をも見せずなりにけり。(中入)ワキ「磯枕。昔の衣をかたしきて。昔の衣をかたしきて。岩根の床に夜もすがら。猶も奇特な見るやとて。夢待ちがほの旅寝かな。夢まちがほの旅寝かな。後シテ(融の聲)「忘れて年を経しものを。又いにしへに歸る浪の。満つ撫子の浦人の。今宵の月を陸奥の。千賀の浦も遠き世に。其名を残す大臣。融の大臣とは我が事なり。われ撫子の浦に心を寄せ。あの雛が島の松陰に。明月に舟を浮め。月宮殿の白衣の袖も。三五夜中の新月の色。千重ふるや。雪を廻らす雲の袖。地「さすや桂の枝枝に。シテ「光を花と散らす粧ひ。地「こゝにも名にたつ白河の浪の。シテ「あら面白や曲水の盃。うけたりうけたり遊舞の袖。(早舞)地「「あら面白の遊樂や。そも明月の其中に。まだ初月(「はつづきの語如何あらん撫子に昔は「みかづきと添ひたるを、契へたるものか)の宵宵に。影も姿も少きは。いかなる謂なるらん。シテ「それは西岫に。入日のいまだ近ければ。其影に隠さる。たとへば月のある夜は星の薄きが如くなり。地「青陽の春の始には。

シテ霞む夕の遠山。地「黛」の色に三日月の。シテ影を舟にも喻へたり。地「又」水中の遊魚は。シテ「釣」と疑ふ。地「雲」上の飛鳥は。シテ「弓」の影とも驚く。地「一輪」も降らす。シテ「萬水」も上らす。地「鳥」は池邊の樹に宿し。シテ「魚」は月下の波に臥す。地「聞」くとも飽かじ秋の夜の。シテ「鳥」も鳴き。地「鐘」も聞えて。シテ「月」もはや。地「影」傾きて明方の。雲となり雨とある。此「光陰」に誘はれて。月の都に入り給ふ粧ひ。あら名残惜しの面影や。名残惜しの面影。

二十一 養老

前ジテ 農民父ツレ 農民子  
後ジテ 山神の國ワキ 穀

ワキ(勅使)風も靜に檜の葉の。風も靜に檜の葉の。鳴らさぬ。枝ぞ長閑けき。詞もそもこれには雄略天皇に仕へ奉る臣下なり。さて濃州(寛文の頃までは「美濃」の國と誤りしが如し。又元禄以後の本には今本集の郡に。ふしぎなる泉出でくる由を奏聞す。急ぎ見て参れとの宣旨に任せ。唯今濃州本集の郡へと急ぎ候。詔治まるや。國富み民も豊にて。國富み民も豊にて。四方に道ある關の月の。秋津島根や天さがる。鄙の境に名を聞きし。美濃の中道程(「も」の字脱)なく。養老の瀧に著きにけり。養

老の瀧に著きにけり。

シテ(皇夫、父)ツレ(皇夫、子)詔「年を經し美濃の(古本本に「の」の字下)に「お」の字を著けり。「御山」の意にては非るべ)山の松蔭に。猶澄む水の緑かな。ツレ「通ひ馴れたる老の坂。二人「行くこと易き心かな。シテ「故人眠早く覺めて。夢は六十年の花に過ぎ。二人「心は茅店の月に嘯き。身は板橋の霜に漂ひ。白頭の雪は積れども。老を養ふ瀧川の。水や心を清むらん。奥山のみ谷の下のためしかや。流を汲むとよも絶えじ。流れを汲むとよも絶えじ。長生の家にこそ。長生の家にこそ。老いせぬ門はあるなるに。これも年古る山住みの。千世のためした松蔭の。岩井の水は薬にて。老を延べたる心こそ。猶行く末も久しけれ。猶行く末も久しけれ。

ワキ「詞「いかにこれなる老人に尋ねべき事の候。シテ「あなたの事にて候か何事にて候ぞ。ワキ「おことは聞き及びたる親子の者か。シテ「さん候「これこそ親子の者にて候へ。ワキ「これは帝よりの勅使にてあるぞとよ。シテ「ありがたや雲居遙かに見そなはず。我が大君の詔を。賤しき身として今「承る事のありがたさよ。これこそ親子の民にて候へ。ワキ「さてもこの本集の郡に。ふしぎ

なる泉出でくる由を奏聞す。急ぎ見て参れとの宣旨に任せ。これまで勅使を下さるゝなり。まづまづ養老と名付けそめし。謂を委しく申すべし。シテさん候これに候は此尉が子にて候が。朝夕は山に入り、薪をとり。われらを育み候ところ。ある時山路の疲れにや。此水を何となく掬びて呑めば。世の常ならず。心も涼しく疲れも扶かり。ツレツレながら仙家の薬の水も。かくやと思ひ知られつゝ。やがて家路に汲み運び。父母にこれを與ふれば。シテ、朝、寝の床も起き憂からず。シテ、夜の寢覺も寂しからで。勇むやがて老をも忘れ水の。ツレツレ朝、寢の床も起き憂からず。シテ、夜の寢覺も寂しからで。勇む心は眞清水の。絶えずも老を養ふ故に。養老の瀧とは申すなり。

ワキ、聞げにげに聞けばありがたや。さてさて今の薬の水。この瀧川のうちにても。とり分き在所のあるやらん。シテ、御覽候へ此瀧壺の。すこし此方の岩間より。出でくる水の泉なり。ワキ、聞げにげに立ちより見れば。げに潔き山の井の。シテ、底澄み渡るさけれ石の。巖となりて昔のむす。ワキ、千代に八千代のためしまでも。シテ、まのあたりなる薬の水。ワキ、眞に老を。シテ、養ふなり。地、老をだに養は。まして盛の人の身に。薬とならばいつまでも。御壽命も盡さま

じき。泉ぞめでたかりける。げにや玉水の。水上澄める御代ぞとて。流れの末のわれらまで。豊に住める嬉しさよ。豊に住める嬉しさよ。

地、聞げにや尋ねても。蓬が島の遠き世に。今のためしも生薬。水又水はよも盡さじ。シテ、それ行く川の流れば絶えずして。しかも本の水にはあらず。地、流に浮むうたかたは。かつ消えかつ結んで。久しく澄める色とかや。シテ、殊にげにこれはためしも夏山の。地、下行く水の薬となる。奇瑞を誰か習ひ見し。いざや水を掬げん。いざいざ水を掬げん。薬の竹葉は。薬の竹葉は。陸や緑を重ぬらん。其外籬の萩花は。林葉の秋を汲むなりや。晋の七賢が薬。劉伯倫が薬。唯此水に残れり。汲めや汲め御薬を。君の爲に捧げん。曲水に浮む鸚鵡は。石にさはりて遅くとも。手にまづとりて夜もすがら。馴れて月を汲まうや。馴れて月を汲まうや。

地、山路の奥の水にては。何れの人か養ひし。シテ、彭祖が菊の水。滴る露の養に。仙徳を受けしより。七百歳を経る事も。薬の水と聞くものを。地、げにや薬と菊の水。其養の露の間に。シテ、千年を経るや天地の。地、開けし種の草木まで。シテ、花咲き實なる理。地、其をりたりと云

シテ霞む夕の遠山。地「驚」の色に三日月の。シテ影を舟にも喻へたり。地「又水中の遊魚は。シテ釣と疑ふ。地「雲上の飛鳥は。シテ弓の影とも驚く。地「一輪も降らす。シテ萬水も上らす。地「鳥は池邊の樹に宿し。シテ魚は月下の波に臥す。地「聞くと飽かじ秋の夜の。シテ鳥も鳴き。地「鐘も聞えて。シテ月もはや。地「影傾きて明方の。雲となり雨とある。此光陰に誘はれて。月の都に入り給ふ粧ひ。あら名残惜しの面影や。名残惜しの面影。

二十一 養老

前ジテ 養民父 ツレ 養民子  
後ジテ 山神の隠 ワキ 勅

ワキ(勅使)「風も静に檜の葉の。風も静に檜の葉の。鳴らさぬ。枝ぞ長閑けき。 問「そもそもこれは雄略天皇に仕へ奉る臣下なり。さても濃州(寛文の頃「は「英濃の國」と蓋ひしが如し。又元禄以後の本には「本巢の郡に。ふしぎなる泉出でくる由を奏聞す。急ぎ見て参れとの宣旨に任せ。唯今濃州本巢の郡へと急ぎ候。詔治まるや。國富み民も豊にて。國富み民も豊にて。四方に道ある關の月の。秋津島根や天さかる。鄙の境に名を聞きし。美濃の中道程(「の字「密)なく。養老の瀧に著きにけり。養

老の瀧に著きにけり。

シテ(養父、父)ツレ(養子)「年を経し美濃の(古來本に「の字「下」に「お」の字を著けり。「御山」の意にて是なる)山の松蔭に。猶澄む水の縁かな。ツレ「通ひ馴れたる老の坂。二人「行くこと易き心かな。シテ「故人眠早く覺めて。夢は六十年の花に過ぎ。二人「心は茅店の月に嘯き。身は板橋の霜に漂ひ。白頭の雪は積れども。老を養ふ瀧川の。水や心を清むらん。奥山のみ谷の下のためしかや。流を汲むとよも絶えじ。流れを汲むとよも絶えじ。長生の家にこそ。老いせぬ門はあるなるに。これも年古る山住みの。千世のためしな松蔭の。岩井の水は薬にて。老を延べたる心こそ。猶行く末も久しけれ。猶行く末も久しけれ。

ワキ、問「いかにこれなる老人に尋ねべき事の候。シテ「「なだの事にて候か何事にて候ぞ。ワキ「おことは聞き及びたる親子の者か。シテ「さん候これこそ親子の者にて候へ。ワキ「これは帝よりの勅使にてあるぞとよ。シテ「ありがたや雲居遙かに見そなはず。我が大君の詔を。賤しき身として今承る事のありがたさよ。これこそ親子の民にて候へ。ワキ「さてこの本巢の郡に。ふしぎ



なる泉出でくる由を奏聞す。急ぎ見て参れとの宣旨に任せ。これまで勅使を下さるゝなり。まづまづ養老と名付けそめし。謂を委しく申すべし。シテ、さん候これに候は此尉が子にて候が。朝夕は山に入り、薪をとり。われらを育み候ところに。ある時山路の疲れにや。此水を何となく掬びて呑めば。世の常ならず。心も涼しく疲れも扶かり。ツレ、さながら仙家の薬の水も。かくやと思ひ知られつゝ。やがて家路に汲み運び。父母にこれを與ふれば。シテ、朝「呑む心よりいつしかに。やがて老をも忘れ水の水。ツレ、朝、寝の床も起き憂からず。シテ、ツレ、夜の寝覺も寂しからで。勇む心は眞清水の。絶えずも老を養ふ故に。養老の瀧とは申すなり。

ワキ、聞「げにげに聞けばありがたや。さてさて今の薬の水。この瀧川のうちにても。とり分き在所のあるやらん。シテ、御覽候へ此瀧壺の。すこし此方の岩間より。出でくる水の泉なり。ワキ、驚「さてはこれかと立ちより見れば。げに潔き山の井の。シテ、底澄み渡るさ、れ石の。巖となりて苔のむす。ワキ、千代に入千代のためしまでも。シテ、まのあたりなる薬の水。ワキ、眞に老を。シテ、養ふなり。地、老をだに養は。まして盛の人の身に。薬とならばいつまでも。御壽命も盡さま

じき。泉ぞめでたかりける。げにや玉水の水。水上澄める御代ぞとて。流れの末のわれらまで。豊に住める嬉しさよ。豊に住める嬉しさよ。

地、驚「げにや尋ねても。蓬が島の遠き世に。今のためしも生薬。水又水はよも盡さじ。シテ、それ行く川の流れば絶えずして。しかも本の水にはあらず。地、流に浮むうたかたは。かつ消えかつ結んで。久しく澄める色とかや。シテ、殊にげにこれはためしも夏山の。地、下行く水の水となる。奇瑞を誰か習ひ見し。いざや水を掬げん。いざいざ水を掬げん。薬の竹葉は。薬の竹葉は。陸や緑を重ぬらん。其外籬の萩花は。林葉の秋を汲むなりや。晋の七賢が樂。劉伯倫が。阮。唯此水に残れり。汲めや汲め御薬を。君の爲に捧げん。曲水に浮む鸚鵡は。石にさはりて遅くとも。手にまづとりて夜もすがら。馴れて月を汲まうや。馴れて月を汲まうや。

地、驚「山路の奥の水にては。何れの人か養ひし。シテ、彭祖が菊の水。滴る露の養に。仙徳を受けしより。七百歳を経る事も。薬の水と聞くものを。地、げにや薬と菊の水。其養の露の間に。シテ、千年を経るや天地の。地、開けし種の草木まで。シテ、花咲き實なる理。其をりなりと云

ひながら。シテ唯是雨露の恵にて。地養ひ得ては花の父母たる雨露の。翁も養はれて此水になれ衣の。袖ひちて搦ぶ手の。影さへ見ゆる山の井の。げにも薬と思ふより。老の姿も若水と見るこそ嬉しかりけれ。

ワキ、調「けにありがたき薬の水。急ぎ歸りて我が君に。奏問せんこそ嬉しけれ。シテ翁もかゝる御恵。廣き御影を尊めば。ワキ、驚「勅使も重ねて感涙して。かゝる奇特に逢ふ事よと。地「云ひもあへればふしぎやな。云ひもあへればふしぎやな。天より光かゝりやきて。瀧の響きも聲すみて。音楽聞え花ふりぬ。これたゞことと思はれず。これたゞことと思はれず。(中入)

後「シテ(山神の聲)「ありがたや治まる御代の習とて。山河草木おだやかに。五日の風や十日の。天が下照る日の光。曇はあらじ玉水の。薬の泉はよも盡きじ。あらありがたの奇瑞やな。地「これとても誓は同じ法の水。盡きせぬ御代を守るなる。地「われは此やま山神の宮居。地「又は楊柳觀音菩薩。シテ「神と云ひ。地「佛と云ひ。シテ「唯是水波の隔にて。地「衆生濟度の方便の聲。シテ「峯の嵐や。谷の水音ととうと。地「拍子を揃へて音楽の響。たきつ心を澄ましつ。諸天來去

の影向かな。(神舞)

シテ「松蔭に千世をうつせる縁かな。地「さも潔き山の井の水。さも潔き山の井の。シテ「水滔滔として浪悠悠たり。治まる御代の。君は船。地「君は船。臣は水。水よく船を浮め浮めて。臣よく君を仰ぐ御代とて。幾久しきも盡きせじや盡きせじ。君にひかる玉水の。上澄む時は下も濁らぬ瀧つの水の。浮き立つ波の返すがへすも。よき御代なれや。よき御代なれや。萬歳の道に歸りなん。萬歳の道に歸りなん。

二十二 清 經

シテ 清經の聲 ツレ 清經の妻

ワキ(淡津三郎)「八重の潮路の浦の波、八重の潮路の浦波。九重にいざや歸らん。地「これは左中將清經の御内に仕へ申す。淡津の三郎と申す者にて候。さて頼み奉り候清經は。過ぎにし筑紫の軍に討ち負けたまひ。都へはとて歸らぬ道芝の。雜兵の手にかゝらんよりはと思し召しけるか。豊前の國柳が浦の沖にして。更け行く月の夜舟より身を投げ空しくなり給ひて候。又船中

を見奉れば。御形見の品々(三字今)に髪(髪はす)の髪を殘し置かれて候ほどに(三字今)。かひなき命助か  
 り。御形見を持ち唯今都へ上り候。進行(此)程は鄙(ひな)のすまひに馴れ馴れて。鄙(ひな)のすまひに馴れ  
 なれて。たまたま歸る故郷の。昔の春に引きかへて。今はもの憂き秋暮れて。はや時雨ふる旅衣。  
 萎る。袖の身のはてを。忍び忍びに上りけり。忍び忍びに上りけり。間(二字今)。こ  
 れははや都に著きて候。いかに案内申し候。筑紫より淡津の三郎が参りて候。それそれ御申し候  
 へ。ツレ(音程の要)何淡津の三郎と申すか。人までもなし此方へ來り候へ。さて唯今は何の爲の御使  
 にてあるぞ。ワキ(今)。今此句の上(今)。面目もなき御使に参りて候。ツレ(音程)。面目もなき御使とは。  
 若し御遣世にてあるか。ワキ(今)。いや御遣世にてもなく候(今)。ツレ(音程)。過ぎにし筑紫の軍にも御  
 恙なきとこそ聞きつるに。ワキ(今)。さん候。過ぎにし筑紫の軍にも御恙御座なく候ひしが。清經心  
 に思し召すやうは。都へはととも歸らぬ道芝の。雑兵の手にからんよりはと思し召されける  
 か。豊前の國柳が浦の沖にして。更け行く月の夜舟より身を投げ空しくなり給ひて候。ツレ(音程)。な  
 に身を投げ空しくなり給ひたるとや。恨めしやせめては討たれ。若しは又。病の床の露とも消えな

ば。力無しとも思ふべきに。われと身を投げ給ふ事。偽なりつるかねことかな。げに怨みても其  
 かひの。なき世となるこそ悲しけれ。何事もはかなかりける世の中の。此程は。人目をつゝむ我  
 が宿の。人目をつゝむ我が宿の。垣穂の薄吹く風の。聲をもたてず忍び音に。泣くのみなりし身な  
 れども。今は誰をか憚りの。有明月の終夜とも。何か忍ばん子規。なをも隠さで泣く音かな。  
 なをも隠さでなくれかな。  
 ワキ(今)。いかに申し候(今)。今此句を讀はすして次句の上(今)。船中を見奉れば。御形見に髪(髪はす)の髪を殘し置かれて候。  
 これを御覽じて御心を慰められ候へ。ツレ(音程)。これは中將殿の黒髪かや。見れば目もくれ心消え  
 猶も思の増るぞや。見る度に心づくしのかみなれば。うさにぞ返す本の社にと。地手向け返し  
 て夜もすがら。涙と共に思ひ寝の。夢になりとも見え給へと。寝られぬに傾くる。枕や戀をしら  
 すらん。枕や戀をしらすらん。  
 シテ(音程)。聖人に夢なし。誰あつて現と見る。眼裡に塵有つて三界すばく(一)。心頭無事に  
 して一生廣し。げにや憂しと思ふも幻の。何れ跡ある雲水の。往くも歸る

も閻浮の故郷に。たどる心のはかなさよ。轉寢に戀ひしき人を見てしより。夢てふものは頼みそめてき。いかに古人。清經こそ参りて候へ。ツレ「不思議やなまどろむ枕に見え給ふは。げに清經にてましませども。正しく身を投げ給へるが。夢ならでいかい見ゆべきぞ。よし夢なりとも御姿を。見見え給ふぞありがたき。さりながら命を待たでわれと身を。捨てさせ給ふ御事は。偽なりけるかねことなれば。唯恨めしう候。シテ「さやうに人も恨み給は。われも恨は有明の。問見よとて贈りし形見をば。何しに返させ給ふらん。ツレ「蓋「いやと形見を返すとは。思ひあまりし言の葉の。見るたびに心づくしのかみなれば。シテ「問「うさにぞ返すもとの社にと。さしも贈りし黒髪を。飽かすは止むべき形見ぞかし。ツレ「蓋「おろかど心え給へるや。慰めとての形見なれども。見れば思ひの亂れ髪。シテ「問「わきて贈りしかひもなく。形見を返すは此方の恨。ツレ「蓋「われは捨てにし命のうらみ。シテ「互「にかこち。ツレ「啣たる。シテ「形見ぞつらき。ツレ「黒髪の。地「恨「なさへにいひそへて。恨をさへにいひそへて。くれる涙の手枕を。並べて二人が逢ふ夜なれど。怨むれば獨寢の。ふしぶしなるぞ悲しき。げにや形見こそなかなか愛けれこれなくば。忘る

る事もありなんと。思ふも濡す袂かな。思ふも濡す袂かな。シテ「問「いにしへの事ども語つて聞かせ申し候べし。今は恨を御暗れ候へ。シテ「蓋「さて九州山鹿の城へも。敵寄せ來ると聞きしほどに。取るものも取りあへず。夜もすがら高瀬舟に取り乗つて。豊前の國柳といふ所に著く。地「げにや所も名をえたる。浦は並木の柳蔭。いとかりそめの皇居を定む。シテ「それより宇佐八幡に御参詣あるべしとて。地「神馬七匹。其外金銀種々の捧物。則ち奉幣の爲なるべし。ツレ「かやうに申せば猶も身の。恨に似たる事なれども。さすがに未だ君まします。御代の境や一門の。果てをも見ずして徒に。御身一人を捨てし事。眞に由なき事ならずや。シテ「げにげにこれも(後世傳へ傳へて)御理。さりながら頼みなき世のしるしの告。語り申さん、聞き給へ。地「抑「宇佐八幡に参籠し。様々祈誓忘らす。數の頼みを懸けまくも。忝くもみとしるの。錦のうちよりあらたなる。御聲を出してかくばかり。シテ「世の中のうさには神もなきものを何祈らん心づくしに。地「さりともと思ふ心も虫の音も。弱り果てぬる秋の暮かな。シテ「さては佛神三寶也。地「捨て果て給ふと心細くて。一門は氣な

失ひ力を落して。足弱車のすこすこと。還幸なし奉る。哀なりし有様。かゝりけるところに長門の國へも敵向ふと聞きしかば。又舟に取り乗りて。いづくともなく押し出す。心のうちぞ哀なる。げにや世の中の。うつる夢こそ真なれ。保元の春の花。壽永の秋の紅葉とて。散り散りになり浮む。一葉の舟なれや。柳が浦の秋風の。追手顔なるあとの波。白鷺の群れある松見れば。源氏の旗を靡かす多勢かと肝を消す。こゝに清經は心に籠めて思ふやう。さるにても八幡の御託宣あらたに。心魂に残ることわり。まこと正直の頭に宿り給ふかと。唯一條に思ひとり。シテ「あぢきなや。とても消ゆべき露の身を。地猶おきがほに浮草の。浪に誘はれ舟に漂ひて。いつまでか憂きめを水鳥の。沈み果てんとおもひきり。人には云はて岩代の。待つことありや曉の。月に嘯むく氣色にて。船の軸板に立ちあがり。腰より横笛抜き出し。音も澄みやかに吹きならし。今様を歌ひ朗詠し。こし方行く末をかゝみて。途にはいつかあだ波の。歸らぬはいにしへ、止らぬは心づくしよ。此世とても旅ぞかじ。あら思ひ残さずやと。よそめにはひたふる狂人と人や見るらん。よし人は何とも海松藻をかりの夜の空。西に傾く月を見れば。いさやわれも連

れんと。南無阿彌陀佛彌陀如來。迎へさせ給へと。唯一聲を最後にて。舟よりかつばと落潮の。底の水屑と沈み行く。憂き身の果ぞ悲しき。ツレ、聞くに心もくれはとり。うきれに沈む涙の雨の。怨めしかりける契かな。シテ「いふならく。奈落も同じうたかたの。哀は誰も變らざりけり。さて修羅道に遠近の。地さて修羅道になちこちの。たづきは敵。雨は矢さき。土は精劍山は鐵城。雲のはたてをついて。驕慢の劍をそるへ。邪見の眼の光。愛欲とのいち通玄道場(十字意不明「愛欲貪瞋痴慢迷途」といふ説あり)。無明も法性も亂る。敵。打つは波。ひくは潮。西海四海の因果を見せて。これまでなりや。まこととは最後の十念亂れぬ御法の舟に。頼みしまいに疑もなく。げにも心は清經が。げにも心は清經が。佛果をえしこそありがたけれ。

二十三 采女

ワキ 采女の習(前は里の女)

ワキ(旅僧)、詞「これは諸國一見の僧にて候。われ此程は都に候ひて。洛陽の寺社残りなく拜みめぐり

て候。又これより南都に参らばやと思ひ候。熊嶺は彌生の十日餘。花の都を旅立ちて。まだ夜をこめて東雲の影ともに。われも都を下り月。われも都を下り月。残るあしたの朝霞。深草山の末續く。木幡の關を今朝越えて。宇治の中宿井手の里。過ぐればこれぞ奈良坂や。春日の里に著きにけり。春日の里につきにけり。詞急ぎ候ほどに。春日の里に著きて候。心靜に社参申さばやと思ひ候。

シテ(里の女)「宮路正しき春日野の。宮路正しき春日野の。寺にもいざや参らん。更閑け夜靜にして。四所明神の寶前に。耿耿たる燈火も。世を背けたる影かとして。共に憐む深夜の月。朧々と杉の木の間を洩りければ。神の御心にもしく物なくや思すらん。月に散る花の蔭ゆく宮めぐり。運ぶ歩の數よりも。運ぶ歩の數よりも。積る櫻の雪の庭。また色添へてむらさきの。花を垂れたる藤の門。明るるを春の氣色かな。明るるを春の氣色かな。

ワキ「いかにこれなる女性に尋ね申すべき事の候。シテ「こなたの事にて候か何事にて候ぞ。ワキ見申せばこれ程茂りたる森林に。重ねて木を植ゑ給ふ事不審にこそ候へ。シテ「さては當社始めて御

参詣の人にて御入り候か。ワキ「さん候始めて此所に参りて候。當社の訓委しく御物語り候へ。シテ「抑當社と申すは。神護景雲二年に。河内の國牧岡より。此春日山本宮の峰に影向ならせ給ふ。されば此山。本は端山の蔭淺く。樹蔭一つも無かりしを。かげ頼まんと藤原や。氏人寄りて植ゑし木の。本より惠深き故。程なくかやうに深山となる。然れば當社の御誓にも。人の参詣は嬉しけれども。木の葉の葉も裳裙に附きてや去りぬべきと。惜み給ふも何故ぞ。人の煩繁き木の。蔭深かれと今も皆。諸願成就を植ゑおくなり。蔭されば慈悲萬行の日の影は。三笠の山に長閑にて。五重唯識の月の光は。春日の里に隈も無し。地「蔭頼みおはしませ。唯かりそめに植ゑるとも。草木國土成佛の。神木と思し召し。あだにな思ひ給ひそ。荒金の其始め。荒金の其始め。治まる國は久方の。あめはこぎの翠より。花ひらけ香残りて。佛法流布の種久し。昔は靈鷲山にして。妙法華經を説き給ふ。今は衆生を度せんとして。大明神と現れ。此山に住みたまへば。鷲の高嶺とも。三笠の山を御覽せよ。さて菩提樹の木蔭とも。盛なる藤咲きて。松にも花を春日山。のどけき影は靈山の。淨土の春に劣らめや。淨土の春に劣らめや。

シテ、詞「いかに申し候。猿澤の池とて隠れなき名池の候を御覽せられて候か。ワキ「承り及びたる名池にて候御教へ候へ。シテ「此方へ御出で候へ。これこそ猿澤の池にて候へ。又思ふ仔細の候へば。此池のほとりにて。御經を讀み佛事をなして給はり候へ。ワキ「易き間の事、佛事をばなし申すべし。さて誰と心ざして廻向申し候べき。シテ「これは昔采女と申し一人。此池に身を投げ空しくなりしなり。されば天の帝の御歌に。吾妹子が寝ぐたれ髪を猿澤の池の玉藻と見るぞ悲しきと。詠める歌の心をば知るし召され候はずや。ワキ「げにげに此歌は承り及びたるやうに候。委しく御物語り候へ。シテ「昔天の帝の御時に。一人の采女ありしが。采女とは君に仕へし上童なり。初は靨慮淺からざりしが。程なく御心變りしを。及びすながら君を怨み參らせて。此池に身を投げ空しくなりしなり。ワキ「げにげにわれも聞き及びしは。帝あはれと思し召し。此猿澤に御幸なつて。シテ、詞「采女が死骸を靨覽あれば。ワキ「誰さしもさばかり美しかりし。シテ「翡翠の簪、嬋娟の鬢。ワキ「桂の黛。シテ「丹華の唇。ワキ「柔和の姿引きかへて。シテ「ワキ二人、池の藻屑に亂れ浮くを。君もあはれと思し召して。地「吾妹子が寝ぐたれ髪を猿澤の。寝ぐたれ髪を猿澤の。池

の玉藻と見るぞ悲しきと。靨慮にかけし御情。かたじけなやな下として。君を怨みしはかなさば。たとへば及びなき。水の月とる猿澤の。生ける身とおぼすかや。われは采女の幽霊とて。池水に入りにけり。池水の底に入りにけり。(中入)ワキ「誰池の浪夜の汀に座をなして。よるの汀に座をなして。假に見えつるまぼろしの。采女の衣の色々に。巾ふ法ぞ誠なる。巾ふ法ぞ誠なる。後シテ(采女の思)「誰ありがたや妙なる法を得るなるも。心の水と聞くものを。睡がしくとも教あらば。浮む心の猿澤の。池の蓮の臺に座せん。よくよく巾ひ給へとよ。ワキ「ふしぎやな池の汀に断れ給ふば。采女と聞きつる人やらん。シテ、詞「恥かしながらいにしへの。采女が姿を現すなり。佛果を得しめおぼしませ。ワキ「元よりも人人同じ佛性なり。何疑も波の上。シテ「水の底なるうろくづや。ワキ「乃至草木國土まで。シテ「悉皆成佛。ワキ「疑なし。地「況してや人間においてをや。龍女がごとくわれもはや。變成男子なり。采女とな思ひ給ひそ。しかも所は補陀落の。南の岸に至りたり。これぞ南方無垢世界。生れん事も頼もしや。生れん事も頼もしや。

地、響げにやいにしへに奈良の都の代々を経て。神と君との道すぐに。國家を護る誓とかや。シテ、然れば君に仕へ人。其品々の多き中に。地、分きて采女の花衣の。うら紫の心を碎き。君邊に仕へ奉る。シテ、されば世上に其名を弘め。地、情うちこもり言葉外に顯るゝためし。世以つて類多かりけり。葛城の王。勅に従ひ陸奥の。しのぶ振すり誰も皆。こともおろそかなりとて。(此一かゝる)。設などしたりけれど。猶しもなどやらん。王の心とけざりしに。采女なりける女の。土器とりし言の葉の。露の情に心解け。觀感以つて甚だし。されば淺香山。影さへ見ゆる山の井の。淺くは人を思ふかの。心の花開け。風も治まり雲靜に。安全をなすとかや。シテ、然れば采女の戯れの。地、色音に移る花鳥の。とぶさに及ぶ雲の袖。影もめぐるや盃の。御遊の御酒のなりなりも。采女の衣の色添へて。大宮人の小忌衣。櫻をかざす朝より。今日もくれればと。聲のあやをなす舞歌の曲。拍子を揃へ。袂を翻して。遊樂快然たる。采女の衣ぞたへなる。とりわき忘れぬや。曲水の宴のありし時。御土器たびたびめぐり。有明の月更けて。山郭公誘ひ顔なるに。叙慮をうけて遊樂の。月に鳴け。(序ノ舞)

シテ、月に鳴け。同じ雲居の郭公。地、天つ空音の萬代までに。シテ、萬代と限らじものを天衣。撫づとも盡きの巖ならなん。松の葉の。地、松の葉の。散り失せすして。正木の葛長く傳はり。鳥の跡絶えず。天地穩に。國土安穩に。四海波靜なり。シテ、猿澤の池の面。地、猿澤の池の面に。水滔々として。浪また悠々たりとかや。石根に雲起つて雨は草葉を持つなり。遊樂の夜すがら。これ采女の戯れとおぼすなよ。讀佛乘の因縁なるものを。よく申はせ給へやとて。又波に入りけり。また波の底に入りけり。

二十四 通小町

古名 市原小町 四位少將 深草少將の御 小野小町の御(前は里の女)

ワキ(符)詞「これは入瀬の山里に一夏を送る僧にて候。こゝにいづくとも知らず女性一人。毎日果つま木を持ちて來り候。今日も來りて候はり。いかなる者ぞと名を尋ればやと思ひ候。ツレ(里の女)「拾ふつま木も焼物の。拾ふつま木もたき物の。匂はぬ袖ぞ悲しき。これは市原野のあたりに住む女にて候。さても入瀬の山里に。貴き人の御いり候ほどに。いつも果つま木を持ちて



参り候。今日も亦参らばやと思ひ候。いかに申候。又こそ参りて候へ。ワキ「いつも来れる人が。今日果の數々御物語り候へ。ツレ「誰拾ふ果は何々ぞ。地「拾ふ果は何々ぞ。ツレ「いにしへ見馴れし車に似たるは。嵐にもろき落椎。地「歌人の家の果には。ツレ「人丸の垣穂の柿。山の邊の笹栗。地「窓の梅。ツレ「園の桃。地「花の名にある櫻麻の。芋生の浦梨。猶もあり。櫟香椎、眞手葉椎。大小柑子、金柑。あはれ昔の戀ひしきは。花橘の一枝。花橘の一枝。ワキ「調「果の數々は承りぬ。さてさて御身はいかなる人ぞ名を御名のり候へ。ツレ「誰恥かしや己が名を。地「小野とはいはじ。薄生ひたる市原野へに住む姥ぞ。跡とひ給へ御僧とて。掻き消すやうに失せにけり。かき消すやうに失せにけり。ワキ「調「かゝる不思議なる事こそ候はれ。唯今の女を(中頃より「女性の名を「と稱す)委しく尋ねて候へば。小野とは云はじ薄生ひたる。市原野に住む姥にてあると(六字今は「姥)申し。掻き消すやうに失せて候。こゝに思ひ合はする事の候。ある人市原野を通りしに。薄一(すすきひとむらお)群生ひたる陸よりも。秋風の吹くにつけてもあなめあなめ。調「小野とはいはじ薄生ひけりとあり。これ小野の小町の歌なり。さて

は疑ふ所もなく(今は此の間に「唯今の)小野の小町の幽霊と思ひ候ほどに。彼の市原野に行き。小町の跡を甲は「やと思ひ候。誰この草庵を立ち出で。この草庵を立ち出で。猶草深く露繁き。市原野べに尋ねゆき。座具を展べ、香を焼き。南無幽靈成等正覺。出離生死頓證菩提。後ツレ(小町の幽霊)嬉しの御僧の巾ひやな。同じくは戒授け給へ御僧。シテ(深草少將の母)「いや適ふまじ。戒授け給は「恨み申すべし。はや歸り給へ御僧。ツレ「こはいかに偶偶かゝる法に逢へば。猶其苦患を見せんとや。シテ「二人見るだに悲しきに。御身一人佛道ならば我が思。重きが上の小夜衣。重ねて憂き目を三瀬川に。沈みはてなば御僧の。授け給へるかひもあるまじ。はや歸り給へや。御僧たち。地「猶も其身は迷ふとも。猶も其身は迷ふとも。戒力に引かれればなどか佛道ならざらん。たゞ共に戒を受け給へ。ツレ「誰人の心は白雲の。われは曇らじ心の月。出で御僧に訪はれんと。薄押し分け出でければ。シテ「包めどわれも穗に出で。つゝめどわれもほに出でて。尾花招かば止れかし。ツレ「思は山の鹿にて。招くとさらに止まるまじ。シテ「さらば煩惱の犬となつて。打たるゝと離れじ。ツレ「恐る

しの姿や。シテ袂をとつて引き止むる。ツレ引かる一袖も。シテ控ふる。地我が袂も。ともに涙の露、深草の少將。

ワキ、調「さては小野の小町、四位の少將にてましますかや。懺悔に罪を亡し給へ。シテさらばおことは車の榻に」今以上の二句無く。凡てワキの調にて。百夜通ひし所を學うで見せ候べし。ツレもとより我は白雲の。かゝる迷のありけるとは。シテ、調「思ひもよらぬ車の榻に。百夜通へと儂りしな。眞と思ひ。調「曉毎に忍車の榻に行けば。ツレ、調「車の物見もつゝましや。姿を變へよと云ひしかば。シテ、調「輿、車は云ふに及ばず。ツレ、調「いつか思は。地「山城の木幡の里に馬はあれども。シテ、調「君を思へば徒歩跣足。ツレ「さて其姿は。シテ、笠に装。ツレ「身の憂き夜とや竹の杖。シテ、調「月には行くも暗からず。ツレ「さて雪には。シテ「袖を打ち拂ひ。ツレ「さて雨の夜は。シテ「目に見えぬ。調「鬼一口も恐ろしや。ツレ「偶々逢らぬ時だにも。シテ「身獨に降る涙の雨か。あら闇の夜や。ツレ「夕暮は一方ならぬ思かな。シテ「夕暮は何と。地「一方ならぬ思かな。シテ「月は待つらん、月をば待つらん。我をば待たじ。虚言や。地「曉は。曉は數數多き思かな。シテ「我

がためならば。地「鳥もよし啼け。鐘もたゞ鳴れ。夜も明けよ、たゞ。獨寝ならば辛からじ。シテ「かやうに心を盡くし盡くして。地「かやうに心を盡くし盡くして。榻の數數よみてみれば。九十九夜なり。今は一夜も嬉しやとて。待つ日になりぬ。急ぎて行かん。姿はいかに。シテ「笠も見ぐるし。地「風折烏帽子。シテ「裳をも脱すて。地「花摺衣の。シテ「色襲。地「うら紫の。シテ「藤袴。地「待つらんものを。シテ「あら急がしや。すははや今日も。地「紅の狩衣の。衣紋氣高く引き繕ひ。飲酒はいかに。月の益なりとても。戒ならばたんと。唯一念の悟にて。多くの罪を滅して。小野の小町も少將も。共に佛道なりにけり。共に佛道なりにけり。

二十五 小袖會我

シテ 十郎結成  
ツレ 十郎母  
ツレ 狂言 春日局  
シテ 五郎時致

十郎シテ「五郎、三郎、鬼王以上ツレ「命、命、鹿の隠里。命、命、鹿の隠里。富士の裾野を狩らうよ。十郎、調「これれは會我の十郎、祐成にて候。さても頼朝富士の御狩に御出で候間、われらも罷り出で候。又、これなる時致は。母にて候者の勘當にて候ほどに。申し直し連れて御狩に罷り出ばやと存じ候。四人、

「時しも頃は建久四年。五月半の富士の雪。五月雨雲にふりまぜて。かのこまだらや群山の。裾野の鹿の星月夜。鎌倉殿の御狩の御遊。げに類なき御事かな。十郎東八箇國の兵ども。皆御供に参るなれば。四人定めて敵の祐経も。御供申さぬ事あらじ。たとひ撃つまでの。事は夏野の鹿なりとも。狙ひて見ばやとますらなの。狩人に紛れうち出づる。人知れぬ大内山の山守も。木隠れて。それとは見えじ梓弓。それとは見えじ梓弓。矢ころにならば鹿よりも。祐経を射とめて。名を富士の嶺にあげばやと。思ひ立ちぬる狩衣。たとへば君の御咎。よしそれとても數ならぬ。身にはなかなか恐れなし。身にはなかなか恐れなし。

十郎「これに暫御待ち候へ。某参りて案内を申さうするにて候。いかに案内申候。春日局(正宮)「誰にて御座候ぞ。や。祐成の御参りにて候。十郎「さん候。某が参りたる由申し候へ。春日局「畏つて候。大かた殿よりの御詮には。祐成の御参りならば申せ。時致の御参りならば、な申しそと仰せ出だされて候。十郎「唯某がまゐりたると申し候へ。春日局「いかに申上候。祐成の御参りて候。兄弟の母(ツレ)「此方へと申し候へ。あら珍らしや十郎殿。いづくへの次ぞや。母が爲にわざとは、よ

も。十郎「さん候。久しく参らす候ほどに向顔のため。又は富士の御狩と申し候ほどに。母「誰さればこそ思ひし事よ君が爲。御狩に出づる次ぞや。十郎「いつしか親子の御戯れ。めづらし顔に羨しやと。時致「思ひながらも時致は。不興の身なれば物の隙より。地「高間の山の嶺の雲。よそにのみ見てや止みなん。同じ子に。同じ柞のもりめのと。同じ柞のもりめのと。隔なくこそ育てしに。さもひきかへて祐成には。いろいろの御もてなし。御祝事の御盃。たとへば時致は。後に生れしばかりなり。正しく同じ子の身にて。御覺え青垣の。隔あるこそ悲しけれ。

十郎「日本一の御機嫌にて候。あれへ御参りあつて。春日の局を以つて申され候へ。五郎「某が事は御機嫌如何計り難く候間。まづまづ参り候まじ。十郎「唯某に御任せあつて。急いで御参り候へ。五郎「いかに春日の局。時致が参りたる由それそれ申し候へ。誰いっしかもり乳母まで。心變りし春日野の。飛火の野守。出でだに見候はぬぞや。時致が参りたる由それそれ申し候へ。母「あら不思議や。祐成は唯今來りぬ。九上の禪師は寺にあり。それならで子は無きに。時致と云ふは誰ぞ。や。今思ひ出だしたり。箱根の寺にありと箱王といひしえせ者か。それならば母が出家

になれと申し、をきかざりしほどに勘當せしに。推してこれまで來れるは。猶重れての勘當とや。伊豆箱根富士権現も御覽せよ。猶この後も勘當と。五郎、御醫言に部遣戸を地立添へられ。て茫然と。やる方もなき此身かな。うたてやせめて今日。御簾、几帳も下りたり。あら情なの御事や。十郎、祐成はかくとも知らず時致が。時移りたり事善きかと。中門を見やりつ。はや此方へと招げば。五郎、招けて山のかせき。地、なくなき來りたり。打たれても親の杖。なつかしければ去りやらず。なつかしければ去りやらず。

十郎、問「さて御機嫌は何と御座候ぞ。五郎、以つての外の御機嫌にて。猶重れての御勘當と仰せ出だされて候。

母「いかに誰がある。春日局、御前に候。母、時致が事を申さば。祐成ともに勘當と申し候へ。春日局、畏つて候。いかに申し候。時致の御事を御申しあらば。祐成ともに御勘當と仰せ出だされて候。十郎、先づ畏つたると申し候へ。某存する仔細の候間、この度は同心にて申さうするにて候。五郎、「いやいや某は参り候まじ。十郎、唯、御参り候へ。いかに申し候。われらが親の敵の事。世に隠

れなく候ところ。あまりに傾なく候間。時致が事を申し直し。連れて御狩に出づべきところ。時致が事を申さば。祐成ともに御勘當と候や。よくよくこれを案じ見るに。既、惣て祐成をも眞は思ひ給はぬぞや。地、たとひ時致出家の暇を申すとも。兄、祐成に耶蘇もなし。しかも身に思あり。おのれらさへに見捨つるか。却つて御叱り候ひてこそ。慈悲の母とも申すべけれ。十郎、それに時致を法師にならぬとの御勘當。たとひ仰せに従ひ。出家、仕り候とも。地、われらが事は世に隠れなし。あれ見よ、河津が子どもこそ。敵を遁れんとの家。正しく弘法の爲ならずと。同宿も思ひ卑まば。心も染まぬ墨衣の浦島が子の箱根寺まで。明暮くやしと思ふならば。なかなか俗には劣るべし。時致は箱根にありししるしに。法華經一部讀み覚え。常は讀誦し母上の。現世安穩後生善所と祈念する。又は毎日に六萬遍の念佛。父河津殿に廻向する。かほどに他念なき身を此三年不興被る。恩顔を拜せれば御戀ひしさも一つ又は。狩場へのかどいで。御暇ごひしさ。一方ならぬ望なり。大かた治まる御代なれども。狩場や漁捕に。不慮の争あるものを。十郎、其上われらは狩場において例悪しし。地、昔を思ひ伊豆の奥の。赤澤山の狩くらにて。父も失せさせ

給はずや。今とても狩場とあらば。などしも御心にもかけざると。怨顔にも兄弟は。泣く泣く立つて出でなければ。母は聲をあげ。あれ止め給へ人人よ。進不興をも勘當をも。許すぞ許すぞ時致とて。泣く泣く出でさせ給へば。十郎五郎兄弟は嬉し泣きに伏しまるべや。母見る人も思ひやりて泣き居たりや。

母詞「祐成申すによつて。時致が勘當許すにてあるぞ。近う来りて狩場へのかどいで祝ひて御いり候へ。十郎いかに時致近う参りて。この年月の御物語申し候へ。さるにても。地此ほど時致が。盡くす心にひきかへて。今はいつしか思子の。母の情ありがたや。あまりの嬉しさに。祐成御酌に立ちてとりどり。時致と共に祝言の。謠ふ聲。十郎五郎高き名を雲居にあけて富士の嶺の。地「雪を廻らす。舞のかざし。(男舞)

地「舞のかざしの其ひまに。舞のかざしの其ひまに。兄弟目をひき。これや限の親子の契と。思へば涙もつきせぬ名残。をしかの狩場に遅参やあらんと。暇申して歸る山の。富士野の御狩のなりをえて。年來の敵。本望を遂げんと。互に思ふ嘆患の煙。胸の煙を富士風に。晴らして月を清見が

關に。途には其名をとめなば兄弟。親孝行のためしにならん嬉しさよ。

二十六 竹生島

ワキ 龍神(前には漁翁に化す) ツレ 辨才天(前には女の漁人に化す)

ワキ、ワキツレ(官人)「竹に生るる鶯の。竹に生るる鶯の。竹生島 詣急がん。ワキ、ツレ「そもそもこれは延喜の聖代に仕へ奉る臣下なり。さても江州竹生島の明神は。靈神にて御座候間。此度君に御暇を申し。唯今竹生島に参詣仕り候。ワキ、ワキツレ、進言「四の宮や河原の宮居未はやき。河原の宮居未はやき。名も走井の水の月。曇らぬ御代に逢坂の。關の宮居を伏し拜み。山越近き志賀の里。鳩の浦にも著きにけり。鳩の浦にも著きにけり。ワキ、ツレ「急ぎ候ほどに。鳩の浦に著きて候。あれを見れば釣舟の來り候。暫相待ち。便船を乞はばやと存じ候。

シテ「漁翁「おもしろや頃は彌生の半なれば。浪もうららに海の面。ツレ(女)「霞み渡れる朝ぼらけ。シテ「長閑に通ふ舟の道。シテ、ツレ二人「憂き業と無き心かな。シテ「これは此浦里に住み馴れて。明暮運ぶうろくづの。二人「數を盡くして身ひとつな。助けやす(今は「せん」と佗人の。暇も浪間に明け

暮れぬ(今は)。世を渡るこそもの憂けれ。よしよし同じ業ながら。世にこえけ(今は)りな此湖の。名  
 所多き數數に。名所多き數數に。浦山かけて眺むれば。志賀の都花園。昔ながらの山櫻。眞  
 野の入江の船呼ばひ。いざさしよせてこととはん。いざさしよせてこととはん。

ワキ、調「いかにこれなる舟に便船申さうのう。シテ、これは渡りの舟と思し召され候か(此一句今は「これは渡り」)  
 御覽候へ釣舟にて候よ。ワキ、「なたも釣舟と見て候へばこそ便船とは申せ。これは竹生島に始め  
 て參詣の者なり。諸醫の舟に乗るべきなり。シテ、調「げに此所は鹽地にて。歩を運び給ふ人を。  
 とかく申さば御心にも違ひ。又は神慮も計りがたし。ツレ、調「さらば御舟を参らせん。ワキ、「嬉し  
 やさては誓(今の親世流に限り)の舟。法の力と覺えたり。シテ、調「今日はことさら長閑にて。悪心にか  
 かる風もなし。地「名こそさうなみや。志賀の浦に御立ちあるは。都人が痛はしや。御舟に召さ  
 れて浦浦を眺め給へや。

地「所は海の上。所は海の上。國は近江の江に近き。山山の春なれや。花はさながら白雪の。降るか  
 残るか時知らぬ。山は都の富士なれや。猶冴えかへる春の日に。比良の嶺風吹くとも。沖漕ぐ舟

はよも盡きじ。旅のならひの思はずも。雲居のよそに見し人も。おなじ舟に馴衣。浦を隔て、行  
 くほどに。竹生島も見えたりや。シテ、縁樹影洗んで。地「魚木に登る氣色あり。月海上に浮ん  
 では。兎も浪を走るか。おもしろの島のけしきや。

シテ、調「船が著いて候御上り候へ。(今は各流とも、此間にワキの調「)此尉が御道しるへ申さうするにて候。  
 これこそ辨才天にて候へよくよく御祈念候へ。ワキ、「承り及びたるよりもいや優りてありがたう  
 候。不思議やな此所(今は)は。女人結界(今は「禁」とこそ承りて候に。あれなる女人は何とて参ら  
 れて候ぞ。シテ、それは知らぬ人の申しことにて候。忝くも(今は此間に「此島は」の三字を加へて詠ふ)九生如来の御再誕  
 なれば。殊に女人こそ参るべけれ。ツレ、調「のうそれまでもなきものを。地「辨才天は女體にて。  
 辨才天は女體にて。其神徳もあらたなる。天女と現じおはしませば。女人とて隔なし。唯知ら  
 ぬ人の言葉なり。かゝる悲願を起して。正覺年久し。獅子通王の古より。利生更に怠らず。  
 シテ、げにげにかほど疑ひも。地「荒磯島の松蔭を。便によする海士小舟。われは人間にあらずと  
 て。社壇の扉を押し開き。御殿に入らせ給ひければ。翁も水中に。入るかと思しが白波の。立ち歸

りわれは此湖の。あるじぞと云ひ捨て。また浪に入らせ給ひけり。(中入)  
地、御殿類に鳴動して。日月光り輝きて。山の端出づることくにて。現れ給ふぞかたじけなき。

後ツレ(辨才天)抑これは此島に住んで衆生を守る(今は各流神を敬ひ國を)辨才天とは我が事なり。地、其時虚空に音楽聞え。其時虚空に音楽聞え。花ふりくだる春の夜の。月に輝く少女の袂。かへすがへすもおもしろや。(天女ノ舞)

地、夜遊の舞樂も時過ぎて。夜遊の舞樂も時過ぎて。月澄み渡る湖面に。浪風類に鳴動して。下界の龍神現れたり。龍神湖上に出現して。龍神湖上に出現して。光も輝く金銀珠玉を。彼の客人に捧ぐる氣色。ありがたかりける奇特かな。

後ツレ(龍神)本より衆生濟度の誓。地、本より衆生濟度の誓。さまざまなれば。或は天女の形を現じ。有縁の衆生の諸願を適へ。又下界の龍神となつて。國土を鎮め誓をあらはし。天女は宮中に入らせ給へば。龍神はすなはち湖水に飛行して。波を蹴立て水をかへして。天地にむらがる

大蛇の形。天地にむらがる大蛇の形は。龍宮に飛んでぞ入りにける。

二十七 朝長

前ツレ 青墓の長者(女) ツレ 従者  
後ツレ 朝長の誓

ワキ(僧)「これは嵯峨清涼寺より出でたる僧にて候。さても此度平治の亂に。義朝都を御開き候。中にも大夫の進朝長は。美濃の國青墓の宿にて自害し果て給ひたる由承り候。我等も朝長の御縁の者にて候ほどに。急ぎ彼の所に下り。御跡をも申ひ申さんと思ひ立ちて候。ワキ、ワキツレ、道行、近江路や。瀬田の長橋うち渡り。瀬田の長橋うち渡り。猶行く末は鏡山。老曾の森を打ち過ぎて。末に伊吹の山風の。不破の關路を過ぎ行き。青墓の宿に著きにけり。青墓の宿に著きにけり。ワキ、朝長「急ぎ候ほどに。青墓の宿に著きて候。此あたり人の渡り候か。(狂言シカク)」

シテ(長者の女)ツレ(従者)「花の跡申ふ松風や。花の跡とふ松風や。雪にも恨みなるらん。シテ「これは青墓の長者にて候。シテ、ツレ「それ草の露、水の泡。はかなき心の類にも。哀を知るは習なるに。これは殊さら思はずも。人の歎を身の上に。かゝる涙の雨とのみ。しなる、袖の花薄。穗に出すべ

き言の葉も。なくばかりなる有様かな。光の陰を惜めども。月日の數は程ふりて。雪の中。春は來にけり鶯の。春はきにけり鶯の。氷れる涙今ははや。解けても寝ざれば夢にだに。御面影の見えもせで。痛はしかりし有様を。思ひ出づるもあさましや。おもひ出づるもあさましや。シテ、御不思議やな此御墓所へ我ならでは。七日七日に参り。御跡弔ふ者も無きに。旅人と見えさせ給ふ御僧の。涙を流し懇に弔ひ給ふは。いかなる人にてましますぞ。ワキ「さん候これは朝長の御縁の者にて候が。御跡弔ひ申さんためこれまで参りて候。シテ、御縁とは慥しや。さて朝長の御ためいかなる人にてましますぞ。ワキ「これは朝長の御傳何某と申す者にて候ひしが。さる事ありて御暇賜はり。はや十箇年に餘り。かやうの姿となりて候。とくにも罷り下り。御跡弔ひ申したくは候ひつれども。怨敵の縁をば。出家の身をも許されば。抖擻行脚に身をやつし。忍びて下向仕りて候。シテ、さては取り分きたる御なじみ。さこそは思し召すらめ。わらはも一夜の御宿に。あへなく自害し果て給へば。たゞ身の歎のごとくにて。かやうに弔ひ参らせ候。ワキ「馬に痛はしやわれとても。もと主従の御契。これも三世の御値遇。シテ、御「わらはも一樹の蔭の宿。

他生の縁と聞く時は。げにこれとても二世の契の。ワキ「嗚今日しも互にこゝに來て。シテ、弔ふわれも。ワキ「朝長も。地死の縁の。所も逢ひに青墓の。所も逢ひに青墓の。跡のしるしか草の蔭の。青野が原は名のみして。古葉のみの春草は。さながら秋の淺茅原。萩の燒原の跡までも。げに北邙の夕煙。一片の雲となり消えし空は。色も形もなき跡を哀なりける。なき跡を哀なりける。ワキ「御「いかに申し候。朝長の御最期の有様委しく語つて御聞かせ候へ。シテ、申すにつけて痛はしや。暮れし年の八日の夜に入りて。あらけなく門を(今は「門をあ)敲く音す。誰なるらんと尋ねしに。鎌田殿と仰せられしほどに門を開かすれば。武具したる人四五人内に入り給ふ。義朝御親子。鎌田金王丸とやらん。わらはを頼み思し召す。明けなば河船に召され。野間の内海へ御落ちあるべきとなり。又朝長は。都大崩とやらん(今は「御傳へ此)にて膝の口を射させ。とかく煩ひ給ひしが。夜更け人静まつて後。朝長の御聲にて南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と二聲宣ふ。鎌田殿参り。こはいかに朝長の御自害候と申させ給へば。義朝驚き御覽すれば。はや御膚衣も紅に染みて。目もあてられぬありさまなり。其時義朝。何とて自害しけるぞと仰せられしかば。朝長息の下より。義さん



候都大崩にて膝の口を射させ。既に難義に候ひしを。馬にかりこれまでは参り候へども。今は一足も引かれ候はず。途今(今)にて捨てられ申すならば。犬死すべく候。唯返すがへす御前途をも見届り申さで。かやうになり行き候こと。さこそ云ひかひなき者と。思しめされ候はんすれども。途にて敵に逢ふならば。雑兵の手にかりらんと。餘りに口惜う候へば。これにて御暇給はらんと。地「これを最期の(古來本「の」の引音の音屋を同大の文字に)言葉にて事きれさせ給へば。義朝正清とりつきて。歎かせ給ふ御有様は。よその見る目も哀さないつか忘れん。悲しきかなや形を求むれば。苔底が朽骨。見ゆるもの今は更になし。さて其聲を尋ねれば。草徑が亡骨となつて。答ふるものも更になし。三世十方の佛陀の聖主も。憐む心あるならば。亡魂幽霊もさこそ嬉しと思ふべき。かくて夕陽影映る。かくて夕陽影うつる。雲絶え絶えに行く空の。青野が原の露分けて。彼の旅人を伴ひ。青墓の宿に歸りけり。青墓の宿に歸りけり。シテ、御僧に申し候。見苦しく候へども。暫これに御逗留候ひて。朝長の御跡御心解に申ひ参らせられ候へ。ワキ「眞に御志ありがたう候。暫これに候べし。シテ誰がある罷り出で、御

僧に宮仕申し候へ。(申入)

ワキ「さても幽靈朝長の。佛事は様様多けれども。ワキツレ」とりわき亡者の貴み給ひし。ワキ「観音懺法讀み奉り。ワキ三人「聲滿つや。法の山風月更けて。法の山風月更けて。光和らぐ春の夜の。眼を覚ます。椗鼓。時も移るや後夜の鐘。音澄み渡るをりからの。御法の夜聲感涙も。浮むばかりの氣色かな。浮むばかりの氣色かな。

後シテ(朝長の)「あらありがたの懺法やな。昔在靈山名法華。今在西方名阿彌陀。娑婆示現觀世音。三世利益同一體。眞なるかな誠なるかな。頼もしや。聞けば妙なる法の御聲。地「吾今三點。シテ「楊枝淨水唯願薩埵と。心耳を澄ませる玉文の瑞風。感應肝に銘するをりから。シテ「あら貴の巾やな。

ワキ「不思議やな觀音懺法聲澄みて。燈火の影幽なるに。正しく見れば朝長の。影の如くに見え給ふは。若し若し夢か幻か。シテ「本よりも夢幻の假の世なり。其疑を止め給ひて。猶猶御法を講じ給へ。ワキ「げにげにかやうにまみえ給ふも。偏に法の力ぞと。思の玉の數繰りて。シテ

「聲の力にたよりくるは。ワキ真の姿か。シテ幻かと。ワキ見えつ。シテ隠れつ。ワキ面影の。地あれはとも。いば形や消えなまし。いば形や消えなまし。消えすはいかて燈火を。背くなよ。朝長を共に憐みて。深夜の月も影添ひて。光陰を惜み給へや。げにや時人を待たぬ浮世の習なり。唯何事も打ち捨て。御法を説かせ給へや。御法を説かせ給へや。シテ「誰それ朝に紅顔あつて。世路にはこるといへども。地夕には白骨となつて郊原に朽ちぬ。シテ昔は源平左右にして。朝家を守護し奉り。地御代を治め國家を鎮めて。萬機の政すなほなりしに。保元平治の世の亂。いかなる時か來りけん。シテ思はざりにし弓馬の騒ぎ。地偏に時節到來なり。さるほどに嫡子悪源太義平は。石山寺に籠りしを。多勢に無勢適はねば。力なく生捕られて。終に誅せられにけり。三男兵衛の佐なば(二字)彌平兵衛が手に渡り。これも都へぞ捕られける。父義朝はこれよりも。野間の内海に落ち行き。長田を頼み給へども。頼む木の下に雨漏りて。やみやみと討たれ給ひぬ。いかなれば長田は云ひかひなくて主君なば。討ち奉るぞや。いかなれば此宿の。主はしかも女人の。かひがひしくも頼まれて。一夜の情のみかかやうに跡まで

も。御弔ひになることは。シテ抑いつの世の契ぞや。地一切の男子なば。生生の父と頼み。萬の女人を生生の母と思へとは。今身の上知られたり。さながら親子のごとくに御歎きあれば。弔も眞に深き志。請け悦び申すなり。朝長が後生をも御心安く思しめせ。地「誰に頼むべき一乗の。功力ながらになどされば。未だ嗔恚の甲冑の。御有様ぞ痛はしき。シテ「梓弓。本の身ながらたまきはる。魂は前所に赴けども。魂は修羅道に残つて。しばし苦を受くるなり。地「抑修羅の苦患とは。いかなる敵にあひ竹の。シテ「此世にて見し有様の。地「源平兩家。シテ「入り亂る。地「旗は白雲紅葉の。散りまじり戦ふに。運の極めの悲しさは。大崩にて朝長が。膝の口をのぶかに射させて。馬の太腹に射つけらるれば。馬は頻に跳ねあがれば。燈をこして下り立たんとすれども。難儀の手なれば。一足も引かれざりしを。乗替に擔ぎ乗せられて。憂き近江路を凌ぎ來て。此青墓に下りしが。雑兵の手に懸らんよりはと思ひ定めて。腹一文字に掻き切つて。其まゝに修羅道に遠近の。土となりぬる青野が原の。亡き跡弔ひて賜ひ給へ。亡き跡を弔ひて賜ひ給へ。

二十八 姨捨

ワキ(旅僧) 捨てられし終の世(前は里の女)

ワキ(旅僧) 月の名近き秋なれや。月の名近き秋なれや。姨捨山を尋ねん。問かやうに候者は都  
方に住まひ仕る者にて候。われ未だ更級の月を見ず候ほどに。此秋思ひ立ち姨捨山へと急ぎ候。  
進行語 此ほどの。しばし旅居の假枕。しばし旅居の假枕。又立ち出づる中宿の。明かし暮して  
行くほどに。ここぞ名に負ふ更級や。姨捨山に著きにけり。姨捨山に著きにけり。問さてもわれ姨  
捨山に来て見れば。嶺平にして萬里の空も隔なく。千里に隈なき月の夜。さこそと思ひやられて  
候。いかさま此所に休らひ。今宵の月を眺めばやと思ひ候。

シテ(里の女) 詞のうのうあれなる旅人は何事を仰せ候ぞ。ワキ「さん候これは都の者にて候が。始めて  
此所に来りて候。さてさて御身はいづくに住む人ぞ。シテ「これは此更級の里に住む者にて候。  
今日は名に負ふ秋の半。暮るゝを急ぐ月の名の。殊に照り添ふ天の原。隈なき四方の氣色かな。い  
かに今宵の月の面白からんすらん。ワキ「さては更級の人にてましますかや。さてさて古姨捨の。

在所はいづくの程にて候ぞ。シテ「姨捨山のなき跡と。問はせ給ふは心えぬ。我が心慰めかれつ  
更級や。問姨捨山に照る月を見てと。詠せし人の跡ならば。これに木高き桂の木。蔭こそ昔の  
姨捨の。其なき跡にて候へとよ。ワキ「さては此木の蔭にして。捨て置かれにし人の跡の。シテ  
「其まゝ土中に埋草。假なる世とて今ははや。ワキ「昔語になりし人の。猶執心や残りけん。  
シテ「なき跡までも何とやらん。ワキ「物凄しきこの原の。シテ「風も身に浸む。ワキ「秋の心。地今  
とても慰めかれつ更級や。慰めかれつ更級や。姨捨山の夕暮に。松も桂もまじる木の。縁も残り  
て秋の葉の。はや色付くか一重山。薄霧も立ち渡り。風凄しく雲盡きて。寂しき山の氣色かな。寂  
しき山の氣色かな。  
シテ「問「さてさて旅人はいづくよりいづく方へ御通り候ぞ(此一句今の親世流は「旅人はいづくより来り給ふぞ」と流る)。ワキ「されば以前も申  
す如く。都の者にて候が。更級の月を承り及び。始めて此所に来りて候よ。シテ「さては都の  
人にてましますかや。さあらばわらはも月と共に。現れ出でし旅人の。夜遊を慰め申すべし。ワキ  
「そもや夜遊を慰めんとは。さてさて御身はいかなる人ぞ(此一句今の親世流は「御身はいかなる人やらん」と流る)。シテ「まこととはわれは

更級の者。ワキ、嗚「さて今は又いつ方に。シテ」住みかたと云はんに此山の。ワキ「名にしおひたる。女  
 「姨捨の。地」それと云はんも恥かしや。それと言はんも恥かしや。其古も捨てられて。唯ひとり  
 り此山に。すむ月の名の秋毎に。執心の闇を晴らさんと。今宵あらはれ出でたりと。夕陰の木の下  
 に。掻き消すやうに失せにけり。かき消すやうに失せにりけ。(申入)  
 ワキ、嗚「夕陰過ぐる月影の。夕陰過ぐる月影の。はや出でそめて面白や。萬里の空も限なくて。いづ  
 くも秋も隔なき。心も澄みて夜もすがら。三五夜中の新月の色。二千里の外の人古の心。  
 後ジテ(捨てられし姑の思)「あら面白のなりからやな。あら面白のなりからや。明けば又秋の牛も過ぎぬべ  
 し。今宵の月の惜きのみかは。さなきだに秋待ちかねて類なき。名を望月の見したにも(四字成)。覺  
 えぬほどに隈もなき。姨捨山の秋の空(觀望二流今は)。あまりに堪へぬ心とや。昔とだにも思はぬぞ  
 や。ワキ「不思議やなばや更け過ぐる月の夜に。白衣の女人現れ給ふは。夢か現かおぼつかたな。  
 シテ、嗚「夢とはなどや夕暮に。現れ出でし老の姿。恥かしながら來りたり。ワキ、嗚「何をかつしみ給  
 たらん。もとより所も姨捨の。シテ「山は老女が住む所の。ワキ「昔に歸る秋の夜の。シテ「月の友人

團居して。ワキ「草を敷き。シテ「花に起き臥す袖の露の。二人「さも色色の夜遊の人に。いつ馴れそ  
 めてうついなや。地「盛ふけたる女郎花の。盛ふけたる女郎花の。草衣しほたれて。昔だに捨  
 てられしほどの身を知らで。又姨捨の山に出で。面を更級の。月に見ゆるも恥かしや。よしや何  
 事も夢の世の。なかなか云はじ思はじや。思草花にめで。月にそみて遊ばん。  
 地、嗚「げにや興に引かれて來り。興盡きて歸りしも。今のなりかと知られたる。今宵の空の氣色が  
 な。シテ「然るに月の名所。いづくはあれど更級や。地「姨捨山の曇なき。一輪満てる清光の影。  
 團團として海嶠を離る。シテ「然れば諸佛の御誓。地「いづれ勝劣なけれども。超世の悲願普  
 き影。彌陀光明にしくはなし。さるほどに三光西に行くことは。衆生をして(三字古來草木に「應じ  
 べし。蓋には口傳と)西方に。勸め入れんが爲とかや。月は彼の如來の右の脇士として。有縁を殊に導  
 き。重き罪を輕んずる。天上の力を得る故に。大勢至とは號すとか。天冠の間に。花の光輝  
 き。玉の臺のかずかすに。他方の淨土を現す。玉珠樓の風の音。糸竹の調とりどりに。心引かる  
 る方もあり。蓮色色に咲きまじる。寶の池のほとりに。立つや並木の花散りて。芬芳顔に亂れた

り。シテ「迦陵頻伽の類なき。地「聲をたぐへて（四字或は音の差にてた）もろとも。孔雀鸚鵡の同じく。轉る鳥のおのづから。光も影もおしなめて。至らぬ隈もなければ。無邊光とは名づけたり。然れども雪月の。或る時は影満ち。又或時は影缺くる。有爲轉變の世の中の。定めなきを示すなり。シテ「昔戀ひしき夜遊の袖。（序ノ節）

シテ「我が心慰めかれつ。更級や。地「姨捨山に照る月を見て。姨捨山に照る月を見て。シテ「月に馴れ。花に戯る。秋草の。露の間に。地「露の間に。なかなか何しに現れて。胡蝶の遊。シテ「戯る。舞の袖。地「返せや返せ。シテ「昔の秋を。地「思ひ出でたる妄執の心。遣る方もなき今宵の秋風。身にしみじみと戀ひしきは昔。忍ばしきは閻浮の。秋よ友よと思ひ居れば。夜も既に白白と。はやあさまにもなりぬれば。われも見えず旅人も。歸るあとに。シテ「ひとり捨てられて老女が。地「昔「そあらめ今も又。姨捨山とぞなりにける。姨捨山となりにけり。

二十九 柏崎

ワキ 花若の母（後には狂女）  
シテ 小太郎  
ワキツル 花若  
（善光寺住僧）

ワキ（小太郎）「夢路も添ひて古郷に。夢路も添ひて古郷に。歸るや現なるらん。詞「これは越後の國柏崎殿の御内に。小太郎と申す者にて候。さて頼み奉りし人は。訴訟の事候ひて。在鎌倉にて御座候ひしが。唯かりそめに風のこいと仰せ候ひて。程なく空しくなり給ひて候。又御子息花若殿も。同じく在鎌倉にて御座候ひしが。父御の御別を歎き給ひ。いづくともなく御逝世にて候。さる間花若殿の御文に。御形見の品品を取り添へ。唯今古郷柏崎へと急ぎ候。進行乾しぬべき日影も袖やぬらすらん。日影も袖やぬらすらん。今行く道は雪の下。一通降る村時雨。山の内をも過ぎ行けば。袖冴え増る旅衣。碓氷の時打ち過ぎて。越後に早く。著きにけり。越後に早く著きにけり。詞「急ぎ候ほどに。古郷柏崎に著きて候。まづまづ案内を申さうするにて候。

ワキ「詞「いかに申し候。鎌倉より小太郎が参りて候それ御申し候へ。シテ「花若の母「詞「なに小太郎とは。若し殿の御歸りありたるか。あら珍らしや何とて物をば申さぬぞ。ワキ「さん候「これまで参りて候へども。誰何と申し上ぐべきやらん。さらに思ひも辨へず候。シテ「詞「あら心許無や。物をば申さてさめさめと泣くは。さて花若が方に何事がある。ワキ「さん候「花若殿は御逝世にて御座

候。シテ「何と花若が遁世したるとは。さては父の吐りけるか。など追手をばかけざりしぞ。ワキ「いやさやうにも御座なく候。さまざまの御形見の物を持ちて参りて候。シテ「何様様の形見とは。さては花若が父の空しくなりたるな。蓋此程は其方の風もなつかしく。便も嬉しかりつるに。形見を届くる音づれば。なかなか聞きても恨めしきぞや。唯かりそめに立ち出で。やがてと云ひし其主は。地「昔語にばやなりて。形見を見るぞ涙なる。

シテ「蓋」さてや最期のなりふしは。いかなる事が宣ひし。委しく語りおはしませ。切めては聞いて慰まん。ワキ「唯古郷の御事を。おぼつがなく思し召し。御最期までも人知れず。密に御説ありしなり。シテ「げにやさこそはおはすらめ。三年離れて其後は。われも御名残いつの世にかは忘るべき。ワキ「御理と思へども。歎きを止めおはしませ。形見を御覽候へ。シテ「げにや歎きても。かひなき世ぞと思へば。地「形見を見るからに。すゝむ涙はせきあへず。

ワキ「御」花若殿の御文の候。これを御覽候へ。シテ「蓋」さてもさても父御前。痛はり附かせ給ひ。程なく空しくなり給へば。心の中の悲しさは。唯思し召しやらせ給へ。われも歸りて御有様。見参ら

せたくは候へども。思ひ立ちぬる修行の道。もしや止められ申さんと。思ふ心を便にて。心強くも出づるなり。命つれなく候は。三年がうちには参るべし。様様の形見を御覽じて。御心を慰みおはしませと。書いたる文の恨めしや。地「亡からん父が名残には子ほどの形見あるべきか。父が別はいかなれば。父が別はいかなれば。悲み修行に出づる身の。などや生きてある。母に姿をみみえんと。思ふ心のなかるらん。恨めしの我が子や。憂き時は。恨みながらもさりとは。我が子の行くへ安穩に。守らせ給へ神佛と。祈る心を哀なる。祈る心を哀なる。(中入)

ワキツレ(普光寺住僧)「かやうに候者は。信濃の國善光寺の住僧にて候。又これにわたり候人は。いづくとも知らず愚僧を頼む由仰せ候ほどに。師弟の契約をなし此程出家させ申して候。さる間毎日如来堂へ伴ひ申し候。今日も又参らばやと思ひ候。

シテ(花若の母、狂女となりて)「聞」これなる童どもは何を笑ふぞ。なに物に狂ふがをかしいとや。うたてやな心あらん人は。訪ひてこそ給ふべけれ。それをいかにと云ふに。夫には死して別れ。唯一人忘れがたみと思ふべき。蓋子の行くへをも白糸の。地「亂心や狂ふらん。シテ「げにや人の身のあ

だなりけりと。誰か云ひけん虚言や。又思には死なれざりけりと。詠みしも理や。今身の上は知られたり。これもひとへに夫や子の。故と思へば恨めしや。地「憂き身は何と檜の葉の柏崎をば狂ひ出で。越後の國府に著きしかば。越後の國府に著きしかば。人目も判かぬ我が姿。いつまで草のいつまでと。知らぬ心は麻衣。うらはるばると行くほどに。松風遠く寂しきは。常盤の里の夕かや。われにたぐへてあはれなるは此里。子故に身をこがし、は野邊の木鳴の里とかや。降れども積らぬ泡雪の。淺野といふはこれかとよ。桐の花咲く井の上の。山を東に見なして。西に向へば善光寺。正身の彌陀如來。わが狂亂はさて置きぬ。死して別れし夫を導きおはしませ。

住持「問「いかに狂女。御堂の内陣へはかなふまじきぞ急いで出で候へ。シテ「極重惡人無他方便。唯稱彌陀得生極樂とこそ見えなれ。僧「これはふしぎの物狂かな。そもさやうの事をば誰が教へけるぞ。シテ「教はもとより彌陀如來の。御誓にてはましますや。唯心の淨土と聞く時は。此善光寺の如來堂の。内陣こそは極樂の。九品上生の臺なるに。女人の參るまじきとの御制戒とはそもされば。如來の仰せありけるか。よし人人は何とも云へ。聲「こそ知るべ南無阿彌陀佛。

地「頼もしや。頼もしや。シテ「釋迦は遣り。地「彌陀は導く一條に。こゝを去ること遠からず。これぞ西方極樂の。上品上生の内陣にいざや參らん。光明遍照十方の誓ぞしるき此寺の。常の燈火影頼む。夜念佛申せ人人よ。夜念佛いざや申さん。

シテ「詞「いかに申し候。如來へ參らせ物の候。此烏帽子直垂は。別れし夫の形見なれども。形見こそ今は仇なれこれなくば。忘るゝ隙もあらましもものをと。詠みしと思ひ知られたり。これを如來に參らせて。夫の後生善所をも祈らばやと思ひ候。あらいとふしや此烏帽子直垂の主は。調萬何事につきても闇からず。弓は三物とやらんを射そるへ。歌連歌の道も達者なりし上。又酒宴などのをりふしは。いで人人に亂舞まうて見せんとて。箆鏡直垂とり出だし。衣紋美しく着ないて。へりぬり取つて打ちかづき。手拍子人に囃させて。扇おつ取り。鳴るは瀧の水。

地「それ一念稱名の聲のうちには。攝取の光明を待ち。聖衆來迎の雲の上には。シテ「九品蓮臺の花散りて。地「異香満ちみちて人に薫じ。白虹地に満ちて列れり。シテ「つらつら世間の幻相を觀するに。飛花落葉の風の前には有爲の轉變を悟り。地「電光石火の影のうちには生死

の去來を見ること。始めて驚くべきにはあられども。幾世の夢と纏はりし。假の親子の今をだに。添ひ果てもせぬ道芝の露の愛き身の置き所。シテ誰に問はまし旅の道。地「これも愛き世のならひかや。悲みの涙眼に遮り。思の煙胸に満つ。つらつらこれを案するに。三界に流轉して。猶人間の妄執の。晴れ難き雲の端の。月の御影や明けき。眞如平等の臺に至らんとだにも歎かすして。煩惱の絆に結ばほれぬるぞ悲しき。罪障の山高く。生死の海深し。いかにとしてか此生に。此身を淨めんと。げに歎けども人間の。身三口四意三の。十の道多かりき。シテされば始めの御法にも。地「三界一心なり。心外無別法。心佛及衆生と聞く時は。是三無差別な疑のあるべきや。己心の彌陀如来。唯心の淨土なるべくは。尋ねべからず此寺の。御池の蓮の。えん事(三寶)をなとか知らざらん。唯願はくは影頼む。聲を力の助け船。黄金の岸に至るべし。そもそも樂を極むなる。教數多に生れ行く。道さまさまの品なれや。寶の池の水。功德池の濱の眞砂。數數の玉の床。臺も品品の樂を極め。量りなき命の佛なるべしや。若我成佛十方の世界なるべし。シテ「本願誤り給はずは。地「今のわれらが願はしき。夫の行くへを白雲の。豈く山や西の空の。

彼の國に迎へつ。一つ淨土の縁となし。望を適へ給ふべしと。稱名も鉦の音も。曉かけて燈火の。善き光ぞと仰ぐなりや。南無歸命彌陀尊願ひをかなへ給へや。地「今は何をか包むべき。これこそ御子花若と。云ふにもすゝむ涙かな。シテ「我が子ぞと。聞けばあまりに堪へかぬる。夢かとはかり思子のいづれぞさても不思議やな。地「ともにそれとは思へども。變る姿は墨染の。シテ「見しにもあらぬ而忘れ。地「母の姿も現なき。シテ「狂人といひ。地「衰へといひ。互にあきれてありながら。よくよく見れば團原や。伏屋に生ふる椿木の。ありとは見えて逢はぬとこそ。聞きしものを今ははや。疑もなき其母や子に。逢ふこそ嬉しかりけれ。逢ふこそ嬉しかりけれ。

三十 阿漕

ワシテ 漁夫の亡(前には漁翁に化して出づ) 僧(又は常の男にて)

ワキ(旅僧)「心づくしの秋風に。心づくしの秋風に。木の間の月ぞすくなき。阿「これは九州日向の國の者にて候。われ未だ太神宮(今は伊勢を)に参らす候ほどに。唯今思ひ立ちて候。道行、産日に向ふ



國の浦舟漕ぎ出でて。國の浦舟漕ぎ出でて。八重の汐路を遙遙と。分け米し浪の淡路海。通ふ千鳥の聲聞きて。旅の寢覺を須磨の浦。關の戸ともに明け暮れて。阿漕が浦に著きにけり。阿漕が浦に著きにけり。詞急ぎ候ほどに。これははや伊勢の國阿漕が浦に著きて候(今は「安曇の浦」と云ふ所なり候と云へ改めて理を合はさるなり)。暫く人を相待ち。所の名所をも尋ねばやと思ひ候。  
シテ「漁師」波ならで乾す隙もなき海士衣。身の秋いつと限らまし。それ世を渡るならひ。われ一人に限られども。せめては職を營む田夫ともならず。かく淺ましき殺生の家に生れ。明け暮れ物の命を殺すことの悲しさよ。詞拙かりける殺生かなとは思へども。うき世の業にて候ほどに。今日も又釣に出でて候。

ワキ、詞「いかにこれなる尉殿に尋ね申すべき事の候。シテ「此方の事にて候か何事にて候ぞ。ワキ此浦をば阿漕が浦と申し候か。(近世此ワキの詞を傳へ誤りて「伊勢の國にとりて。此浦をはいかなる所と申し候と云ふ事なり。其爲明治になりて前のワキの詞を改めて理に合はせたり)シテ「さん候此所をば阿漕が浦と申し候。ワキ「さては承り及びたる阿漕が浦にて候ひけるぞや古き歌に。阿漕の海阿漕が浦に引く網も。阿漕重なれば顯れにけり。かやうに詠まれし浦なるぞや。阿漕

面白や候。シテ、詞「あらやさしの旅人や。所の和歌なればなにかは知らず候べき。彼の六帖の歌に。蓬蓬ふことも阿漕が浦に引く網も。阿漕重なれば顯れやせん。かやうに詠まれしあまんなれば。さも心なきいせをの海士の。見る目も輕き身なればとて。賤しみ給ひ候なよ。ワキ「うげにや名所舊跡に。馴れて年経ば心なき。シテ「海士の焚く藻の夕煙。ワキ「身を焚くべきにあられども。シテ「住めば所による波の。ワキ「音も變るか。シテ「聞き給へ。地物の名も。所によりて變りけり。所によりて變りけり。難波の蘆の浦風も。こゝには伊勢の濱萩の。音をかへて聞き給へ。藻鹽焼く煙も今は絶えにけり。月見んとての海士のしわざにと。許され申す海士衣。敷島に寄りくる。人なみにいかで洩るべき。  
ワキ、詞「此浦を阿漕が浦と申す謂御物語り候へ。シテ「惣じて此浦を阿漕が浦と申すは。伊勢大神宮御降臨より此方。御膳調進の網を引く所なり。されば神の御誓によるにや。海邊のうろくづ此所に多く集るにより(今は「伊勢の浦」と云ふ所なり候と云へ改めて理を合はさるなり)。うき世を渡るあたりのあまんな。此所に漁を望むといへども。神前の恐あるにより。堅く戒めてこれを許さぬところに。阿漕といふあまんな。業に望む心の悲しさは。

昨夜忍びて網を引く。しばしば人も知らざりしに。度重なれば顯れて。阿漕を締め所をもかへす。此浦の沖に沈めけり。誰さなきだに伊勢をの海士の罪深き。身を苦みの海的面。重ねて重き罪科を。受くるや冥途の道までも。地「婆婆にての名にし負ふ。今も阿漕が恨めしや。阿漕の貴も隙なくて。苦みも度重なる罪甲はせ給へや。恥かして古を。語るもあまりげに。阿漕が憂き名漏らす身の。亡き世語の色色に。錦木の敷積り。千束の契忍ぶ身の。阿漕がたとへ憂き名立つ。靈清と聞えし其歌人の。忍妻阿漕阿漕と云ひけんも。貴一人に度重なるぞ悲しき。地「誰ふしぎやさては幽霊の。幻ながら現れて。執心の浦波の哀なりける値遇かな。シテ「一樹の宿をも他生の縁と聞くものを。御身も前の世の。知遇をすこし松蔭に。うらぶれ給へ墨衣。地「日も夕暮の沙煙。立ちそふ方や漁火の。シテ「影もほのかに見えそめて。地「海邊も晴るゝむら霧に。シテ「すはや手練の。地「網の綱。繰りかへし繰りかへし。浮きぬ沈むと見しよりも。俄に疾風吹き。海面暗くかき昏れて。しき浪も立ちそひ。漁の燈消え失せて。こはそもいかにと叫ぶ聲の。波に聞えしばかりにて。あとはかもなく失せにけり。あとはかもなく失せにけり。

ワキ「誰いざ巾はん數數の。いざ巾はん數數の。法の中にも一乗の。妙なる花のひもときて。苔の衣の玉ならば。途に光は暗からじ。途に光は暗からじ。後ジテ「漁夫の窓海士の刈る。藻に棲む蟲のわれからと。音をこそ泣かめ。世をば恨みじ。今宵はすこし浪荒れて。御膳の贅の網はまた引かれぬものう。詞よき隙なりと夕月なれば。宵よりやがて入沙の。露道を變へ人目を。忍び忍びに引く網の。沖にも磯にも舟は見えず。唯われのみぞあこの海。阿漕が鹽木懲りもせて。地「猶執心の網置かん。シテ「伊勢の海清き渚のたまたまし。地「とふこそ便法の聲。シテ「耳には聞けども猶心には。地「唯罪をのみ持ち網の。浪は却つて猛火となるぞや。あら熱や堪へがたや。丑みつ過ぐる夜の夢。丑みつ過ぐる夜の夢。見よや因果の廻り来る。火車に業積む數くるしめて。目の前の地獄も眞なり。げに恐ろしの氣色や。シテ「思ふも怨めしいにしへの。地「思ふも怨めし古の。婆婆の名をえし阿漕が此浦に。猶執心の心引く網の手馴れしうろくづ。今は却つて悪魚毒蛇となつて。紅蓮大紅蓮の氷に身を傷め。骨を碎けば叫ぶ息は。焦熱大焦熱の。焰、煙、雲、霧。起居に隙もなき。冥途の貴も度重なる。阿漕が浦の罪科

を。助け給へや旅人よ。助け給へや旅人とて。また浪に入りにはけり。また浪の底に入りにはけり。

三十一 志賀

古名 黒主 志賀黒主

シテ 大伴黒主の山前には熊夫に化して出づ  
ツレ 熊夫 ワキ 官人 ワキツレ 同

ワキ、ワキツレ(官人)道ある御代の花見月。道ある御代の花見月。都の山ぞ長閑けき。ワキ、ツレ「抑これは  
たうきんつかたてまつしんか  
當今に仕へ奉る臣下なり。さても江州志賀の山櫻。今を盛なる由承り及び候ほどに。唯今  
しがやまぢ  
志賀の山路へと急ぎ候。ワキ、ワキツレ、進行、春の色。たなびく雲の朝ぼらけ。たなびく雲の朝ぼらけ。  
のどけき風の音羽山。今朝越え来ればこれぞこの。名に負ふ志賀の山越や。湖遠き眺かな。湖  
とほながめ  
遠き眺かな。ワキ、ツレ「急ぎ候ほどに。江州志賀の山に著きて候。暫この所に候ひて花を眺めうする  
にて候。

前ジテ(熊夫)ツレ(熊夫)「浪や志賀の都の名をとめて。昔ながらの。山櫻。ツレ「春に馴れてや心な  
き。シテ、ツレ「身にも情の残らん。シテ「山路に日暮れぬ樵歌牧笛の聲。シテ、ツレ「人間萬事様様の。  
世を渡りゆく身のありさま。物毎に遮る眼の前。光の影をや送らん。餘りに山を遠く来て。雲

又あとを立ち隔て。入りつる方も白波の。入りつる方も白波の。谷の河音雨とのみ。聞えて松の  
かぜ  
風もなし。げにや謔つて半日の客たりしも。今身の上知られたり。今身の上知られたり。  
ワキ、ツレ「ふしぎやなこれなる山賤を見れば。重かるべき薪に猶花の枝を折り添へ。休む所も花の蔭な  
り。これは心ありて休むか。唯薪の重さに休み候か。シテ「仰せ畏つて承り候ひぬ。まづ薪に  
花を折ることは。熊道のべのたよりの櫻折りそへて。同薪や重き春の山人と。歌人の御不審あり  
し上。今更何とか答へ申さん。ツレ「熊「又奥深き山路なれば。松も檜原も多けれども。取り分き花  
の蔭に休むを。シテ、ツレ「唯薪の重さに休むかとの。仰せば面目無きものう。シテ、ツレ「さりなが  
ら彼の黒主が歌のごとく。其様賤しき山賤の。薪を貢ひて花の蔭に。休む姿はげにも又。其身に應  
ぜぬふるまひなり。許し給へや上臈たち。ワキ、ツレ「はいかに優るをも羨まされ。劣るをも卑む  
などの。古人の掟は眞なりけり優しくも。古歌の喩の心をもつて。熊今の返答申したり。シテ、ツレ  
「いやいや古歌の喩とやらんも。さらさら知らぬ身なれども。賤しき身にも思ひよりて。ワキ、ツレ「彼  
の同伴の黒主が。心をよする老の浪。シテ「和歌のうらわの藻蘆草。ワキ「かく喩へおく世語の。シテ

「それは黒主。ワキ」これは真に。シテ「さまも賤しき。ワキ」山賤の。地「身には應ぜぬことなれど。許させ給へ都人。とても思ひ出に花の蔭に休まん。げにや今までも筆を残して貫之が。詞の玉のおのづから。古今の道とかや。古今の道とかや。」

地「それ賢かつし時世を尋ぬるに。延喜の聖代のいにしへ。國を恵み民を撫で。萬機の政を治め給ふ。シテ「然れば其御時に至つて。和歌の道盛にして。古今の詠歌を撰み。地「二聖六歌仙を始として。其外の人人は野邊の葛のはひ廣こり。林に繁き木の葉の露の。色に染みゆく歌人の。心は花になるとかや。シテ「げに埋木の人知れぬ。地「ことわざまでの情とかや。抑 難波津淺香山のかげ見えし山の井の。淺くは誰か思ひ草の。露行き、霜來る色なれや。濱の眞砂より數多き言の葉の。心の花の色香までも妙なりや。敷島の道ある御代の翫び。然れば三十一文字の。神も守護し給ひて。無見頂相の如來も感應垂れ給へば。君も安全に萬民時を樂みて。都鄙回瀆の雲の下。四海入洲の外までも。浪の聲萬歳の響は長閑けかりけり。シテ「今天皇の御代久に。地「萬の政の道直に渡る日の。東南に雲收まり。西北に風靜にて。言葉の林榮行くや花も常磐の山松の。巷

に謳ふ聲までも。これ和歌の詠に洩るべしや。天地を動かし(天地も動き)鬼神も感なすとかや。地「げにや異なる山賤の。げにやことなる山賤の。家路いづくの末ならん。ゆかしき心なるべし。シテ「今は何をか包むべき。其いにしへは大伴の黒主といはれしが。時世として此山の神とも人を見るらん。地「そも此山の神そとは。ふしぎやさては大伴の。シテ「それは黒主が家の名の。地「大伴か。シテ「我はたり。地「薪資ふ友をなくて。獨山路の花の蔭に。長休みしつる恥かしやと。夕の雲に立ち隠れて。志賀の宮路に歸りけり。志賀の宮路に歸りけり。(中入)

ワキ「ワキヅレ、いざ今日は春の山邊にまじりなん。春の山邊にまじりなん。暮れなばなげの花の蔭。月に詠じて天の原。時の調子にうつりくる。舞歌の聲こそあらたなれ。舞歌の聲こそあらたなれ。後ジテ(大伴黒主の監)雪ならば幾度袖を拂はまし。花の吹雪の志賀の山。越えても同じ花園の。里も春めく近江の湖の。志賀辛崎の松風までも。千聲の春ののどけさよ。湖越に見えてぞ向ふ鏡山。地「年經ぬる身は老髪。シテ「それは老髪、これは志賀の。地「神の白木綿かけまくも。奈しや神樂の舞。(神舞)

地、藤「ふしぎなりつる山人の。ふしぎなりつる山人の。薪の斧の永き日も。残る和光のあらたさよ。  
 シテ「げに惜むべし君が代の。長閑けき色や春の花の。座にまじはる雪ならば。踏む跡までも心せよ。  
 地「げに心して春の風。聲も添ふなり御神樂の。シテ「小忌の衣の色映えて。地「花は梢の白和幣。  
 シテ「松は立枝の。地「青和幣。かゝるやかへるや。梓弓。春の山邊を越え来れば。道もさりあへず  
 散る花の。雲の羽袖を返しつ。紅の御袴（「ギョウコ」のそばをとり。拍子を揃へて神かぐら。げに  
 おもしろかな。面白き奏かな。面白き奏かな。面白き奏かな。

三十二 鶴

ワキ 旅の亡霊(前には舟人に化して出づ)

ワキ(旅僧)「世を捨人の旅の空。世を捨人の旅の空。来し方いづくなるらん。阿「これは諸國一見の僧  
 にて候。われ此程は三熊野に参りて候。又「これより都に上らばやと思ひ候。進行、程もなく歸り  
 紀の路の關越えて。歸り紀の路の關越えて。猶行く末は和泉なる。信太の森をうち過ぎて。松原見  
 えし遠里の。こゝ住の江や難波湯。蘆屋の里に著きにけり。蘆屋の里に著きにけり。阿「急ぎ候ほど

に。これははや津の國蘆屋の里に著きて候。日の暮れて候ほどに。宿を借らばやと思ひ候。  
 シテ(舟人)「悲しきかなや身は籠鳥。心を知れば盲龜の浮木。たゞ闇中に埋木の。あらば埋れもはて  
 すして。亡心何に残るらん。浮き沈む涙の波のうつほ舟。地「こがれてたへぬいにしへを。シテ  
 「忍びはつべき暇ぞなき。  
 ワキ「ふしぎやな夜も更げ方の浦波に。幽かに浮み寄るものを。見れば聞きしにかはらすして。舟  
 の形はありながら。唯埋木のごとくなるに。乗る人影もさだかならず。あらふしぎのものやな。  
 シテ、阿「ふしぎの者と承る。其方はいかなる人やらん。阿「元より憂き身は埋木の。人知れぬ身と思  
 しめさば。不審はなさせ給ひそとよ。ワキ「いやこれは唯此里人の。さもふしぎなる舟人の。夜夜  
 來るといひつるに。見れば少しも違はれば。われも不審を申すなり。シテ、阿「此里人とは蘆の屋の  
 灘の鹽焼くあま人の。類を何と疑ひ給ふ。ワキ「鹽やく海士のたぐひならば。業をばなさて暇あ  
 りげに。夜夜來るは不審なり。シテ、阿「げにげに暇のある事を。疑ひ給ふも謂あり。古き歌にも蘆  
 の屋の。ワキ「灘の鹽焼く暇無み。黄楊の小櫛は挿さず來にけり。シテ「われも憂には暇無みの。

ワキ「汐にさいられて。シテ」舟人は。地「棹さで來にけりうつほ舟。棹さできにけりうつほ舟。現か夢か明けてこそ。海松藻も刈らぬ蘆の屋に。一夜寝て海士人の。心の闇を弔ひ給へ。ありがたや旅人は。世を遁れたる御身なり。我れは名のみぞ捨小舟。法の力を頼むなり。法の力を頼むなり。ワキ「何と見申せども更に人間とは見えす候。いかなる者ぞ名をなのり候へ。シテ」これは近衛の院の御宇に。頼政が矢先にかゝり。命を失ひし鶴と申し、ものの亡心にて候。其時の有様委しく語つて聞かせ申候べし。跡をとつて給はり候へ。ワキ「さては鶴の亡心にて候か。其時のありさま委しく語り候へ。跡をも懇に弔ひ候べし。地「さては近衛の院の御在位の時。仁平の頃ほひ。主上よなよな御惱あり。シテ」有驗の高僧貴僧に仰せて。大法を修せられけれども。其驗更に無かりけり。地「御惱は丑の刻ばかりにてありけるが。東三條の森の方より。黒雲一羣立ち來つて。御殿の上に蔽へば必ず脅え給ひけり。シテ」すなはち公卿詮議あつて。地「定めて變化の者なるべし。武士に仰せて誓固あるべしとて。源平兩家の兵を撰せられけるほどに。頼政を選み出されたり。頼政其時は兵庫の守とぞ申しける。頼みたる郎等には猪の早太唯一人召し具したり。わが身は二

重の狩衣に。山鳥の尾にて矧いたりける尖矢二條。重藤の弓に取り添へて。御殿の大床に伺候して。御惱の刻限を今や今やと待ち居たり。さるほどに案のごとく黒雲一羣立ち來り。御殿の上に蔽ひたり。頼政きつと見上ぐれば。雲中に怪きものの姿あり。シテ「矢取つて打ち番ひ。地「南無八幡大菩薩と。心中に祈念して。寄つ引きひようと放つ矢に。手應へしてはたと申る。得たりやおうと矢叫びして。落つるところを。猪の早太つと寄りて。續けさまに九刀ぞ刺いたりける。さて火を燭しよく見れば。頭は猿、尾は蛇、足手は虎のごとくにて。鳴く聲鶴に似たりけり。恐ろしななどもおろかなる形なりけり。地「驚げに隠れなき世語の。其一念を醜し。浮む力となり給へ。シテ「浮むべきたより済の淺縁。みつのがしは三角柏(解りて「みつの」を「水」の「意」に)にあらばこそ。沈むは浮む縁ならめ。地「驚げにや他生の縁ぞとて。シテ」時もこそあれ今宵しも。地「なき世の人に合竹の。シテ」棹とり直しうつほ舟。地「乗ると見えしが。シテ」よるの浪に。地「浮きぬ沈みぬ見えつ隠れ(「つ」を「脱」)絶え絶えの。いくへ(「ゆくへ」)に聞くは鶴の聲。恐ろしや凄まじしや。あら恐ろしや凄まじしや。(中入)

リキ臨 御法の聲も浦波も。御法の聲も浦波に。皆實相の道弘き。法を受けよと夜と共に。此御經  
 を讀誦する。此御經を讀誦する。一佛成道觀見法界。草木國土悉皆成佛。  
 後ジテ(母の思)有情非情皆俱成佛道。ワキヲ頼むべし。シテ頼むべしや。地五十二類もわれ同  
 性の涅槃に引かれて。眞如の月の夜汐に浮みつゝ。これまで來れりありがたや。ワキヲふしぎやな  
 目前に來る者を見れば。面は猿、足手は虎。聞きしに變らぬ變化の姿。あら恐ろしのありさまや  
 な。シテさてもわれ惡心外道の變化となつて。佛法王法の障とならんと。皇城近く遍滿して。  
 東三條の林頭にしばらく飛行し。丑みつばかりのよなよな。御殿の上に飛びさがれば。地即  
 ち御惱類にて。玉體をなやまして。おびえ魂消らせ給ふ事も。我が爲すわざよと怒をなし  
 に。思ひも寄らざりし頼政が。矢さきに中れば變身失せて。落落磊磊と地に倒れて。忽ちに滅せ  
 しこと。思へば頼政が矢さきよりは。君の天罰ト(藤本には「を」と書き、上の詞を提音にして「テンバツト」と讀へり。提音に  
 と讀はれたるにあらずして、「の」が「ト」讀はれたるなり。藤本に「を」となしたるは誤見なり。)あたりけるよと。今こそ思ひ知られたれ。其時主上御感あつ  
 て。獅子王といふ御劍を頼政に下されけるな。宇治の大臣賜はりて。階を下り給ふに。おりふし郭

公音づれば。大臣とりあへず。シテほととぎす名をも雲居にあぐるかな。と仰せられければ。  
 地頼政右の膝をついて左の袖を廣げ。月をすこし目にかけて。弓張月のいるに任せて、と仕り。御  
 劍を賜はり。御前を罷り歸れば。頼政は名をあげて。我は名を流すうつほ舟に。おしいれられて淀  
 川の。淀みつ流れつ行く末の。宇殿も同じ蘆の屋の。うらわの浮洲に流れ止まつて。朽ちながらう  
 つほ舟の。月日も見えず冥きより。冥き途にぞ入りにける。遙かに照らせ山のはの。遙かに照らせ  
 山の端の。月と共に海月もいりにけり(此一何疑)。海月と共にいりにけり。

三十三 大原御幸

ワキ 磯門院(女院) 大納言局 萬里小路中納言  
 ツツレ 後白河法皇 (大官官人、從者)

ワキツレ(大臣詞)これは後白河の院に仕へ奉る臣下なり。さても此度先帝二位殿を始め奉り。平家  
 の二門長門の國早鞆の沖にして。悉く果て給ひて候。女院も御身を投げさせ給ひ候を取り上  
 げ奉り。かひなき御命助かりおはしまし候。三河の守範頼。九郎大夫の判官義經兄弟供  
 奉し申し。三種の神寶事故なく都に收まり給ひ候。さるほどに女院は都に移らせ給ふべかりし

を。先帝安徳天皇の御菩提。並に二位殿の御跡御弔ひの爲に。大原の寂光院に憂き世を厭ひ御座候を。法皇御幸をなされ。御訪ひあるべきとの勅詔にて候間。御幸の山路をも申し付けばやと存じ候。いかに誰かある。大原へ御幸あるべきなれば。行幸の道をもつくり其清めを仕り候へ。

シテ(女院語)山里は物の寂しき事こそあれ。世の憂きよりはなかなかに。シテ(大納言)ツレ(河波内侍)語住みよかりける柴の扇。都の方の音信は。間遠に結へる笹垣や。うきふし繁き竹柱。立ち居につけて物思へど。人目なきこそ安かりけれ。をりをりに心なけれど訪ふものは。賤が妻木の斧の音。賤が妻木の斧の音。梢の嵐、猿の聲。これらの音ならでは。正木の葛、青つら。來る人稀になりはてし。草顔淵が巷に。滋き思ひの行くへとて。雨原憲が櫃とも濕ふ袖の涙かな。濕ふ袖の涙かな。女院語「いかに大納言の扇。後の山に上り櫓を摘み候へし。扇「わらはも御供申し。妻木殿を折り供御に供へ申候へし。女院語「譬は儼なき事なれども。悉達太子は淨飯王の都を出で。檀特山の嶮しき道を凌ぎ。菜摘み、水汲み、薪。地「とりどり様様に難行し。仙人に仕へさせ給ひ

て。終に成道なるとかや。我も佛の爲なれば。御花筐とりどり。猶山深く入り給ふ。猶山深く入り給ふ。(中入)

ワキ(遠里小路中納言)ワキツレ(官人、從者等)語「九重の花の名残を尋ねてや。青葉を暮ふ山路かな。分けゆく露もふかみ草。分けゆく露もふかみ草。大原の御幸急がん。中納言「行幸を早め申候間。大原に入御候。話かくて大原に御幸なつて。寂光院のありさまを見渡せば。露結ぶ庭の夏草繁りあひて。青柳糸を亂しつ。池の浮草波に揺られて。錦をさらすかと疑はる。岸の山吹咲き亂れ。八重立つ雲の絶え間より。山時鳥の一聲も。君の御幸を待ち顔なり。ツレ(後白河法皇)法皇池の汀を觀覽あつて。池水に汀の櫻散り敷きて。波の花こそ盛なりけれ。地「古りにける岩のひまより落ちくる。岩のひまより落ちくる。水の音さへよしありて。緑羅の垣、翠蕪の山。繪にかくとも筆にも及びがたし。一字の御堂あり。蕪破れては霧不斷の香を焼き。扇落ちては月も亦常住の燈をかゝるとは。かゝる所か物すこや。かゝる所か物すこや。中納言「これなるこそ女院の御菴室にてありげに候。話軒には葛朝顔匍ひかゝり。藜蘆深く閉せ



り。あらものすこの氣色やな。調「いかに此庵室のうちへ案内申候。内侍「誰にてわたり候ぞ。中納言「これは萬里の小路の中納言にて候。内侍「それはさて人目稀なる山中へは。何とて御渡り候ぞ。中納言「さん候女院の御住まひ御訪ひの爲。法皇「これまで御幸にて候。内侍「女院は上の山へ花摘みに御出でにて。今は御留守にて候。

中納言「御幸の由申して候へば。女院は上の山へ花摘みに御出でにて。今は御留守の由候。暫此所に御座をなされ。御歸を御待ちあらうするにて候。

法皇「やあいかにあの尼前。汝はいかなる者ぞ。内侍「げにげに御見忘れは御理。これは信西が女。阿波の内侍がなれる果にて候。誰かくあさましき妾ながら。あすをもしらぬ此身なれば。恨みとは更に思はずさむらふ。法皇「調「女院はいつくに御渡り候ぞ。内侍「上の山へ花摘みに御出でにて候。

法皇「さて御供には。内侍「大納言の局。今すこし待たせおはしました候へ。やがて御歸にて候べし。女院「昨日も過ぎ今日も空しく暮れなんとす。あすをも知らぬ此身ながら。昨先帝の御面影。忘るゝ隙はよもあらじ。極重悪人無他方便。唯稱彌陀得生極樂。主上を始め奉り。二位殿一

門の人人成等正覺。南無阿彌陀佛。調「や。庵室のあたりに人音の聞え候。局「しばらくこれに御休み候へ。

内侍「唯今こそあの唄傳ひを女院の御歸にて候へ(今は唯候)。法皇「さて何れが女院。大納言の局はいづれぞ。内侍「花筐肘にかけさせ給ふは女院にてわたらせ給ふ。爪木に葺折り添たるは大納言の局なり。内侍「調「いかに法皇の御幸にて候。女院「なか／＼に猶妄執の閑淨の世を。忘れもやらで憂き名を又。もらせばもるゝ涙の色。袖の氣色もつゝまじや。地「とは思へども法の人。同じ道にと頼むなり。一念の窓の前。一念の窓の前に。攝取の光明を期しつゝ。十念の柴の扇には。聖衆の來迎を待ちつるに。思はざりける今日の暮。古に歸るかと思ひての涙かな。げにや君こゝに御慮の惠末かけて。あはれもさぞな大原や。芹生の里の細道。朧の清水、月ならで。御影や今に残るらん。

地「さてや御幸のなりしもは。いかなる時節なるらん。女院「春過ぎ夏もはや北祭のなりなれば。青葉にまじる夏木立。春の名残ぞ惜まるゝ。地「遠山にかゝる白雲は。女院「散りにし花の形見か

地「さてや御幸のなりしもは。いかなる時節なるらん。女院「春過ぎ夏もはや北祭のなりなれば。青葉にまじる夏木立。春の名残ぞ惜まるゝ。地「遠山にかゝる白雲は。女院「散りにし花の形見か

や。地「夏草のしげみが原のそことなく。分け入り給ふ道の末。女院「こゝとてや。こゝとてや。げに寂光の寂かなる。光の影を惜め、ただ。地「光の影も明けき。玉松が枝に咲きそふや。女院「池の藤波夏かけて。地「これも御幸を。女院「待ち顔に。地「青葉隠れの遅櫻。初花よりもめづらかに。なかなか様變る有様な。哀と歡感にかけまくも。かたじけなしや此御幸。柴の扇のしげしが程も。あるべき住まひなるべしや。あるべき住まひなるべしや。女院「思はずも深山の奥の住まひして。雲居の月をよそに見んとは。かやうに思ひ出でしに。此山里までの御幸。かへすがへすもありがたうこそ候へ。法皇「先つ頃ある人の申せしは。女院「六道のありさま正に御覽じけるとかや。佛菩薩の位ならでは見給ふ事なきに不審にこそ候へ。女院「勅詔はさる御事なれども。つらく我が身を案じみるに。誰それ身を觀すれば。岸の額に根を離れたる草。地「命を論すれば。江のほとりに繋がる舟。女院「されば天上の樂も。身に白露の玉葛。地「ながらへ果てぬ年月も。終に五衰のおとろへの。女院「消えもやられぬ命のうち。地「六道の巷に迷ひしなり。まづ一門西海の浪に浮き沈み。よるべも知れぬ(今は誤りて「知らぬ船のうち。海に臨めども潮なれば飲水せず。俄

鬼道のごとくなり。又ある時は汀の浪の荒磯に。うち覆すかの心ちして。船擧りつゝ泣き叫ぶ。聲は叫喚の罪人もかくや、あさましや。女院「陸の争ある時は。地「これぞ眞に目の前の。修羅道の戦。あら恐るしや數々の。駒の蹄の音聞けば。畜生道のありさまを。見聞くも同じ人道の。苦しみとなり果つる憂き身のはてぞ悲しき。法皇「眞にありがたき事どもかな。先帝の御最期の有様何とか渡り候ひつる御物語り候へ。女院「(今「恥かしながら語つて聞かせ申し候べし」の一句)其時の有様申すにつけて恨めしや。長門の國早瀬とやらんにて。筑紫へひとまづ落ち行くべきと一門申し合ひしに。緒方の三郎が心變せしほどに。薩摩湯へや落さんと申し、をりふし。上り汐に支へられ。今はかうよと見えしに。能登の守教経は。安藝の太郎兄弟を左右の脇に挟み。最期の供せよとて海中に飛んで入る。新中納言知盛は。沖なる舟の碇を引き上げ。兜とやらんに、戴き。傳子の家長が弓と弓とを取り交し。其まゝ海に入りけり。其時二位殿鈍色の二衣に。練袴のそば高く挟んで。我が身は女人なりとも。敵の手には渡るまじ。主上の御供申さんと。安徳天皇の御手をととり船舷に臨む。いづくに行くぞと勅詔あり

しに。此國と申すに逆臣多く。かくあさましき所なり。極樂世界と申して。めでたき所の此浪の下にさむらふなれば。御幸なし奉らんと。泣く泣く奏し給へば。さては心得たりとて。東に向はせ給ひて。天照太神に御暇申させ給ひて。地又十念の御爲に西に向はせおほしまし。女院今ぞ知る。地御裳裾川の流には涙の底にも都ありとはと。これを最期の御製にて。千尋の底に入り給ふ。みづからも續いて沈みしを。源氏の武士取り上げて。かひなき命ながらへ。二度龍顔にあひ奉り。不覺の涙に袖をしぼるぞ恥かしき。

三十四 梅 枝

シテ富士の妻の靈(前は里の女に化して出づ)ワキ 旅 僧

ワキ、ワキツレ(旅僧)捨てしも廻る世の中は。捨てしも廻る世の中は。心の隔なりけり。ワキ、これは

甲斐の國身延山より出でたる沙門にて候。われ縁の衆生を濟度せんと。多年の望にて候ほどに。此度思ひ立ち廻國に赴き候。ワキ、ワキツレ、道行「いづくにも住みは果つべき雲水の。住みははつべき雲水の。身は果知らぬ旅の空。月日程なく移りきて。所をとへば世を厭ふ。我が衣手や住の江の。里にも早く着きにけり。里にも早く着きにけり。ワキ、詞(今は此の句の前に「急ぎ候」これにはや津の國住吉に着きて候。あら笑止や。俄に村雨のふり候。これなる菴に宿を借らばやと思ひ候。いかに此屋の内へ案内申候。

シテ(里の女)「げにや松風草壁の宿に通ふといへども。正木の暮くる人もなく。心もすめるをりふしに。こととふ人は誰やらん。

ワキ、詞「これは無縁の沙門にて候。一夜の宿を御借し候へ。シテ、げにげに出家の御事。一宿は利益なるべけれど。さながら傾く軒の草。埴生の小屋のいぶせて。何と御身を置かるべき。ワキ、詞「ふしうちはいぶせくとも。ふりくる雨に立ちよるかたなし。唯さりとは借し給へ。シテ、げにや雨ふり日も吳竹の。一夜を明させ給へとて。地「はや此方へと夕露の。葎の宿はうれたくとも。

袖をかたしきて御泊りあれや旅人。西北に雲起りて。東南に來る雨の脚。早くも吹き霽れて月にならん嬉しや。所は住吉の。松吹く風も心して。旅人の夢をさますなよ。旅人の夢をさますなよ。

ワキ、調「いかに主に申すべき事の候。シテ、何事にて候ぞ。ワキ、これに飾りたる太鼓。同じく舞の衣裳の候不審にこそ候へ。シテ、げによく御不審候ものかな。これは人の形見にて候。これにつき哀なる物語の候。語つて聞かせ申し候べし。ワキ、さらば御物語り候へ。シテ、昔當國天王寺に。淺間といひし伶人あり。同じく此住吉にも富士と申す伶人ありしが。其頃内裏に管絃の役を争ひ。互に都に上りしに。富士此役を給はるによつて。淺間安からず思ひ。富士をあやまつて討たせぬ。其後富士が妻夫の別れを悲しみ。常に太鼓を打つて慰み候ひしが。それも終に空しくなりて候。逆縁ながら吊ひて給はり候へ。ワキ、かやうに委しく承り候は。其古の富士が妻の。縁の人にてましますか。シテ、いやとよそれは遙かの古。思ふも遠き世語の。縁といふ事あるべからず。ワキ、謡「さらば何とて此物語。深き思の色に出で。涙を流し給ふぞや。シテ、謡「のう何れも

女は思深し。ことに戀慕の涙に沈むを。などか哀と御覽せざらん。ワキ、謡「猶も不審は残るなり。形見の太鼓、形見の衣。こゝには殘し給ふらん。シテ、主は昔になりゆけども。太鼓は朽ちす苦むして。ワキ、鳥驚かぬ。シテ、此御代に。池に住むもかひなき池水の。住むもかひなき池水の。忘れて年を経しものを。又立ち歸る執心を。助け給へと云ひ捨て。かき消す如くに失せにけり。(中入)ワキ、謡「それ佛法様様なりと申せども。法華はこれ最第一。ワキ、謡「三世の諸佛の出世の本體。衆生成佛の直道なり。ワキ、なかんづく女人成佛疑あるべからず。ワキ、ワキ、謡「二人、一者不徳作梵天王。二者帝釋。三者魔王。四者轉輪聖王。五者佛身云何女身。地即得成佛。何疑ひかありそ海の。深き執心を晴らして淨み給へや。或は若有聞法者。或は若有聞法者。無一不成佛と説き。一度此經を聞く人成佛せずといふ事なし。唯頼め頼もしや。用ふ燈火の陰より。化したる人の來りたり。夢か現か見たりともなき姿かな。ワキ、謡「ふしぎやな見れば女性の姿なるが。舞の衣裳を着し。さながら夫(男)の姿なり。聞きてはありつる富士が妻の。其幽靈にてましますか。シテ、謡「げにや碧玉の寒き蘆。雖蘆に脱すと